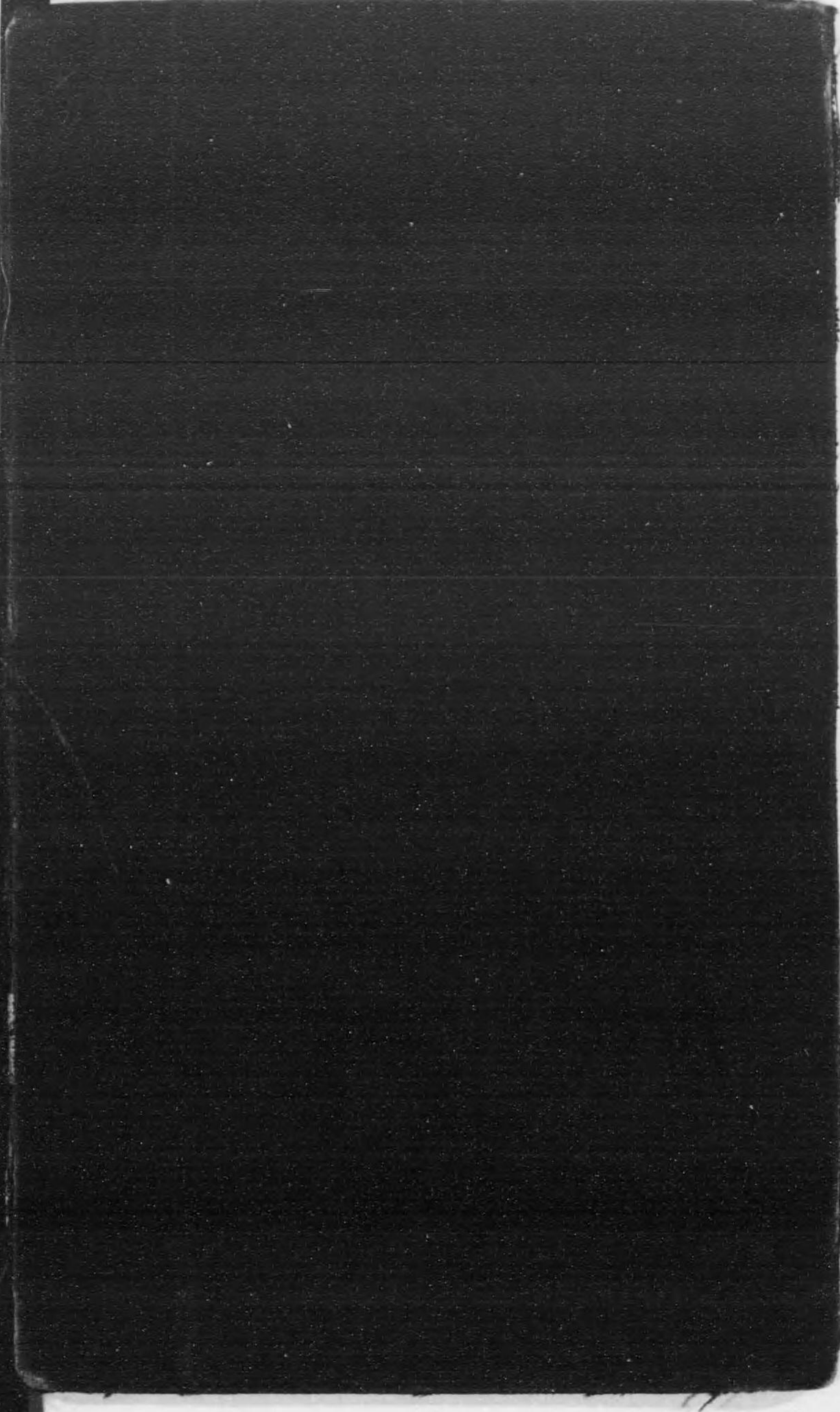


始



323
164

予が落第するに當り、
諸君、
全學生諸君

勉強

以上
End

164
723-244



若くは先生の

Handwritten notes in cursive Japanese characters, including the characters '若くは' and '先生'.

bad teacher

大正
9. 3. 31
購本

→ こんちをため之本はない

前 書 き

澤山英文法の書があるけれども、日本で出てゐるものを一わたり集めて見ると、特色のあるものは十種あまりに過ぎない。他は何れも何等特色がなく、甲と乙とを區別することさへも出来ない。私は英文法の邦人の手に成れるものゝ多くが出てゐることを知つてゐる。而も敢て自づから一書を加へんとするは、自づから一特色を有すると信ずる自分の著述がその中に加はる權利を必要を感じたからだ。

此頃は表のやうになつた英文法書が流行である。一とIとAとaと『い』と『ア』と甲とを巧みに用ゐて一目瞭然たらしめんとしてゐる。これもよい。然し私の著述は之とは全く反對である。もしかう云ふ方法を取つて記憶に便せんと欲する學徒は私の著述から學徒自づから作らねばならぬ。私はわざと此のカタログ式を避けて自由の講座に立つて思ふ存分に述べたいことを述べて見たかつたのである。

私の本は受験を目的として書いたものではない。併し受験者が用ゐても大に役立つものであると自づから自惚れる理由がある。受験に既に中學で一と通りも二通りも英文法の講義を聴き、之を暗んじ、樂して來られた諸君である。それらの諸君をして再び教科書の如く、義に目をさらさしむると云ふのは無益な注文である。私は此の著述、此等の諸君によりて、電車の中、汽車の中、ソファの上、寢床の街頭に立つ時も、林野をさまよふ時も、講談を読むと同じく、通學を読むと同じ興味と氣安さを以て読み耽られんことを望むものゝ。若し私の著述から表を作つて行往座臥に目をさらすならば受験の資格は正に十分と云ふべきである。

受験を目的として書いたのでもなく、英語の専門家を作る目的も無い。私は Japanese culture を作り上げる準備として、英語の知識を完全に近いものとし、やがて諸君が自づから座右

い英米の辭書さへあれば、正確に英文を讀み且つ書くことの出来るやうに願つたのである。英人は English culture のすぐれたることを誇り、獨逸は Deutsche Kultur のすぐれたることを誇りとしてゐる。日本人がその口吻を眞似て English culture に同じ、Deutsche Kultur に同する必要はない。英語をやるものは English culture を學べなご云ふものがあれば實に愚の骨頂である。日本の鶯は英國の nightingale とはちがふやうに、日本の言語は英國の言語とはちがふやうに、日本の culture は日本特有のものでなければならぬ。

若し日本の culture さ云ふのゝ意義が定まつてゐないさすれば今に之を作らねばならぬ。兎に角立派な Japanese culture を持つために外國の精神と文明とを學ぶ必要がある。併せて我が歴史と文明とを海外に宣傳する必要がある。その之を爲すには外國語の正確な知識が必要であるさ考へる。

今日英語の書物を書く人も、英語の教師も一度に英語の知識の揃ふやうに揃ふやうにさ心掛けてゐる。これは間違つた考であるさ思ふ。英語などさ云ふものは、1 から 26 まで揃へればいさ云ふやうなものではない。無限の知識を求める爲めに不斷に積み重ねて行くのでなければならぬ。中學五年間で英語の知識の大體を揃へて了はうさしたり、五卷の讀本で英語の用法を凡て知らさうとするのは間違つた考である。

英語の大體の知識を揃へるさ云ふことがまた難しいことである。ごこまでが大體の知識であるかさ云ふさ一人として答へることは出来なからう。私には私の考があるし、他人には他人の考があらう。

私の此の本を讀んでこれで大體の知識が具つたさ思つてくれては困る。たゞ英語の知識を進めてゆく上の一人の長い道伴れであればよいのである。これをたよつて益々多くの英書を讀まれんことを希望する。本書に引いた例には現今行はれてゐる中學の教科書から選と採つたものが多い。これも併せて記して置く。

一九一六年五月一日

花園綠人

目次

	PAGE
第一編 序論	1
① 如何にせば英文に熟達し得るや	1
② 英語を學ぶ態度と方法	2
③ 英文法を輕視すべからず	6
④ 日本文と英文との相違	7
⑤ 音節	9
⑥ 文の二大部分	10
⑦ 文の四種類	10
⑧ 修飾語	11
⑨ 目的語	12
⑩ 補語	12
⑪ Number と Person	13
⑫ 動詞の變化	14
⑬ 現在と過去と現在完了と永態	15
⑭ Have と has	17
⑮ 名詞の複數	19
⑯ Case	19
⑰ 代名詞の格	20
⑱ 自動詞と他動詞	21
⑲ 受身	21
㉑ Sentence	21
㉒ 八品詞	22

	PAGE
第二編 名詞	25
○ 名詞とはどんなものか	25
○ 普通名詞	26
○ 固有名詞	28
○ 人名地名の呼び方	29
○ 物質名詞	30
○ Much と many の區別	32
抽象名詞	32
集合名詞と多数名詞	35
名詞の複数	37
Foreign plurals	40
複数と apostrophe	42
合成名詞の複数	44
単複同形	46
単数と複数との意味の相違	46
複数の形の単数名詞	47
練習問題	48
名詞と 's	51
名詞の性	53
形容詞としての名詞	55
Objective adverbial	55
練習問題	57
She is beauty itself	77
第三編 冠詞	59
不定冠詞の意義と用法	59
練習問題	66
○ The の意義と用法	68
練習問題	84

	PAGE
冠詞の省略	85
練習問題	91
第四編 形容詞	93
形容詞の性質及び其の種類	93
代名形容詞	95
関係形容詞	96
数量形容詞	98
性質形容詞	99
形容詞の比較	101
Absolute Superative	103
形容詞の置き所	104
形容詞の用例	107
1. A is larger than B, but C is the largest of the three	107
2. I am taller than he...	107
3. The price is high	107
4. He is better	108
5. Better と best	108
6. Other	108
7. Another	109
8. I am hungry	109
9. Some	110
10. Some と any	110
11. Something, nothing	111
12. Any と every	111
13. None the less	111
14. Less と least	112
15. First を含める句	113
16. Double	114

17. No more than...	PAGE
練習問題...	114
數詞...	115
數の読み方...	117
分數の読み方...	119
	120

第五編 代名詞

代名詞とは如何なるものぞ...	121
人稱代名詞	121
Either you or he is.....	122
You as well as I are.....	124
代名詞の特殊の意義	124
He seized me by the hand	125
Thou, thy, thee	128
Mine, yours 等	129
Your Excellency is...	130
Reflexive pronoun	132
It の用法	133
關係代名詞	135
It was him that I sent there	136
Which	137
That	139
As	140
But = that not	140
It is I that went there	140
I will reward whoever (=any one who) can answer	141
Whoever, whomever, whatever, etc.	142
Whatever it may be	142
疑問代名詞	143

	PAGE
What と how との區別...	145
Which do you like better	146
指示代名詞	146
This と that	147
The same...	149
All	149
Both	149
One	150
Some と any	150
Each other と one another	151
練習問題	151

第六編 動詞

自動詞と他動詞	153
二重の object	155
完全動詞と不完全動詞	157
Cognate object	158
Complement	158
<u>自動詞で受身の意味となる場合</u>	161
自動詞と前置詞との結合	162
Reflexive verb	163
Avenge と revenge...	164
Reflexive object の省略	165
Voice	165
Active voice と passive voice の表	168
Compound verb	169
Get + 過去分詞	170
Have or get + 目的 + 過去分詞	170
Become + 過去分詞	170

	PAGE
Make+目的+過去分詞	170
We are determined to go	171
I was born in 1870	172
Dative verbs	173
練習問題	174
Mood	175
Tense	176
Tense の作り方	178
The present indefinite	180
I am knowing that き云はず	181
Count Okuma returns to-day	182
When war breaks out	182
I did say so	183
新聞記事見出しのこき	183
Who did it?	185
一般現在に関する和文英譯	186
規則動詞と不規則動詞	188
不規則動詞表	189
試験問題に現はれたる動詞の變化	201
The past tense	201
一般過去に関する和文英譯	203
The perfect tenses	205
The present perfect tense	205
見たことがあるか=Have you ever seen.....?	208
If you have knit the stockings by noon	209
I have been doing it	209
現在完了に関する和文英譯	210
The past perfect tense	210
Sequence of tenses... ..	213

	PAGE
The future perfect tense	214
Shall き will	215
Subjunctive mood	224
If it be	226
If it should be so	228
富んでゐたら、併し富んでゐない	229
Should き would	232
物語中に出でたる would き should	233
Would き should に関する誤用	234
併し.....でなかつたから.....でなかつた	236
希求文の形	237
習慣を示す would	239
意志をあらはす would	239
Would = will	240
Should = must	240
Fitness を示したる should	240
『きは』の should	241
Potential mood	241
Can	241
May	243
Must	245
The imperative mood	246
第七編 ○ Infinitive	248
Infinitive きは何か?	248
Infinitive の分類	249
形容詞を形容する infinitive... ..	251
.....enough to.....	252
.....too.....to	252

	PAGE
Is to... ..	253
Have to go	254
Ought to do	254
See him swim... ..	254
Make him go... ..	255
Have him come	255
I had my hair cut	256
Had better do	256
Can not but laugh... ..	256
第八編の分詞	257
堺枯川君の失敗	258
分詞の分類	259
第九編のGerund	263
Gerundの三種の用法	263
Gerundと主格との関係	264
Gerundを含む idioms	264
第十編の副詞	266
副詞は何を modify するか?	266
形容詞から副詞の作り方	267
副詞の種類	268
Pronominal adverbs	269
副詞の用法	269
Very と much	269
Not	271
Yes と no	271

	PAGE
Why	273
Ago, since, before	274
名詞としての副詞	274
More	275
There	275
Only の位置	275
Even	276
Probably と possibly	276
前置詞を modify する副詞	277
So に就て	278
第十一編の接続詞	284
接続詞の意義	284
Conjunction の二種	284
構造上よりの區別	285
Simple Conjunction の注意	285
Phrase Conjunction の注意	286
Correlative Conjunction の注意すべきもの	287
第十二編の前置詞	288
前置詞の定義	288
前置詞の示す諸関係	288
前置詞と他の語との連結	295
第十三編の間投詞	296

英文法の先生正誤表

誤	正	頁	行
The Tokugawa Chapter seven 或は the sixteenth.....	The Tokugawas Chapter seven 或は the seventh chapter と讀んでいよ。	78	25
May sixteen 或は the sixteenth of May.....	May sixteen 或は May the sixteenth 或は the sixteenth of may	120	2
敦兒は母音の前に h を入れる傾向がある。	敦兒は母音の前に h を入れ egg を hegg の如く云ひ、また母音の前に h を落して ham を am の如く云ふ。	120	3
氣が付いてゐる.....	氣が利いてゐる.....	127	5
my でなくて his である。	his でなくて my である。	128	9
新聞記事を書く外に	新聞記事を書く時に	137	4
此等のものを人畜に死傷なし the 25 内閣	此等の中 who, what を損害なし the 25th 内閣	144	5
無聲で終る (3) hide	p. f. sk 以下.....十行終り迄省く。 (1) hid	166	25
(5) Verb として	(5) Adverb として (5) Adverb として用ゐる (接續語の次に)	167	7
	They are not well acquainted with each other though attending the same school. (同じ學校へ行つてゐながら互によく知らないのだ。	167	15
(5)	(6)	180	5
(6)	(7)	226	2
		233	22
		258	28
		260	10
		260	10
		260	15



如何にせば英語英文に熟達し得らるゝか

英語英文に熟達するには多讀をすること、精讀をすること、暗記をすること、練習をすること、之に盡ると思ふ。精讀をし暗記をすること云ふ中には英語の文法を調べながら進めよ云ふことも含まれるのである。字引もよく引けよ云ふことも含まれる。先置の英米人に問ひ質せよ云ふことも含まれる。發音に注意せよ云ふことも含まれる。英米の人情風俗を調べよ云ふことも含まれる。日本文との比較研究をせよ云ふことも含まれる。英文の調子を會得せよ云ふことも含まれる。新しい用語に注意する云ふことも含まれる。それらは誰れもいふことであるし、今並べただけでもお分りになる事と考へる。私は今英文法の骨子を述ぶるに先立つて英語を學ぶ態度に就て諸君の参考までに私の意見を述べることにする。

英語を學ぶ態度と方法

物を學ぶ時にはその態度が大切である、私が學校に居た時に弓を習つた。その時に初めの一日は弓を持つた態度に就てやかましく教へられた。その態度が充分でないに決して上達しないと言はれた。又此の頃の文壇では作家の態度と云ふことをやかましく云ふ。批評も亦其態度に土臺を置くやうである。これはまことにさうあるべき事である。或る書家の話の一つの點を書くに三枚ほどの紙を通す氣持で書かなくてはならないと云ふことがあつた。さう云ふ氣持で書くの、書かぬ

いのでは、出来榮えに大した相違が出来る。これが頗る神秘的なことで英語を學ぶ上にも大いに参考になる事であると思ふ。

英語を學ぶにも態度が肝心である。所が世間の多くの教師諸君は此の點に注意を缺いてゐると思ふ。又英語を學び初める少年少女に於ても、此の注意が充分に拂はれてゐないと思ふ。私の最近の研究の結果を發表するに、かうである。私は此の原稿を作る材料とする爲めに、十人ばかりの英語を學び初めた少年を苦心して集めた。そして五日ばかり教へて見た。私は試みに、

What is this?

It is a hat.

What is that?

It is a hat.

What is this?

This is a hat.

これだけの事を教へた。そして初めはその態度と云ふことには慥に憚らずに教へた。すると、少年の多くの頭は、眼の前に hat を描いて居ないことを發見した。文字を上の方で覚えてゐるのみであつて This is a hat と云つても「これは帽子だ」と云ふことを心の中でほんまに云つてゐるのではなかつた。だから少年をして指を hat に觸れしめて置いて、私が What is that? と云ふと、This is a hat とは言はないで That is a hat と答へた方が多かつた。これは心で云つてゐるのでなくて、口の先きで云ふ一つの證據である。This is a hat と云つたならば、その場合其處に hat が無くとも、hat をまざまざと頭腦の中に描かねばだめだ。言語と云ふものは符號に過ぎないのであるから、その實體に關れないでは、言語は無意味になつて仕終ふ。「實際これが帽子だ」と思はなければいけない。その場合に hat を前において教へるのは無論だが、それでも學ぶ者の態度がきめてないで、その帽子も幻となつて終つて、何にもならなくなる。

この態度を取らせる必要は云ふ迄もないことで、「帽子」だと思つても居ないのに、「It is a hat」と教へても何にもならないではないか。

理想を云へば、英語國へ行くことである。ほんまに水が飲みたい時に、「I want a glass of water.」と云はなくつては水も飲めないとするれば、その時に覺えた英語は決して忘れるものでない。Lord Avebury の「On the Senses, Instincts, and Intelligence of Animals」の中に自分の非常に愛してゐる犬に文字を覺えしめやうとして、種々の cards を作りその一々に tea とか water とか walk とか food とか print して、茶を與へる場合にも、食物を與へる場合にも、一の card をその皿の上へ載せて置いて、その card を取らなくては飲むことも食べることも出来ぬやうにした。斯くして終には、food の欲しい時は food と print してある card をくわへて来るやうになつたと思ふことが書いてあつたが、面白いことだと思ふ。これは desire と文字との關係であるが、desire と言語とを結び付けることの大切なことも此の一例で分ると思ふ。併し諸君の多くは英語國に行く機会を有たないであらうから、此は理想として置いて、成る可く之に近い方法を取らなければならない。それは前云つた學ぶ者の態度を内容と密接な關係をもたしめることである。會話書を見て、「I want a glass of water」と云ふ句に接したならば、直に口なべすりをして、喉がかわいて水を飲まないではおられないやうに深く感ずることが必要である。

私は此のやり方を廣くおし廣めて、有らゆる本を讀む場合にも、その本の中の人物になつて讀まなくては駄目だと思ふことを切論したい。言語は符號なのであるから完全なものではない。言語だけによつて讀んではかう云ふ言葉はかう云ふ意味だと極くざつぱに覺えて了ふこととなる。若し line と line との間を讀むやうにすれば、かう云ふ心持はかうした言葉で出てゐるのかと更に一層言葉の背景を掴むことが出来るのである。たとへば Charles Dickens の「A Christmas Carol」の詞の方に、Oh! but he was a tight-fisted hand at the grindstone, Scrooge! a squeezing, wrenching, grasping, scraping, clutching, covetous old sinner! Hard and sharp as flint, from which no steel had ever struck out generous fire; secret, and self-contained, and solitary as an oyster. The cold within him froze his old features, nipped his pointed nose, shrivell-

ed his cheek, stiffened his gait; made his eyes red, his thin lips blue, spoke out shrewdly in his grating voice. A frosty rime was on his head, and on his eyebrows, and his wiry chin. He carried his own low temperature always about with him; he iced his office in the dog-days; and didn't thaw it one degree at Christmas. さ云ふ一節を言葉だけを日本語に render した所で、Scrooge さ云ふ人物ははつきりさばしないであらう。言葉を通して實體に触れるさ云ふことが肝要である、實體に直に触れるやうになつておれば、或る思想をあらはすに唯一の最も適當な言葉を思ひ浮べることが容易になる。

以上は英語を學ぶ時の態度に就てある。方法に就ては種々あるであらうが、私の平生考へてゐることを秩序なしに擧げて見やうと思ふ。まづ第一に諸君は出来る教師に就てよく問ひたすことである。諸君は問ひたすことをしなければ駄目である。たゞ教師の講釋を聞くだけならば講義を読むさばかりはない。たゞ自分の胸に起る種々の疑點を納得出来るまで聞くがい。その爲めには教師は充分に出来る人を選ばねばならぬ。若し諸君が自分の意志を傳へ得るだけに英語を使用し得るに至らば、教育ある英人なり米人なりに師事するがいと思ふ。

諸君の家なり、親類なりに赤坊があるとしたならば、赤坊が如何にして日本語を覚えて行くかを細かに觀察することである。私の觀察に依るに、赤坊は新しい言葉に會ふと幾度も口に出して繰返してゐるやうである。赤坊は初め「観音へ行かう」「上野へ行かう」「日比谷へ行かう」を一つ一つ獨立して覚えるやうである。決して「観音へ」の代りに「上野へ」さか、「日比谷へ」さかゝ入るのだと理解して覚えるのではないと考へる。要するに赤坊は大人の言葉を模倣するのである。そのまゝ模倣するのである。英語の讀本に "This is a hat." "This is a pen." "This is a bird." "This is a book." "This is a hen." さあるとしたら、諸君はそのまゝ覚え込まなくてはならぬ。"This is a hat." を覚えたから、あこは pen さ bird さ book さ hen さ云ふ風な覚え方をしてはいけないと思ふ。斯くの如くして、澤山の同じ形式が頭腦の中に出来上れば、This is a table さか This is a flower さ云ふことは分け

なく云へるやうになる。初めから文章を組立てさせたり組立てやうにすることは危険である。何故なれば This is a hat の形成がはつきり頭腦に入つておなければ「これは少年である」さ云へさ云つても、"This boy is" さ云つて了ふかも知れない。かういふことをさせることは悪い結果を生むとも、いゝ結果を生むことは無いと思ふ。

かうして、澤山の平易な言ひ方を覚えたらば、段々種々の本を読むがい。それと同時に英字新聞を必ず毎朝讀むことにするがい。且つ歐米の英文の雑誌なり新刊書を讀むがい。澤山書物を讀むことは、正確なる解釋力を養ふ上から云つても、文章を書く上から云つても大切なことである。又文章を常に書くことが必要である。「己れば英文の書物が正確に讀めればいゝのだから英文などは書けなくさもいゝ」さ云ふものがあるならば、これほど馬鹿氣たことはない。文章が書けなくて正確に書物の分らう筈はない。又分つたとしてもそれは徹底的に分つたのではない。たゞさへ日本語にしてもさうでなる、夏目漱石氏の作物なり、青年作家の作物なりを、吾人が讀んだ時と、下宿屋の下女が讀んだ時とでは、その appreciation の仕方が違ふであらう。直に徹底的に文字を解しやうとするならば、吾人自づから文字を縦横に驅使し得なくては駄目である。文字を使つて見て初めて其文字の眞の意味が、解ると思ひたい位に私は考へる。たゞさへ一つの道具にしても、使つて見た方が、使はないで唯見てゐるよりも、一層よくその道具を知る所以ではあるまいか。

英文を書く上には充分細かい注意を以て英米の新聞なり雑誌なりを讀んでる必要がある。その英文が genuine であらんことを望まねばならぬ。その爲めには私は和文をそのまゝに英譯することに反對しなければならぬ。たゞさへ「昨夜夜半四谷愛佳町四谷病院の裏手より出火、病院は無事、高木方一軒にて鎮火」さ云ふ材料を英譯するに、"Fire endangered the Yotsuya Hospital in Aisumicho, Yotsuya, when the home of H. Takagi, in the rear of the hospital, was destroyed at midnight last night." でいゝと思ふ。この中に鎮火する (the fire was extinguished; the fire was put under control) さ云ふ字が入つてゐないが、英文のよく

分る人ならば、これでいゝことを直覺し得ると思ふ。また此の英文を逆に日本語にする場合に、「高木方一軒焼けたり」よりも「高木方一軒にて鎮火」の方が無論いゝことは日本語のよく分る人ならば直覺されることである。又日本語で「歐州の形勢に變化なし」と云つて「變化あらず」と云はないことなども、理窟ではない。かうふことが英文には澤山にある、これは多讀しなければ分らないことである。「變化なし」を「變化あらず」とすましておけば、それは genuine なその國の言葉にはなつてゐない。和文英譯本位から言へばこんな事はどうでもいゝだらうが、少くとも文章を書かうとする者はかうした點に細緻な注意を拂ふべきである。かゝる日本語と英文との構造の微妙な相違が分つて來て、英米書籍を徹底的に讀むことが出來、又文章の面白味が分るのであると考へる。

○ 英文法を輕視す可らず

『英文法の先生』は英文法の専門の知識を諸君に與へん爲めに本書を講ずるのではない。予は諸君が英語に就て今よりも一層確かな知識を有するやうになり、英米の新刊書、雜誌、新聞を充分に讀みこなすことの出来るやうに、日本の新思潮なり、諸問題なり、自己の研究なり、發明なり、思想なり、信仰なりを明解な英文に書き綴ることの出来るやうに、その爲めの準備として英文法の基礎の知識を講述しやうとするのである。予は一般英語を學びつゝある學生を英文法の學者に仕立て上げやうとする一部英學者の態度を批難せんことを欲するものなれども、また徒らに文法を輕視してかゝる速中にも加擔する事は出來ない。餘りに文法の法則にのみ凝り固まつて、最近の慣用に不慣れであつたり、若くは『かういふ時にかうあることがある』と云ふのを、『かういふ時にかうあらざるべからず』と云ふ風に解釋したりするのは、文法に呑まれたのであつて、英語を死んだものとして仕終ふものである。又文法を輕視して、譯けのわからない手紙を書いたり、折角の名文を書きながら所々に玉に瑕を残してゐるやうでは感服出來兼ねる。

英文法の大體の骨組を知つて本を讀み、本を讀みながら英文法を參

照し、文を書きながら英文法を見るさ云ふやうにして、英文の性質を呑み込めやうにするがよい。一度讀んだ英文法をいつまでも忘れまいと無理に努力するのは無益な事である。忘れたら忘れたなりでいゝ。その折々英文法を引くり返すことを怠らぬやうにすればいゝ。かくして次第に自分自身のうちに英文法が綴り込まれて仕終へば、文章を讀みながらも、文章を書きながらも、『あゝあれは第一章の第二節のそこにあつたのだ』など大騒ぎして、手間の取れた思ひだし方をしなくとも濟むやうになる。さうならなければ、英米人が書くやうに文章を書き、英米人が讀むやうに文章を讀み、英米人が話すやうに會話をする事は困難であらう。この域に進んだ人は英文法を超越した人である。此の域に達した人が『文法などはどうでもいゝ』と説教して歩いたまで、御本人は英文法が身體に入つてゐるからいゝけれども、若し諸君がこれをまに受けて文法を初めから度外視して掛つたら、折角英語を學びながら、何年経つても完全なる發達を遂げることが出來なくて、いゝ馬鹿を見ることであらう。

隨分と學生のうちには、文法の骨子さへも充分に呑み込めてゐないものだから、さんでもない譯をつけて教師を驚かすものがある。例へば格 (Case) のことも、數 (Number) のことも、時刻 (Tense) のことも、働詞の自他 (Transitive or Intransitive) のことも、能動受動 (Voice) のことも、働詞の法 (Mood) のことも、主語或は主格や (Subject) や賓辭 (Predicate) のことも萬事お構ひなしで、我意一天張りで英文を征服してかゝらうとするものがあるが、それは愚なことである。尙ほ甚しきは一つの clause の中の語 (Word) や、句 (Phrase) を勝手に近所の clause に結びつけて譯して平氣なものもある。かうなつては病膏盲に入つたものである。かうならない内に、文法の骨子を心得てかく必要がある。

○ 日本文と英文との相違

日本文と英文との構造の相違の重なる點は日本文では終りまで聞かなければ完全に一つの事が分らない。『明日行きます』と終りまで聞

かなければ、『行きません』だか、『行きませんか』だかも分らない。所が英文になると反對に一つ一つましまりがついて行くやうに組立てられる。『行きませんか』と云ふのが最初に出て来る。それからそれに一つ一つくっついて意味が益々はっきりして来るのである。

例へば日本語では

私、昨日、妹と、上野、へ、行きました
と云ふ。『私、昨日』だけでは何の事だか分らない。これを日本語の順序に従つて英語を當てはめれば、

I yesterday my sister with Uyeno to went.

所がこれでは英文にはならないのである。英文でこれだけのことを書くと、

I went to Uyeno yesterday with my sister.

となる。これでも分るやうに、

I went. (私は行つた)

で兎に角、何處かへ行つたと云ふことは分る。さて何處へ行つたか?

I went to Uyeno. (私は上野へ行つた)

とあるので、上野へ行つたと云ふことが分る。次に尋ねたいのは何日行つたかと云ふことである。

I went to Uyeno yesterday. (私は昨日上野へ行つた)

で昨日と云ふことが分る。一人で行つたかどうかと云ふ疑問に對しては with my sister (私の妹と共に) とあるので、一人で行つたのではない事が分る。

かくの如く英語では一つ一つ築き上げて行く風な、一つ一つ問ひつめて行くやうな所が特色である。なほ二三の例を擧げると

あの木の上に何があるか (日本文)

What is there on that tree? (英文)

『あそこに何があるか?』あそこ何處だ? 『木の上に』と云ふ順序を見よ。

公園へ行きませう (日本文)

Let us go to the park! (英文)

『行きませう』、何處へ? 『公園へ』と云ふ順序を見よ。

あの女に手紙をやらなければならない (日本文)

I must write a letter to her. (英文)

『私は書かなければならぬ』、何を? 『手紙を』、誰れに? 『彼の女に』と云ふ順序を見よ。

音 節

前項に三四擧げた日本語に對照した英文はあれで一つ宛の纏つた思想の盛られたもので、あれを文 (Sentence) と稱する。文には何處まで行つても切れ目がなくて纏りの容易に見つけられない長い文もあれば、先に掲げた例に於ける如く簡単な文もある。そしてその文を形作る一々の語を英語では word と云ふ。支那の文字が扁だの冠だので出来てゐるやうに、英語の word は letter (文字) が幾つか集つて出来てゐる。例へば Park (公園) と云ふ語は p と a と r と k との四つの letters で出来てゐるのである。

日本語で天照大御神を讀む時にアマテラス、オオ、ミカミと讀むであらう。すなはちこれには三つの切目がある。かくの如く英語には語に切れ目のある字がある。多いのになると五段にも六段にもなることがある。例へば full (充ちてゐる) と云ふ語は切れ目がないけれども、beautiful (美しい) と云ふ語は beau-ti-ful と三段に分れる。この一段一段を英語では Syllable (音節と譯す) と云ふ。full, dog (犬), park (公園), lamp (ランプ), pen (ペン), shirt (シャツ), watch (時計) などは一音節である。airship (空中飛行船) などは二音節から出来てゐる。此等は自分で發音して見るに幾音節から出来てゐるかは容易に判断のつくものである。fire (火、火事) などを fi-er と分けて發音するのが日本の學生の通弊であるが、これは一音節の語であるから fir と發音しなければならぬ。日本の假名で發音を記すことは困難であるけれども、強めて記せば、ファイ、アーでなくてファヤの如く發音するのである。

○文の二大部分

文を云ふのは前にも述べたやうに或る物を主題として一の纏つた思想を表はしたもので、その文の中の主題となつてゐる部分を Subject (主語或は主格) と云ふ。

Boys run. (少年等が走る)

Some boys run fast. (少年等が早く走る)

上の boys や some boys はその文の主題となつてゐるもので、すなはち Subject である。

この Subject に就て或る何事かを述ぶる部分を Predicate (述語) と呼ぶ。

Boys run.

Some boys run fast.

上の run や run fast は boys や some boys を云ふ主語に就て述べてゐる部分なので賓語である。

この例などでは主語と賓語との関係が明瞭であるが複雑なる文章にありては之を發見するに明晰なる頭腦を要することがある。

○文の四種類

文に四種類がある。

一には平に書き流したものである。

You are a good girl. (おまへはおさなしい女の子だ)

You study English. (おまへは英語を學ぶ)

二には疑問文である。

Are you a good girl? (おまへはおさなしい女の子か)

✓ Do you study English? (おまへは英語を學ぶか)

Why do you study English? (何故おまへは英語を學ぶか)

三には命令文である。

Be a good girl. (おさなしい女の子であれ)

Study English. (英語を學べ)

四には感嘆文である。

What a good girl you are! (何ておさなしい女の子でおまへはあるよ)

✓ How hard you study! (まわ大変おまへは勉強するよ)

○修飾語

Subject (主語) 又は Predicate (賓語) が色々な言葉から出来てゐる。その全體の主語の中に眞の主語とそれに附屬してゐるものがあるべく、賓語の中にも同様に、眞の賓語とそれに附屬してゐるものがある。例へば

梅咲く

さへば、『梅』が主語で『咲く』は賓語である。さ云ふことは明白である。然るに

わが宿の梅大いに咲く

さなれば、『わが宿の梅』が全體の主語で『大いに咲く』が全體の賓語である。

Boys run. (少年等が走る)

Some boys run quickly. (少年等が速く走る)

上の文では boys が主語で run が賓語であるが、下の文では some boys が主語で run quickly が賓語である。併し下の文の主語 some boys の中、何れが重いかさ云へば boy であつて some は boys についたものである。この some を modifier (修飾語) と稱す。modifier は modify するものさ云ふことで、modify は意味を狭く限るさ云ふ字である。例へば boys だけでは two boys ともなり、many boys ともなり、様々の意味をつけることが出来るから意味を考へる上に大なる自由があるけれども、some を云ふ形容詞をつけて了ふと『四五人の』と云ふ意味がついてそれで餘程意味が狭く限られるわけである。それでかう云ふ言葉を modifier と云ふのである。run quickly の quickly も modifier である。

○ 目的語

私が彼を打つ (I strike him) と云ひ、私がそれを讀む I read it と云ふ時、何をどうするを云ふ、そのどうかするを云ふ言葉を動詞 (Verb) と云ひ、どうかされるものを動詞の目的 (Object) と云ふ。I strike him の him や I read it の it は、それぞれ strike 及び read と云ふ動詞の object である。成る程 I strike だけでは誰を打つのやら分らないけれども him と云ふ字がつけば意味が狭く限られるわけだから him は modifier ではないかと思ふ學生があるかも知れないけれどもこれは動詞の object であつて modifier ではない。modifier と云ふのは some boys run quickly の some, quickly のやうなもので、この二語を省いて boys run だけ残つても文章として存立し得るものであるから、いは白粉をぬるやうなものである。よくするだけでそれがなければ文章がこわれると云ふやうなものではない。だから譯して修飾語とされてゐるのである。所が I strike him の him をさり、read it の it を取つては言はんことを欲するこの根本精神を奪はれたので文章を爲さないのである。然も I read と云へば讀書すると云ふことになるが I read it (私はそれを讀む) とは全く異つたものとなつて了ふ。その他の例を以てすれば I like English の English は like の object である。この English がなくなつては like が振られたやうなもので、like は浮ぶ潮がなくなるわけになる。

○ 補語

動詞 (Verb) の動作を蒙らないで而かもその足らざるを補つて賓辭 (Predicate) を完備させるものを補語 (Complement) と云ふ。

They are honest. (彼等は正直である)

They became soldiers. (彼等は兵士になつた)

此の例で honest も soldiers も Complement (補語) である。これがなくて they are や they became だけでは何とも纏りが見つからない。而かも honest なり soldiers は are や became の動作を蒙らない。They read it

(彼等がそれを讀む) と云ふ時の it は read と云ふ動詞の動作を蒙るけれども honest や soldiers は are や became の動作をも蒙らない。そして補語は主辭と同一物であるか、目的と同一であるかでなければならぬ。honest であるのは誰れかと云ふに they である。すなはち they と honest である人とは同一の人である。かう云ふのを Subjective Complement と云ふ。又目的 (Object) の方の場合は They made him happy (彼等が彼を幸福にした) の例の如く they made him だけでは意味を爲さない。何か made him の次に來なければならぬ。すなはち happy は him と云ふ目的 (Object) に係るものである。かう云ふのを Objective Complement と云ふのである。

○ Number と Person

名詞に單數と複數とある。代名詞にも單數と複數とがある。單數と云ふのは一つのことで、複數と云ふのは二つ以上のことである。

(It) is a dog. (それは犬だ)

この文に於て dog は單數の名詞であり、it は單數の代名詞である。名詞を複數にする方法は後に之を述べるが、代名詞の Number (數) と Person (人數) に就て述べんに

	〔單數〕 (Singular)	〔複數〕 (Plural)
〔第一人稱〕 First Person	I (私)	We (我々)
〔第二人稱〕 Second Person	You (汝)	You (汝等)
〔第三人稱〕 Third Person	He (彼) She (彼女) It (それ)	They (彼等)

I, you, he, she, it これだけは單數であり、we, you, they これだけは複數である。そして I や we は第一人稱と云ひ、you (汝) と you (汝等) とは第二人稱と云ひ、he, she, it と they は第三人稱と云ふ。

○ 働詞の變化 (1)

動作と状態の語が働詞 (Verb) である。働詞は主辭 (Subject) の數 (Number) と人稱 (Person) とに隨つて變化する。

	〔單數〕	〔現在〕	〔過去〕	〔複數〕	〔現在〕	〔過去〕
〔第一人稱〕	Iamwas	Wearewere
〔第二人稱〕	Youarewere	Youarewere
〔第三人稱〕	Itiswas	Theyarewere

だから I am Taro (私は太郎である) と云ふべきを、I is Taro とか I are Taro など云つては間違ひである。下の例を觀よ。

- I am a student. (私は學生である)
 You are a student. (汝は學生である)
 He is a student. (彼は學生である)
 She is a student. (彼女は學生である)
 It is a dog. (それは犬である)
 We are students. (我等は學生である)
 You are students. (汝等は學生である)
 They are students. (彼等は學生である)
 You were students. (汝は學生であつた)
 I was a student. (私は學生であつた)
 He was a student. (彼は學生であつた)
 They were students. (彼等は學生であつた)

○ 働詞の變化 (2)

以上の變化は皆な「ある」を云ふ字の變化であるので "To" (ある) の變化を云ふ。其の他の働詞の變化は

『三人稱、單數、現在の時、s を加ふ』

と覚えて居りさへすればよい。主辭が三人稱で、單數であつて、その働詞が現在だ働詞に s (又は es) を加へればよいと云ふことである。これも矢張り例を見るのが手つ取り早い。

I go. 私は行く

We go. 我等は行く

You go. 汝は行く

You go. 汝等は行く

He goes. 彼は行く
 She goes. 彼女は行く
 It goes. それは行く

They go. 彼等は行く

すなはち he, she, it が三人稱の單數であるから働詞に es が附いたのである。they は三人稱だけれど複數であるからやはり they go である。I strike it (私がそれを打つ), you strike it (汝がそれを打つ) であるけれども he strikes it. (彼がそれを打つ) と strike に s を添へるのである。

以上は主辭が代名詞であるが、單數の名詞は三人稱と同じ取り扱ひを受けるのである。だから

He reads it. (彼がそれを讀む)
 Taro reads it. (太郎がそれを讀む)

の如く he と Taro と同じに取扱はれる。それもその筈、名詞が單數である場合男の名ならば he で受けるべく、女の名ならば she で受けるべく、品物であるならば it で受けるべきが故に、he, she, it と同じ取扱を受けるに不合理なことはないわけである。

○ 現在と過去と現在完了と未來

『雨が降る』を云ふのを it を用ひて

It rains. (それが雨降る)

と云ふ。it は此の場合意味がなく天氣具合の時などに用ゐるのである。『雪が降る』は矢張り it を用ひて、

It snows. (それが雪降る)

と云ふ。rain と云ふ字も snow と云ふ字も名詞と働詞と同じなので、

rain 一字で『雨降る』 snow 一字で『雪降る』と云ふ意味を有するのである。rain も snow も現在で it が三人称だから rains 或は snows のやうに s を附けたのである。此の rain や snow を現在の時と稱する。

I come. (私が来る)

You come. (おまへが来る)

He comes. (彼れが来る)

They come. (彼等が来る)

此の come は何れも現在の時である。

これを過去にするに snow さか rain さか云ふ現在の形に d さか ed さかを附けて過去にするのさ、全然形のかはるのさ二種類ある。snow の過去は snow.d である。

It snowed yesterday. (きのふ雪が降つた)

rain の過去は rained である。

It rained day before yesterday. (一昨日雨が降つた)

その他 please (喜ばす)、dance (踊る)、name (名前をつける) 等の過去は pleased, danced, named 等である。

It pleased me. (それが私を喜ばした)

He danced well. (彼れは上手に踊つた)

以上は規則的の變化である。不規則的の變化を少しばかり擧げて見るならば

	〔現在〕	〔過去〕	〔過去分詞〕
	sit (坐る)	sat	sat
12	put (置く)	put	put
3	shut (閉ぢる)	shut	shut
24	cut (切る)	cut	cut
	set (置く)	set	set
1	stand (立つ)	stood	stood
1	understand (了解する)	understood	understood
1	have (持つ)	had	had
	pay (拂ふ)	paid	paid

〔現在〕

meet (會ふ)

send (送る)

bear (擔ふ)

〔過去〕

met

sent

born

〔過去分詞〕

met

sent

borne

此の過去分詞と云ふのは現在完了の時 (Present Perfect Tense) を作る時入用となるのである。現在完了と云ふのは『春が来た、春が来てゐる』『彼の人^{he}が来た、彼の人^{he}が来てゐる』と云ふやうな意味をあらはす時の働詞の時 (Tense) である。Spring has come (春来れり) や He has come (彼が来てゐる) などは其の例である。この時の come は過去分詞である。過去分詞は have さか has さかを結びついて現在完了を作るのである。Spring came と云へば『春が来た』と云ふのであるが、二月も前に来て今は行つて子つてゐるかも知れない。来て今現にゐる云ふ時には現在完了を用ひるのである。

この過去分詞の形のない働詞は一つもない。どの働詞にも現在の形と、過去の形と、過去分詞の形とある。現在の形は要するに根になつて、それが變化するのであるからこれを Root (根形) と稱する。

未來はどうして出来るか云ふのが必然起らねばならぬ疑問である。未來は普通 will が shall に根形をつけて作るのである。

He will come here to-day. (彼の人^{he}は今此處へ来るでせう)

I shall visit you to-morrow. (私は明日あなたを訪問します)

○ have と has

『持つ』(to have) と云ふ字は下の如く變化する。

I have it. (私がそれを持つ)

We have it. (我々がそれを持つ)

You have it. (おまへがそれを持つ)

You have it. (おまへ達がそれを持つ)

He has it. (彼れがそれを持つ)

She has it. (彼女がそれを持つ)

have + past participle
has +

It has it. (それがそれを持つ)

They have it. (彼等がそれを持つ)

すなはち第三人稱 (he, she, it) の場合は has で、その他の場合は皆な have である。They (彼等) と云へば Taro and Jiro (太郎と次郎) の事もあらうし、Taro, Jiro, and Saburo (太郎と次郎と三郎) の事もあらう。だから They の時 have であると同じく、Taro and Jiro have it (太郎と次郎がそれを持つ) 或は Taro, Jiro and Saburo have it (太郎と次郎と三郎とがそれを持つ) と云ふやうに have を用ゐるのである。

以上は『持つ』と云ふ意味であるが、『春が来た。そして今春である』と云ふやうな時、現在完了の時を用ゐるに、have が入用になつて来る。そして名詞が単数だと代名詞の三人稱と同じく has を用ゐるのである。すなはち Spring has come などはその例である。その他は have を用ゐて Taro and Jiro have come (太郎と次郎とが来た) や We have come (我々が来た) の如く云ふのである。何れにしても此くの如き場合の have は『持つ』と云ふ意味ではなく、過去分詞と結びついて現在完了の時を形作るのである。come は現在の come ではなく過去分詞の come である。come の變化は come (現在)、came (過去)、come (過去分詞) である。

I have written it. (私は今それを書いた)

【註】 write (書く) の變化は write (現在)、wrote (過去)、written (過去分詞)。

You have written it.

He has written it.

They have written it.

It has stopped. (それが止つた)

【註】 stop (止る) の變化は stop (現在)、stopped (過去)、stopped (過去分詞)。

The houses have been burned. (その家が焼かれた)

【註】 have been burned は受身の現在完了である。受身の時は has been..... が have been に過去分詞を付けるのである。burn

く) さ云ふ字の變化は burn (現在)、burned (過去)、burned (過去分詞)。

名詞の複數

動詞に s 又は es をつけて變化を作るやうに、名詞は s 又は es をつけて複數を作る。動詞では主辭の名詞又は代名詞が單数だと現在の動詞に s 又は es が附くのであるが、名詞では反對に名詞を複數にする場合に s 又は es を附けるのである。すなはち一人ならば a boy であるのが二人以上だと boys となり、一枚の皿だと a dish であるものが二枚以上の皿になると dishes となるやうなものである。

Case

私はまづ例を擧げる。

He is Taro. (彼れは太郎である)

The boy is Taro. (此の少年は太郎である)

Taro gave the book to his younger brother. (太郎はその本を彼れの弟にやつた)

This is my book. (これは私の本である)

This is his book. (これは彼れの本である)

He gave it to me. (彼は私にそれをくれた)

I spoke to him. (私は彼れに話した)

上のいくつかの例に就て見るに『彼れは』とか『彼れが』とか云ふのがある。『彼れの(本)』とか『私の(本)』とか云ふのがある。『それを』とか『彼れに』とか『私に』とか云ふのがある。『彼れは』とか『彼れが』とか云ふのを主格 (Nominative Case) と云ひ、『彼れの』とか『私の』とか云ふのは所有を示してゐるので所有格 (Possessive Case) と云ひ、『それを』とか『彼れに』とか『私に』とか云ふのを目的格 (Objective Case) と云ふのである。此の格 (Case) は名詞又は代名詞の變化である。

復
教
↓

代名詞の格

代名詞の格 (Case) の變化は下の如くである。

we
our
us

主格 (ハ、カ) I.....I am Taro. (私は太郎である)
所有格 (ノ) myThis is *my* book. (これは私の本である)
目的格 (ニ、ヲ) meHe gave it to *me*. (彼れはそれを私にくれた)

you
your
you

主格 (ハ、カ) you.....You are Taro. (汝は太郎である)
所有格 (ノ) your ...This is *your* book. (これは汝の本である)
目的格 (ニ、ヲ) you.....He gave it to *you*. (彼はそれを汝にくれた)

主格 (ハ、カ) he*He* is Taro. (彼れは太郎である)
所有格 (ノ) hisThis is *his* book. (これは彼の本である)
目的格 (ニ、ヲ) himI gave it to *him*. (私は彼れにそれをやつた)

主格 (ハ、カ) she*She* is Hana. (彼女は花子だ)
所有格 (ノ) herThis is *her* book. (これは彼女の本である)
目的格 (ニ、ヲ) herHe gave it to *her*. (彼れはそれを彼女にやつた)

主格 (ハ、カ) it*It* is a dog. (それは犬である)
所有格 (ノ) itsLook at *its* eyes. (その目を見よ)
目的格 (ニ、ヲ) itI strike *it*. (私はそれを打つ)
I gave *it*.to her. (私はそれを彼女にやつた)

主格 (ハ、カ) they.....*They* are students. (彼等は學生である)
所有格 (ノ) their.....These are*their* books. (これらは彼等の本である)
目的格 (ニ、ヲ) themI gave it to *them*. (それを彼等に與へた)
I strike *them*. (私は彼等を打つ)

欠

欠

第二編 名詞

○名詞とはどんなものか？

文法を習ひはじめる時に、まづ最初に教はるのは名詞は何ぞやと云ふことである。名詞とは名の詞なりと云つて了へばそれまでである。所が同じ名と云つても梅の木、松の木、櫻の木と云ふやうなのや、日比谷公園、淺草公園と云ふのや、西郷隆盛とか渡澤榮一と云ふのやいろいろな名がある。そこで名詞にもいろいろの種類が出来て来る。まづその種類を挙げる前に、日本人に一寸變にももはれるのは、英語の文典で名詞と云ふうちには、『親切』とか『喜び』とか『悲しみ』とか『怒り』とか云ふ語や、『戦争』とか『沈没』とか『攻撃』とか『旅行』とか、『試験』とか云ふ語なども入るのである。日本人はかう云ふものを名と云へなかつた。名と云へば物の名とか、人名地名書名などに限つてゐるもので、心の有様や行などの言葉はこの中に入れてゐなかつた。

『尻取り』と云ふ遊びでも、『か』……『紙』、『み』……『密柑』、……『うんこ』、などは普通として許されてゐるが、『か』……『さん』などは餘程考へて出ない時の外は必ず一座の誰れかから出るにきまつてゐる。併し英語の文典ではかみいさんも立派なものである。なほまた『か』……『かなしみ』などは尻取りでは到底れないことであるが、これも英語の文典では立派に名詞なのでだから名詞は何ぞや？名詞とは名の詞なり。名とは何ぞや？物の名なりと云つてはいけないのである。少くとも『名詞は事である』と云つて貰ひたいのである。くごいやうだが、名詞といふ、狸、櫻、川、山のやうな形のあるものゝ名ばかりでなく、『悲

しみ』さか『親切』さか『煩悶』さか云ふやうな形のないものまでも含むのである。併しそれも『悲しむ』さか『煩む』さか云へば、靜から動に移つたので、それは動詞であつて名詞ではない。

普通名詞—

bird (鳥), sparrow (雀), lion (獅子),
dog (犬), cat (猫)

固有名詞—

Hibiya, Hanazono, Tokyo, Japan, Napoleon

物質名詞—

beef (牛肉), sugar (砂糖), gold (黄金),
wine (酒), water (水)

抽象名詞—

kindness (親切), sorrow (悲しみ), joy (喜び),
belief (信仰), suicide (自殺), harakiri (腹切り)

私はこゝに於て、此の一々名詞の種類に就てお話しする義務が出来て来た。別にお話しないで済ませれば済むやうなもの、親切丁寧なことが好きな私はこれなりで放つておくことは出来ないのである。併し面倒臭いと思ふ諸君は飛ばして行つてもかまはない。

○ 普通名詞

(一)

普通名詞といふのを英語では Common Noun と云ふ。common といふのは『普通な』『通例な』『ありふれた』『共通な』といふ事であり、Noun といふのは『名詞』といふ字である。普通名詞といふ中にはどんなものが入るか云ふと、何んでも大きさが有り、形のあるものは此の中に入るのである。など云ふと、大層難かしくなるが、松の木さか、火鉢さか、電車さか、柱さか、瓦さか何でも大概の物は此普通名詞といふものの中に入るのである。日本の子供がよくやる遊びの『尻取り』に出るやうなものは多く此の普通名詞に属するものである。たゞ

大きさに大きさと形のあるものを云ふたのは大いに意味があるので、牛乳ださか、水さか、酒さか、黄金さかといふものは日本人の考へでは普通名詞の中に入れてもよささうなものだが、英文法では此等は物質名詞といつて、普通名詞とは區別するのである。さういへば成る程、牛乳にも、水にも、酒にも、黄金にも大きさと形さか云ふものはない。手つさり早く云へば『物』と云ふ字を用ゐるこの出来るものは大概普通名詞だと思へばいゝ。

(二) sparrow

大きさと形さか云ふことを言葉をかへて云へば、『一つ』と云ふ字をかぶせ得らるゝものであると云ふことである。松一本、箏箏一竿、硯一個、牛一疋、鳥一羽、人間一人、男一人、女一人、赤坊一人など、普通名詞には一つと云ふ語をかぶらせることが出来るけれども、牛乳一つ、水一つ、酒一つ、黄金一つなどは意味を成さないであらう。かういふ點でも物質名詞との相違は容易に分るものであらうと思ふ。物質名詞は賣つたり何かする時に必ず升だの、物差だの、衡などが必要になる。

散歩といふ言葉や、忠孝といふ言葉や、太閤秀吉さか、乃木希典さか云ふ言葉は無論普通名詞には入らない。散歩や忠孝は働作さか思想の名で此等は抽象(言葉を換へて云へば無形)のものであるから抽象名詞といひ、秀吉さか乃木さか云ふのは『ありふれた』ものではないから普通名詞ではなくて、固有名詞である。普通名詞といふと一定の形のあるもので、一種類のものゝ何れにでも通ずる名を云ふのである。本と云へば、自分の持つてゐる本でも、友人の持つてゐる本でも、西洋の本でも、日本の本でも、何れにでも通ずるのである。だから本は普通名詞である。所が『日本外史』と云へば日本外史以外の本を呼ぶ場合には通用しない。だから『日本外史』は固有名詞である。固有名詞とは固有のものゝ名だからである。

○ 固 有 名 詞

(一)

固有名詞を英語で Proper Noun と云ふ。出来るならば固有名詞など覚えずに、Proper Noun として覚える方がいい。普通名詞にしても普通名詞と云つて覚えるよりも Common Noun と云つて覚える方がいい。何でも出来るだけ英語でたゞき上げる方がいい。と云つて分らないなりに英文の本を讀んでも何にもならない。英文法の本が英語で書いてあるのを頭を痛めて讀むよりも、我輩のかうした著述を寝轉がつて讀む方が効力が多いと云ふものだ。

餘談はさておき、固有名詞といふと、特殊の人なり物なりの名前である。公園といへば浅草公園にも日比谷公園にも上野公園にも通用出来るけれども、浅草公園といへば日比谷公園とはちがふのである。浅草公園はある特殊の一つの公園であるから、これは固有名詞である。人といへば三太郎にも三助にも八公にも熊公にも——乃至は猫にも杓子にも適用されるけれども、大隈重信といへば、『よう日本一』と聲をかけたい日本の政治家で外に大隈重信はない。しかも同名異人といふことはあるけれども。この大隈重信なり、八公、熊公、皆なその人の名で、他の人に通用は出来ない。だによつて、此等は皆な固有名詞である。近頃ある相撲狂があつて、その生れた女の子にライデンタメエモンと云ふ名をつけたさうだ。區役所では再三こんな名をつけていゝかき問ひたゞしたけれども、親爺は是非そのまゝにといふことで、さうさうその女の子はライデンタメエモンといふ名を一生つけられることになつたのである。大きくなつて、歌留多會などで、ライデンタメエモンさんとかよ子さんなど云ふ名刺を見て席につく時、緋鹿子の結綿か何かのライデンタメエモンを見た時に、かよ子さんの驚きはどれほどであるであらう。さりとは悲惨なる固有名詞ではあるまいか。

(二)

今固有名詞とはどんなものを云ふか例を以て示せば、Tokyo, Pek-

ing, France, Germany, England, Russia, America 等の地名や、Fuji, (連山でなく、たゞの山には the がつかない) the Alps (山脈の名には the が入用である) 等の山の名や、the Sumida, (川の名には the が附くことを覚えておて貰ひたい) the Nile, the Thames (これは tēnz と發音するので、倫敦のテムス河など云ふのは間違である)、などの川の名や、The gulf of Mexico, the Bay of Tokyo (Tokyo Bay といふ時には the がつかない。海の名の時は the Japan Sea といふやうに the が入用だが、灣の名の時は Tokyo Bay といふやうに the が不用である) などの灣の名や、The Japan Sea, the Yellow Sea 等の海の名や Washington, Kiyomasa, Napoleon, Yuan Shi-kai (袁世凱) などの人名や、the Tokyo Asahi, the Taiyo, the Times などの雑誌新聞の名や、the Imperial Hotel, the Bank of Japan, Oxford University, the Zojoji temple 等の公共の建築物等の名は何れも固有名詞である。

固有名詞は最初の字を大文字で書かなければならぬ。大文字のこゝを capital letter と云ふ。

(三)

人名や地名の呼び方は實に難しいもので、勿滑谷快天といふ禪學の學者があるが勿滑谷はメカリヤと讀むので、雑誌の目次には假名まで振つてある。さうかと思ふと漢法醫者で同じく勿滑谷といふ人があるがこれはメメリヤと讀むのである。谷を滑る勿れがメカリヤになつたり、メメリヤになつたりするのでは成る程雑誌の目次に振假名が必要なのである。一二三四五六といふ人がある。これをヒフミヨゴロクと讀ませるのである。北海道の後志がシリベシなども難かしい讀み方である。英語でも地名や人名はその讀方が中々難かしい。少し變だと思つたら字書を引くやうにしないと失敗することが往々ある。G. Bernard Shaw の “Mrs. Warren's Profession” を坪内博士が譯して『ウォーレン夫人の職業』として出してゐるなども間違ひの一つである。これはウォレンとしなければならぬ。まだ併しこれなどはいゝが、Cholomondeley と書いてチャムリ (chūm'li) と讀むなどは想像にも及ば

ないことだ。今英語青年の編輯主任をしてゐる喜安雄太郎氏などが早稲田大學に通つてゐた時分、偶々 Chok mandeley といふ教授が来た。學生はチヨロモンデレーといふそかに呼んでゐたが、果してほんこの呼び方は何といふのかわからなかつた。所が或る日、チヨロモンデレー先生病氣で休んだ時、學校の掲示場の塗板にコロモンドレー講師休と出た。はゝあ、コロモンドレーと云ふのかなと、字書を引いて見ると、これも間違ひでチャムリと讀むのであることが分つたと云ふ話だ。

此様に少しばかり固有名詞で讀み方の難かしいのを舉げて見やうならば、誰れも倫敦のテムズ河と云ふのが、あれは Thames と書いて tēnz と讀むのが本當である。その倫敦もロンドンではなくて lūn'dūn と發音するのである。米國の大統領で有名な Lincoln は日本ではリンコルンとして知られてゐるが、līn'kūn と發音すべきである。“The Pleasure of Life”の著者として日本の英語學生にはよく知られてゐる Lord Avebury はアヴェブリーと誰れも怪まずに呼んでゐたものだが實は ā'vērī と呼ばねばならぬ。バーナード ショーの Candida にも出て来る Marjoribanks は mārč/banks といふのである。尤もショーは Marchbanks と綴つてゐる。米國の州に Connecticut といふのがある。或る日本の英學者の作つた手紙の本にコネクテイカットと書いてあつたが、あれは Ko-nē'tī-kūt と呼ばねばならない。William Raleigh の Raleigh は raw'li である。英國の天文臺のある所で有名な Greenwich は grīn'ij といふのが本當である。米國の州の Arkansas は ā'r'kansaw といはねばならぬ。こんなことは書き出すと際限がないからこれで止めるけれども、呉れぐれも地名人名の發音は字書によつて調べるやうにして頂きたい。

物質名詞

(一)

鉄だとか酒だとか鐵だとか云ふものは、幾つに分つても矢張り空氣は空氣、酒は酒、鐵は鐵であらう。併し机とか時計とか云ふものは

さうはいかない。机の脚を取り、机を二つに割つて了へばもう机さば云はれない。時計も矢張りさうである。機械を粉碎して了つたらもう時計のむげに過ぎない。前の空氣や何かを物質名詞といつて、次の机や何かを普通名詞と云ふのである。物質名詞は英語で Material Noun と云ふ。material は『物質』とか『材料』とか云ふ字である。物質や物を造る原料の名が物質名詞である。だから空氣 (air)、葡萄酒 (wine)、鐵 (iron)、牛乳 (milk)、紙 (paper)、眞鍮 (brass)、麥酒 (beer)、砂糖 (sugar)、牛肉 (beef)、などは物質名詞である。即ち、瓦斯、液体、穀類、粉末、肉類、金屬、紙類などの名は皆な物質名詞である。物質名詞は隨つて一個二個と數へるわけには行かない。此の家の中には空氣が千個あるとか、牛乳を二個持つて来てくれとか云ふことは出來ない。所が普通名詞になると、机二個とか密柑五個とか立派に云ふことが出来る。今云うたやうに物質名詞は一個二個と云ふことが出來ないのであるから、『一つ』と云ふ意の冠詞 a を附けることの出來ないのは云ふまでもない。だから a beef とか a tea とかは云へないのである。『一と切れの肉』と云ひたい時は a piece of meat と云ひ、『一杯の茶』と云ひたい時は a cup of tea と云ふのである。『三瓶のインキ』と云ひたいければ three bottles of ink といふのである。『一つ』と云ふ意の a を附けることが出來ない位だから複數にするとの出來ないのも説明を要しない事である。鐵を五個呉れなど、云つても何の事かさつぱり分らないであらう。鐵を五封度とか何とか云へば分るけれども鐵を五個では意味を爲さない。隨つて irons など、複數の形の s をつけることは出來ないのである。物質名詞は常に單數の形であることを忘れないでゐて貰ひたい。

此處に一寸普通名詞と物質名詞とを對照させて見やうならば、

【普通】	【物質】	【普通】	【物質】
cow (牛)milk (牛乳)	sword (劍)steel (鋼)
coin (貨幣)gold (金)	coat (衣服)cloth (羅紗)
air-ship (空中飛行船)	..air (空氣)	book (書籍)paper (紙)
gate (門)iron (鐵)	sheep (羊)mutton (羊肉)

Many 箇數 | Much 分量 (二) の形容詞

先きにも云つたやうに物質名詞は一つ二つを数へることは出来ないけれども量を以て計ることが出来る。だから一定の量をあらはしたい時は、物質名詞を量を示す名詞と一所に用ゆるのである。たとへば a bottle of wine (一樽の葡萄酒), a glass of beer (一杯のビール), a spoonful of sugar (匙に一杯の砂糖) のやうに云ふのである。それでは many ice さいふのか much ice さいふのかと云ふに、分量を示す形容詞 much の方を用ゐて、箇數の形容詞 many を用ゐないのである。

【誤】	【正】
Many ice	Much ice (多くの氷)
Many water	Much water (多くの水)
A few sugar	A little sugar (少しの砂糖)
A few ink	A little ink (少しのインキ)
There is many water in it.	There is much water in it. (その中には澤山水がある)

Q 抽象名詞

(一)

普通名詞や固有名詞はすぐ會得が出来やうけれども、物質名詞と抽象名詞とがなるに初學者は一寸まごつくであらうと思ふ。抽象名詞は Abstract Noun と云ふ。抽象といふ字は難かしいかも知れないが無形といへば平易であらう。分りさへすれば抽象だらうが無形だらうが一向差支ない。抽象名詞といふと、性質、行爲其他種々の抽象の事柄や觀念の名である。『我慢する』といへばそれは働詞の部類に入るが、『我慢が肝心』といへばその『我慢』は抽象名詞である。『我慢す

る』と云ふ働らきを集めて一つの抽象觀念となつたのが『我慢』と云ふ名詞である。老人が信仰を得やうと求める。信仰 (belief) は抽象名詞である。衣が美しいと云ふ中から美しいと云ふことだけ引き出して來てそれをましまつた一つのもの、やうに考へる。beauty (美) は抽象名詞である。知識 (knowledge) が足りないとか、視力 (sight) が悪いとか、恰も物のやうに取り扱ふ。此等も抽象名詞である。抽象名詞といふのはどんなものかと云ふことは例を見れば直ぐ分ることである。すなはち、manliness (男らしさ)、kindness (親切)、colour (色)、(この字は米國流の綴りでは color と綴る。これは英國流である)、strength (力)、beauty (美)、naturalism (自然主義)、walking (歩行)、meeting (會合)、society (社會)、knowledge (知識)、illness (病氣)、life (生)、death (死)、等は皆な抽象名詞である。

(二)

抽象名詞は多く形容詞や働詞から出て來た名詞である。又其反對に抽象名詞が形容詞や働詞の元になつてゐることもある。何れにもせよ、形容詞や働詞と、抽象名詞とが形がよく似てゐるからよくその別を知つておく必要がある。英語の雑誌の讀者から來る應募答案には此の種の間違ひをするものが尠くない。その寫合選者は他の部分がよく出來てゐても、もうそれでいやになつて、紙屑籠に棄て、了ふことが屢々である。現に私などはそれである。

【形容詞】	【抽象名詞】
virtuous (徳操ある)	virtue (徳操)
good (善き)	goodness (親切)
wise (賢き)	wisdom (智慧)
ill (病氣で)	illness (病氣)
○ beautiful (美しき)	○ beauty (美)
○ difficult (難き)	○ difficulty (困難)

spoonful

【動詞】

- study (研究する)
- learn (学ぶ)
- think (考へる)
- fly (飛ぶ)
- walk (歩く)
- stop (止まる)
- fight (戦ふ)

【抽象名詞】

- study (研究)
- learning (學問)
- thought (思想)
- flight (飛行)
- walk (歩行)
- stoppage (停止)
- fight (戦争)

(三)

このに附け加へて置きたいことは抽象名詞は物質名詞と同じく、a life とか the life とか云はないことである。併し——文法では常に『併し』とか『但し』とか云ふことの附くのを忘れないでゐて貰ひたい。物には例外のないものは何物もない——何か特殊のものゝ生涯を云ふ時には定冠詞がつくのである。例へば Life is short but art is long (人生は短く藝術は長し)と云つた場合に life にも art にも the がつかないのであるが、若し『日蓮の生涯』を云ひたい時は、The life of Nichiren と the をつけるのである。今丁度 life の例を出したから、抽象名詞として用ゐられたる場合には、皆な the のない事を示す爲めに、幾つかの例を示して見やうと思ふ。

He has a high aim in life. (彼は人生に高尚な目的を有してゐる)

He was sentenced to the imprisonment for life. (彼は無期徒刑に處せられたり)

This is a portrait from life. (此の寫眞は生きうつした)

He is in the prime of life. (彼れは今男盛りだ)

I am weary of life. (私は生きて行くのが厭になつた)

所が、特殊の life の場合、例へば『日蓮の生涯』を云ふ時に、The life of Nichiren と云ひ、『セント、ホールの生涯』を云ふ時に、The life of St. Paul と云ふやうに、定冠詞が入用になる。

又 life に形容詞がつくさそれに不定冠詞を要することが往々にして生じて来る。諸君は學校の教科書などに、次のやうな句を見る度に、必ず a と云ふ不定冠詞のついてゐることを見出すであらう。これは普通名詞なるからである。

He lived a busy life. (彼れは忙しく暮した)

○ He and his wife led a cat-and-dog life. (彼と妻とは喧嘩ばかりして暮してゐた)

He believes in a future life. (彼は未來生を信ずる)

A happy life. (幸福な生活)

A hard life. (困難な生活)

An idle life. (怠惰な生活)

【註】 an は母音の前に附く冠詞である。子音の前には a を用ゐるが、母音の前には an を用ゐるのである。an egg (一つの玉子) や、an elephant (一疋の象) などは其の例である。

抽象名詞がそのまゝ普通名詞として用ゐることが出来るもう一つの例を擧げて見るならば、

Composition is not taught in our school. (作文は私達の學校では教へられない=教へない)

と云へば、composition は抽象名詞であるけれども、

I wrote a composition this morning. (私は今朝作文を書いた)

I write three compositions a month. (私は月に三つ作文を書く)

といへば、composition は何れも普通名詞として取り扱はれてゐる。だから初め抽象名詞には a も the もつかない云つたが、かういふ場合のあることを記憶してゐて貰ひたい。

✓ 集合名詞と多數名詞

集合名詞は英語で Collective Noun といひ、多數名詞のことは Noun of Multitude と云ふ。これは通例普通名詞の中に入れて了ふのであるが、やつぱり分けて話す方がよく分る。集合名詞と云ふと、軍隊

(army) さか、歩兵隊 (infantry) さか、級 (class) さか云ふやうな兵士の集合、歩兵の集合、生徒の集合で出来た名稱であるから此等は集合名詞である。併し歩兵隊と云つてゐながら、歩兵を一つのまとまつたものとして考へてゐる時と、歩兵隊といひながら頭の中では一人一人の兵士を描いてゐる時と二つの場合がある。初めの場合は正しく集合名詞としての軍隊であるが、次の場合は Noun of Multitude なのである。例を以て示せば、

(1) Our infantry is strong. 我が歩兵は強し。

(2) Our infantry were taking breakfast. 我が歩兵朝飯を食しつゝありき。

(1) は集合名詞であり、(2) は歩兵隊と云ひながら一人一人の兵士や將校が朝食してゐることを描いたのであるから Noun of Multitude である。だから Noun of Multitude は働詞だけは are (現在ならば) were (過去ならば) have (過去分詞) といふやうに複数の其の働詞の形を用ゐるのである。手取り早く云へば名詞の形は単数でありながら其の働詞は第二人称の時の働詞 (You are a boy さか You were idle boys などの如く are, were 等) を用ゐるのである。さてその働詞が複数の形を用ゐる事とすれば、主格の名詞が単数の形 (enemy 「敵」 と云ふやうに) であつても實は一人一人の兵士 (soldiers) や將校 (officers) を思つてゐるのだから、其の代名詞は it でなくて、they である。

The enemy have fled in all directions. Their position has been captured. (敵は四方八方に逃げて、その陣地は占領せられたり)

【註】 have fled はこれで『逃げた』と譯すけれども、たゞの fled さは意味が異なるのである。たゞ fled といへばたゞ逃げたといふことなれど、have fled といへば、今逃げたばかりの事である。have fled の形を現在完了と稱へる。『春來れり』などいふ時は春が三月も前に來たと云ふのでなく、今來たばかりの事であるから、現在完了を用ゐて Spring has come といふ方が Spring came さするよりいゝのである。そして have fled さ has fled さはどちらがふかき...

格の名詞が単数ならば has と fled のやうな過去分詞、複数ならば have と fled のやうな過去分詞を用ゐるのである。此の場合の has さか have さかは、過去分詞と結びついて現在完了の時を作るだけで、決して『持つ』と云ふ意味はないのである。併し he has it さか ひ they have it さ云ふ時と同じく、現在完了の場合も主格が単数ならば has (has fled の如く) を用ゐ、主格が複数ならば have (have fled の如く) を用ゐるのである。 13.9.18

名詞の複数

(一)

日本語では名詞に単数複数の區別がはつきりしてゐないのが特色である。たゞ僅かに、『あの人たち』さか、『山々』『子供衆』さか、『そんなこども』さか、『私等』さか云ふ言葉の使ひ方に複数があらはされてゐるばかりで、『きれいな花だ!』と云へば、一つの花の時にも、澤山の花の時にも用ゐられる。『鳥が來た!』といへば一羽の鳥だが、二羽以上の鳥だか判然しない。所が英語にはちやんと単数と複数の區別がついてゐる。flower (花) といへば単数だが、flowers といへば複数である。単数といふのは英語で singular number といひ、複数といふのは plural number といふ。単数の單は單一の義で、複数は二つ以上のことである。だから flowers といへば成る程一つでないことが分つたが、二つの花でも flowers だし、百萬の花でも flowers である。flowers を持つて來たといつて二つの花を持つて來たのか百萬の花を持つて來たのか分らない。日本語に単数複数の區別がないのは不完全だが、英語に単数複数の別があつたからさてさして完全であるといふわけには行かない。議論は別として、名詞を複数にするにはどうするか。曰く三種あり——さかう來る所だ。

(1) 単数名詞の語尾に s を附す。これが一般普通の規則である。

例: boy (少年) [單数]

boys [複数]

dog (犬) [單]

dogs [複]

pen (ペン) [單]	pens [複]
table (卓) [單]	tables [複]
lamp (ランプ) [單]	lamps [複]
horse (馬) [單]	horses [複]
house (家) [單]	houses [複]

(2) 次の場合には單數名詞の語尾に es を附ける。

(い) 單數名詞の語尾が s, x, sh, ch (チと發音する場合) で終る時、其の語尾に es を附ける。

例: ass (驢馬) [單數]	asses [複]
peach (桃) [單]	peaches [複]
box (箱) [單]	boxes [複]
brush (ブラシ) [單]	brushes [複]
match (燐片) [單]	matches [複]
glass (コップ) [單]	glasses [複]
branch (枝) [單]	branches [複]
dish (皿) [單]	dishes [複]

(ろ) 單數名詞の語尾が f 又は fe で終る時は f 又は fe を v に變じて es を附ける。

例: life (人生、生命) [單數]	lives [複]
wife (妻) [單數]	wives [複]
knife (ナイフ) [單]	knives [複]
shelf (棚) [單]	shelves [複]
leaf (葉) [單]	leaves [複]
wolf (狼) [單]	wolves [複]
thief (盜賊) [單]	thieves [複]

但し "gulf" (灣)、"roof" (屋根)、"proof" (證據、校正)、"handkerchief" (ハンカチ)、"safe" (金庫) 等は s のみを附す。

(は) (a) 單數名詞の語尾が y で終りその直ぐ前に子音の字があるさ y を i に變へて es を附し、(b) y の直ぐ前が母音の字であるさ i に變へないで、そのまゝの形にた s だけを附けるだけだ。

例: (a) army (軍隊) [單數]	armies [複]
city (都市) [單]	cities [複]
peony (牡丹) [單]	peonies [複]
baby (赤子) [單]	babies [複]
lady (婦人) [單]	ladies [複]
(b) monkey (猿) [單]	monkeys [複]
day (日) [單]	days [複]
boy (少年) [單]	boys [複]
valley (溪) [單]	valleys [複]

【註】 valley さいふ字は溪と譯すれどもちやんころの畫家が細い溪を描いて上に梅の林を描いてる如き溪には非ず。valley は山と山との間の廣い平地で流れなどある所を云ふのである。よく羊など飼つてゐる所もある。the Mississippi Valley と云へば Mississippi 川の兩岸一帯の地で山からは遠い。

(に) (a) 單數名詞の語尾が o で終りその直ぐ前に子音の字があれば es を附し、(b) o の直ぐ前に母音の字があればた s だけを附ける。

例: (a) potato (馬鈴薯) [單]	potatoes [複]
hero (英雄、勇士) [單]	heroes [複]
motto (座右銘) [單]	motatoes [複]
torpédo (水雷) [單]	torpedoes [複]
negro (黑人) [單]	negroes [複]
(b) bamboo (竹) [單]	bamboos [複]
curio (骨董品) [單]	curios [複]

【注意】 但し伊太利語から借りて來た數語は es でなく唯 s だけを取る。例 photo (寫眞) [單], photos [複]; piano (ピアノ) [單], pianos [複]; solo (獨奏) [單], solos [複]; zero (零) [單], zeros [複] 等の如し。

(3) 不規則複數——以上の方法に依りて複數名詞を作る外、單數名詞の母音を變じ、又は語尾に en を附けて複數にするのがある。

單 數	複 數
man (人、男)	men
woman (女)	women
tooth (齒)	teeth
foot (足、一呎)	feet
child (小供)	children
ox (牡牛)	oxen

(二)

此の外に厄介なのは foreign plurals (外來語の複數)と云ふやつである。これは少し變だなと思つたら字書を引くに加かすである。若し己れはどんな外來語の複數をも立派に答へて見せるに云ふ先生があるならば、いくら御ふらい先生であるにもせよ、それは少し御神酒がまはり過ぎたに申すものだ。うそだと思ふならば the Standard Dictionary の後尾に附してある複數表をひろげて見たまへ。殆んど手におへぬものであることが分るであらう。

かうは云ふものゝまづ大体の普通の語の變化を並べるのが私の義務であつた。

單 數	複 數
Axis. (Latin) 軸	Axes. (發音 ak'sēz)
Crisis. (Latin) 危機	Crises. (發音 kri'sēz)
Mausolē'um. (Latin) 陵	Mausolea or mausoleums
Memorandum. (Latin) 備忘錄	Memoranda or memorandums
Phenomenon. (Greek) 現象	Phenomena
Radius. (Latin) 半徑	Radii (發音 ra'dii) or radiuses

H. I. M. the Emperor went to Momoyama yesterday to worship before the Imperial mausolea. (天皇陛下には昨日先帝及び皇太后陛下の御陵御參拜の爲め眞山へ行幸あらせられたり)

にある mausolea は mausoleums としてもよい。剛陛下の二つの御陵の時には mausoleum としてはいけない。mausoleum は單數であるからである。to worship before は to worship at としてもよい。to worship the mausolea とすることははいけない。何故ならば御陵を崇むのではなく、御陵の所で拜むのであるからである。故に to worship God (神を拜む)とは云ふが to worship the mausolea とか to worship the tomb (墓を拜むとなる)などは云はないのである。

(三)

先きに單數名詞の語尾が o で語り、その直ぐ前に子音の字があれば es を附し、o の直ぐ前に母音の字があればたゞ s だけを附すると云つて、potato (馬鈴薯)、potatoes, bamboo (竹)、bamboos 等の例を挙げ、更に伊太利語から來た數語は es でなく唯だ s だけを取ると云つて photo (寫眞)、photos の例を挙げておいたが、これは大體の話で、實は之に關する規則を見出すことは困難なのである。であるから The Concise Oxford Dictionary にも "we have found it impossible to draw any satisfactory line between the words that prefer -os and those that prefer -oes." (-os で終る言葉と -oes で終る言葉との間に満足な境界線を引くことは不可能であることを見出した)と書いてある位だ。今 The Standard Dictionary の表によつて少しばかり -os と -oes とも兩様に續る字を挙げて見やうならば

grotto (特に人工的裝飾を施せる洞窟)	grottoes or grottos
archipelago (群島)	archipelagoes or archipelagos
bravado (傍若無人の風)	bravados or bravadoes
buffalo (水牛)	buffaloes or buffalo
calico (キヤラコ)	calicoes or calicos
desperado (無頼漢)	desperadoes or desperados
flamingo (鷺に似た紅色の鳥)	flamingoes or flamingos
fresco (壁畫)	frescos or frescoes

lasso (牛など捕へる爲めの投縄)	lassoes or lassos
commando (民軍團)	commandoes or commandos
mango (マンゴの樹及び果實)	mangos or mangoes
zero (零)	zeros or zeroes

かう云ふ例を挙げたのは徒らに英文法を學ぶの困難なるを示して諸君を失望せしめん爲めではない。何か不審のある時に信用のある外國の字典を注意して見るこの大切なことを力説したい爲めである。

(四)

私がジャパニタイムスに入社した最初、私は數々の失敗をした。そして一々米國人の Sams 氏から直された。Sams といふ老人は實にいゝ紳士であつた。よく親切に色々の事を教へて呉れた。暮れ果てた町の燈を低く見ながら鈴虫の聲を聞いて、市兵衛町の二階で、品のいゝ Sams 氏夫人と三人で、小泉八雲の話をしたのは今に私の頭にまざまざと残つてゐる。

私のした失敗の一つは議員の複数を M. P. s としたのであつた。その時サムス氏は M. P. 's と apostrophe の必要なことを話してくれた。さう云へば何でもそんなことを文法書で讀んだやうな氣もした。

文字 (m とか p とか t とか、英語の廿六文字) や數字 (2 とか 3 とかの數字) の複数を示す時は 's を加へるのが規則である。

Cross your t's and dott your i's. (t と云ふ字は横に棒を引け、i の字には上にぼつんと點を打て)

I cannot distinguish between your 3's and 5's. (私には君の書く 3 と 5 とかがどうも見分けがつかない)

The three R's (初等教育の基礎たる讀、書、算術 = reading, [w]riting, 及び [a]rithmetic)

There were present many M. P. 's at the meeting. (その會には澤山の議員がゐた)

【註】 M. P. は Member of Parliament の略である。元來 Parliament は英國の議會を指し、日本の議會は the Imperial Diet であるか

ら、眞實は Members of the Imperial Diet とするのがいゝのだが、便宜の爲め M. P. と云ふ事も用ゐるのである。

それで私は M. P. 's とすることを知つた。何かの本で the homes of the M. P. 's と云ふ句の註に M. P. 's の 's は Ito's book (伊藤の本) とか Kanda's Readers (神田讀本) などの 's で『誰々の』と云ふ 's であるを書いてあつたのは間違ひで、この 's は複数の s であることを此の時思ひ出した。その次に 'No' (否) の複数を 'No' s' と書いて失敗した。'No' の複数は 'Noes' とするのであると云ふ Sams 氏から教へられた。成る程さう云へば 's を附けて複數にするのは文字に限つて、言語ではなかつた。文字は英語で letter と云ひ手紙と言ふ字と同じである。言語は word と云ふ。いろはにはへとは文字である。『色』とか『句』とかは言語である。M とか P とかは letter である。No は word である。

There were pros and cons. (賛成もあり、反對もあつた)

【註】 pro は賛成の方、pro-Japanese paper (日本びいきの新聞) などの pro である。con は反對の方、contrast (對照、反對) などの con である。議會などで賛否のあつたのを例文のやうに云ふのである。pros and cons は arguments for and against an opinion (一つの意見に對する賛否の議論) の義である。

これも pros and cons であつて pro's and con's ではない。これも同僚の誰れやらが、pro's and con's として直された。こんなことは知らないのじやないけれども、いざ記事を書く段になつて、どうであつたか迷つて了ふので、さう云つて文法の本をひろげるなど云ふ初心な事もしたくなく、そんな暇もないので、つひこんな間違をしてすふのである。どうせ西洋人が見て呉れると云ふ安心もあるからである。

もう一つ同僚のした失敗に 3's とか 4's とかするので、3 や 4 は字であるが three とし four とすれば文字であることを忘れて three's として threes と直された。その時西洋人が two の複数はそれではどう書くれと友人に尋ねるさ、

『勿論 twos できあ』

さいふさ、No, no! を浴びせられて、two の複数は twoes と書くのであると教へられた。

『あの人の演説には「恐らく」此度と言ふ言葉が幾つも出て来る』を譯すとすれば、

There are too many perhaps and probablys in his speech.

とすればよいのである。

新聞の記事などで、Dr. Ukita, Dr. Yoshida, Dr. Yoshino といふ風に書きつらぬる時、Drs. Ukita, Yoshida, and Yoshino としてもよいのである。その時は Drs でなくて Drs である。Mr. Suzuki, Mr. Takata, Mr. Hayashi といふのを Mrs. としてはならぬ。Mrs. は Mrs. Suzuki (鈴木夫人)、Mr. and Mrs. Suzuki (鈴木氏夫婦) といふやうに夫人の義である。Mr. の複数は Messrs. とする。

合成名詞の複数

二語以上より成る合成名詞 (Compound Noun) の複数を作るには次の如くする。

(1) 普通合成名詞の後の名詞に s を附ける。

例一

【單 數】	【複 數】
maid-servant (下婢)	maid-servants
boy-student (男學生)	boy-students

例外一

【單 數】	【複 數】
man-servant (下男)	men-servant
woman-servant (下女)	women-servant

(2) 名詞の次に形容詞の來る合成語は語の終りに s を附ける。

例一

【單 數】	【複 數】
poet-laureate (桂冠詩人)	poet-laureates
major-general (陸軍少將)	major-generals

(3) 名詞と副詞又は形容句とから出来る複成語は名詞に s を附ける。

【單 數】	【複 數】
by-stander (見物人)	by-standers
looker-on (見物人)	lookers-on
passer-by (通行人)	passers-by
father-in-law (舅)	fathers-in-law
commander-in-chief (司令長官)	commanders-in-chief
brother-in-law (義兄、義弟)	brothers-in-law

(4) 動詞を語の最初に有する合成語は語尾に s を附ける。

【單 數】	【複 數】
runaway (脱走者)	runaways
spendthrift (放蕩者)	spendthrifts
pickpocket (掏摸)	pickpockets

この合成語の複数は英文を書くことを商賣としてゐるもの達さへ時々誤付くことがあるのである。それで初めはもうこの題目に就ては何も書かまいと思つたが、思ひ返して學生諸君が後日参考に見る便宜を計つて簡単に書いて置く方がいと考へて書き添へたのである。所が後で各専門學校の英語の入學試験問題を見るに、案外之に關した問題の出でゐるのを發見した。例へば、明治廿二年の海軍機關學校の入學試験に passer-by の複数の形を問うてゐる。大正二年の陸軍經理學校の入學試験には commander-in-chief の複数を尋ねてゐる。大正三年の海軍經理學校の試験には son-in-law 及び foot-man の複数、明治四十二年の海軍機關學校は looker-on の複数、明治廿七年の同校は major-general や commander-in-chief の複数、大正三年東京高等師範學校の試験には brother-in-law の複数の形を問うてゐる。私は此等の問題が一般の中學卒業生の英語の力を試験するものとしては酷に失してゐることを思ふ。そして此等の學校の英語の教員諸君がこんな問題を適當なる試問として選ばれたる頭腦の出來の善い悪いを怪むものである。試験問題はもつと平易なものを出してこそほんまに受験者の知識程度を見ること出来るのであると考へる。

(六)

名詞に單數も複數も同じ形であるものがある。日本語と同じ事で、前後の關係がなくは單數だか複數だか分らない。考へて見れば英語の文法ほど例外が多くて、一つの規則に引つゝる事の出事ないものはない。

それは次の如きものである。

deer (鹿)	sheep (羊)	salmon (鮭)
swine (豚)	cannon (大砲)	heathen (異教徒)

(七)

又名詞によりては複數の形と單數の形とで意味の異なることがある。よく入學試験などに出る問題の一つは、cloth と clothes の意味の相違如何といふ事である。cloth は反物で clothes は着物であると答へればよいのである。

Advices from Petrograd say that the Montenegrin capital has been captured. (露都よりの報道に依れば黒山國の首都は占領せられたり)

【註】 Advices は report の意味。Petrograd はもと St. Peter-burg と云ひしを 1914 年以來の歐洲戰爭の結果 St. Petersburg が獨逸語の音に近いと云ふので、敵を惡む餘り、Petrograd と改名したのである。ピーター大帝の都と云ふ義である。『何處何處よりの報道に曰く』と云ふは A dispatch (a telegram, a message) from Petrograd says; According to a dispatch from Petrograd; A Petrograd dispatch says と云ふやうに云ふ。— capture の代りに occupy, take 等も用ゐらる。

この advices は報道の義で、多く此の意味の時は複數である。advice (忠告)と異ふ。father's advice といへば父の忠告である。かう云ふ風に單數と複數とで意味を異にした名詞が幾つかある。その主なるものを云ふと、本や雑誌の目次に Content となくして必ず Contents と複數になつてゐるのを諸君は知つてゐるであらう。content が單數だと満足と

云ふことである。The Russian forces crossed the river (露國の軍勢川を渡れり)、forces と複數に用ゐる。單數で force と云ふと力と云ふことである。戰鬥力は fighting force と云ひ、習慣の力は the force of habit と云ふ。それから日本で用器畫の compasses をコンパスと云ふが本當は compasses と複數なのだからコンパシズと云ふべきである。compass といへば範圍と云ふことである。所謂コンパスは二本の足があつて、俗に彼奴はコンパスが長いと云ふ位だから、複數にするに異存はあるまい。同様に眼鏡も近頃西洋のハイカラ達がやる片眼式の眼鏡でない限り、二つ玉があるのがあたり前だからこれも spectacles が眼鏡で spectacle が奇觀であるに不思議はない。He took pains to do that を『それをするべく彼れは苦痛を取りし』などは廿年前の英語の先生のやつた仕事で、今のえらい先生方ならば pain が苦痛で pains が骨折、心勞の義であること位は — 位は失禮な申分であつた — 御存知の筈である。

(八)

米國で出た『新聞の編輯と記事の書き方』と云つたやうな本に、The news is — (その記事は —) と書かなければいけない、The whereabouts of the vessel is not yet known (その船の行衛はまだ分らない) とこれも is を用ゐて are を用ゐてはならないと書いてあつた。米國人に對してでもこんな注意が要るかと思ふと、日本人が英語を學んで難かしかつてゐるのに不思議はないと思つた。

複數の形をしてゐながら單數の取り扱ひを受ける語が僅かばかりある。それは news (新らしい報知)、means (方法、手段)、mathematics (數學、ethics (倫理學)、tactics (戰術) 等である。『先生、だつて arithmetic (算術) logic (論理學)、magic (魔術)、には s が無いじゃありませんか?』、文法の先生曰く、『だつてはないでせう。文法にだつてはないでせう』

練習問題

(a) 下の文に就き名詞の種類を挙げよ。

1. I went to Asakusa yesterday. (私は昨日浅草へ行つた)
2. Baron Shibusawa has returned from America. (澁澤男米國より歸朝せり)
3. The steamer Tenyo left for America on January 5. (天洋丸一月五日米國に向へり)

【註】 The steamer は the steamship とするもよし。汽船と云ふこと。或は The T. K. K. liner (東洋汽船會社の定期船天洋丸) としてもよし。T. K. K. は Toyō Kisen Kai-ha の略。liner は或る航路 (line) を走る船であるから汽船のことに用ゐられる。—on January 5 は on the 5th of January とも on January 5th ともする。

4. He built a house on the Sumida. (墨田川のほとりに彼れは家を建てた)

【註】 on the Sumida の on は「ほり」の義。墨田川の水の上の意味に非ず。

5. Mr. Akimoto is now a patient at the Tokyo Hospital. (秋木君は今東京病院入院中である)

【註】 patient = 病人。

6. We took our lunch at 12.30. (我々は十二時三十分に晝飯を食べた)

【註】 12.30 は twelve thirty と讀む。

7. He started for Kyoto by the 4.50 p.m. train. (彼れは午後四時五十分の列車で京都へ立つた)

【註】 Start for として、start to とはせず。—by the 4.50 p.m. train の the のあること、4.50 p.m.'s train とせざることに注意。

8. This bridge is built of wood. (此の橋は木で出来てゐる)

9. This is made of wood. (これは木で出来てゐます)

【註】 wine is made from grape (葡萄酒は葡萄から出来る)で、元の

patient 病人

形がなくなつて何から出来たか分からない時は c でなく cotton を用ゐる。

10. These clothes are made of cotton cloth. (此の着物は皆んな木綿のきれで出来てゐる)

11. People say that cherry blossoms at Koganei are now at their best. (小金井の櫻は満開ださ世間で云ふ)

【註】 cherry blossoms are at their best (1 cherry trees are in full bloom の義。

12. What is the matter with him? (あの人はどうしたんだらう)

13. Love is stronger than death. (愛は死より強し)

14. Time flies. (光陰矢の如し)

15. Walls have ears. (壁に耳あり)

16. Avoid extremes. (極端な事をするな)

17. Knowledge is power. (知識は力也)

18. He is now staying at the Imperial Hotel. (彼れは今帝國ホテルに滞在中也)

【註】 hotel の發音は ho-tél' であつて日本人が hō'tel と發音するは間違である。

19. Will you take a cup of tea? (あなたは茶を一杯召上りませんか)

20. The baby is fond of milk. (此の赤子はミルクが好きだ)

21. There is plenty of water here. (此處に水が澤山ある)

【註】 plenty と云ふ名詞は單數にも複數にも用ゐる。

22. There are plenty of apples here. (此處に林檎が澤山ある)

【註】 此の plenty は複數に用ゐられてゐる。初めの there は文章を引出す時の there で意味がなく、次の here が場所を示すのである。尤も There is a pretty bird (あそこに綺麗な鳥がゐる)と云つたきりの時の there は「其處に」と云つて場所を示し、意味のない there ではない。

23. The British navy is strong. (英國の海軍は強し)

24. The cavalry was driven back. (騎兵は撃退せられたり)

25. The Japanese fleet won the battle. (日本艦隊は勝てり)

46

26. Sugar is sweet. (砂糖は甘い)
 27. Glass is brittle. (ガラスはかけ易い)

(b) 下の語の単数を複数に直し、複数単数を直し直せ。

1. Teeth (歯) *tueth* 2. Gese (鶯鳥)
 3. Feet (足) 4. Lady (婦人)
 5. Women (女) [wɪ'men さ発音す]
 6. Man (男) [発音 mæn にて mæn に非ず]
 7. Mouse (廿日鼠) [この複数 mice]
 8. Mouth (口) [s と h の発音を注意しないさ, mouse と mouth の
 区別がつかなくなる]
 9. House (家) [この複数 houses]
 10. Ax (斧) 11. Monkey (猿)
 12. Stories (話) 13. Wolf (狼)
 14. Bench (ベンチ) 15. Deer (鹿)
 16. Sheep (羊) 17. Swine (豚)
 18. Series (叢書) [此の字も単数複数とも同じ形である]
 19. Ox (牛) 20. Thief (盗賊)
 21. Echo 反響 22. Child (子供) [此の字は女の子
 にも男の子にも用ゐる]

(c) 下の誤りを正せ。

1. Many tooth^s (多くの歯)
 2. Three glass^s of wine (三杯の酒)
 3. Volcanos^s (火山)
 4. Heros^s (英雄)
 5. Handkerchiefs^s (ハンケチ)
 6. Roofes^s (屋根)
 7. Two deers^s
 8. Mice^s (廿日鼠)
 9. Lifes^s (生命)

[答] 1. teeth 2. glasses

3. volcanoes 4. heroes
 5. handkerchiefs 6. roo...
 7. two deer 8. mouse
 9. lives

's

(一)

名詞に 's (apostrophe S) を付けて possessive case (所有格) を作る
 ことがある。's は日本語の『の』に當る。父の室と云ふ場合 father に 's
 を付けて father's room とする。何にでも『の』と云ふ時、勝手に 's を
 用ゐることが出来るかと云ふさうではない。the gate of the school (學
 校の門) と云ふのを the school's gate などと云へないのである。普通下
 の如き場合に 's を用ゐることが出来る。

(1) 人及び動物の名

- The King's anxiety. (王の御憂へ)
 Shakespear's 'Tempest.' (沙翁の作「嵐」)
 Kato's father. (加藤の父)
 A horse's tail. (馬の尾)

(2) 莊嚴なる物の名

- The sun's heat. (太陽の熱)
 The moon's disk. (月の面)

【注】 disk は disc と綴る。

- The earth's surface. (地球の表面)
 The country's welfare. (國家の幸福)
 The ocean's roar. (大洋の轟き)

(3) 時、距離及び重さの名

- Two hours' walk. (二時間の歩行)
 Three days' fighting. (三日に亘る戦鬪)
 Two weeks' absence. (二週間の留守)

To-day's paper. (今日の新聞)

Fourty miles' journey. (四十哩の旅行)

Give me a shilling's worth of nails. (釘を一志だけ賣つて下さい)

Two pounds' weight. (二封度の重さ)

Two months' holidays. (二ヶ月の休暇)

A boat's length. (一艇身)

(4) 次の如き phrase (句) に於て。

He did so for convenience' sake. (彼は便宜の爲めさうした)

I have it at my fingers' ends. (私はそれを暗んじてゐる)

I was taken ill at my journey's end. (私は旅行の終り方に病氣になつた)

(5) Gerund (動詞の形で名詞の役目をするもの。すなはち終りに ing のある動詞の形で『……すること』と云ふ名詞の意味に用ゐらるゝもの) の前。

On the bell's ringing (=when the bell rang) all the children went in. (ベルが鳴ると子供達は皆んな外に出た)

(6) Compounds (合成名詞) の possessive.

The Queen of England's reign. (英國女王の治世)

The Emperor of Japan's palace. (日本天皇の宮城)

【注意】 俗語にて 's が is, has, us の略であることがある。She's (=she is) a pretty girl, He's (=he has) done it, Let's (=let us) go は其の例である。

(二)

Possessive を作るには普通名詞の語尾に 's (apostrophe S) を附ければよい。たゞは teacher's wife (先生の妻) の如くである。若し teacher が複数であれば teachers' wives (wives は wite の複数、wolf が wolves になり、leaf が leaves になると同じ變化) の如く、たゞ 's のみをつければよい。その複数が不規則の變化をして children となり、men

となるのであれば、children's toys (子供達の玩具) や gentlemen's hats (男子の帽子) の如くやはり語尾に 's を附けておきさへすればよい。

さて teachers' wives の如く語尾が s で終れば ' をつけた丈けであるが、語尾が s で終つても単数には 's を附けるのである。James's hat や St. James's Court (英國宮廷) はこの例である。

併し語尾が sas, ses, sis, sos, sus ならば単数名詞でも 's を附けないで ' だけで済むのである。Moses' laws (モーセの掟) や Jesus' teaching (耶穌の教へ) などは其の例である。

實はかうは書いたものゝ、到底こんなことは高等諸學校の入學試験には出ないから、入學試験準備で頭腦の中がはち切れるばかり一杯につめ込まれてゐる諸君は、かうした規則があるを知つておきさへすれば足りる。但し St. James's Court の James's であること位は記憶してゐて貰ひたい。若しこんな規則を述べろなど云ふ入學試験問題を出す先生があるならばその人は英語の問題を選ぶ能力のないドンガラガムである。

名詞の性 (Gender)

Man (男) は男性 (Masculine Gender) と云ひ、woman (女) は女性 (Feminine Gender) と云ふ。parent は parents と云へば兩説であるが、parent だけでは父親の時も母親の時も用ゐられる。かう云ふ語を通性 (Common Gender) と云ふ。child (子)、friend (友) なども此の中に入る。又 book (書物) や tree (樹木) や mountain (山) などは男性でも女性でもなく、之を無性 (Neuter Gender) と稱する。

名詞の男性と女性との區別を立てるに語尾の變化に依るものと、性を示す語を附するものと、全然異つた語をなすものと三種がある。

(1) 語尾の變化に依るもの

【男性】

Actor (俳優)

Baron (男爵)

【女性】

Actress

Baroness

Count (伯爵)	Countess
God (神)	Goddess
Heir (嗣子)	Heiress
Host (主人)	Hostess
Lion (獅子)	Lioness
Prince (公爵)	Princess
Viscount (子爵)	Viscountess

【註】 併し男性女性の字があるとしても、poetess (女詩人)、actress (女優)、editress (女記者) の代りに女であつても poet, actor, editor を用ひてよいのである。

(2) 其の語の前或は後のは性を示す語を加へたるもの

〔男性〕	〔女性〕
Cock-pheasant (雄雉)	Hen-pheasant (雌雉)
Father-in-law (舅)	Mother-in-law (姑)
He-bear (牡熊)	She-bear (牝熊)
He-goat (牡山羊)	She-goat (牝山羊)
Tom-cat (牡猫)	Tib-cat (牝猫)
Beggar-man (男の乞食)	Beggar-woman (女の乞食)
Englishman (英國人)	English-woman (英國婦人)
Grandfather (祖父)	Grandmother (祖母)
Landlord (亭主)	Landlady (主婦)
Merman (人魚の雄)	Mermaid (人魚の雌)

(3) 全く異なる語を用ひ

〔男性〕	〔女性〕
Boy (少年)	Girl (少女)
Father (父)	Mother (母)
Brother (兄、弟)	Sister (姉、妹)
King (王)	Queen (女王)
Uncle (伯父、叔父)	Aunt (伯母、叔母)
Cock (雄鷄)	Hen (雌鷄)

〔男性〕	〔女性〕
Nephew (甥)	Niece (姪)
Son (子)	Daughter (娘)

形容詞としての名詞

名詞が形容詞の役目をするところがある。例へば the *summer* rose (夏の花) さか、the *cottage* window (小屋の窓) さか、the *spring* weather (春の時候)、the *college* students (大學の學生)、the *Chicago Varsity* nine (シカゴ大學野球選手) (Varsity は University の俗語、nine は野球の選手は九人なるより云ふ) などは其の例である。

Objective Adverbial

Objective は目的格 (objective case) のやうにそれが用ゐられるからである。然もそれが adverb (副詞) の用を爲すから Adverbial と云ふのである。副詞と云ふのは日本文法で『われひどく働きぬ』と云ふ時、『働く』と云ふ動詞を形容してゐるので『ひどく』は副詞であるとするが、英文法でもその通りである。I worked hard (我れひどく働きぬ) とあれば hard は adverb (副詞) である。それで Objective Adverbial とは如何なるものかと云ふに、

He lives a long way from London. (彼れは倫敦から遙か遠い所に住んでゐる)

とあれば lives と云ふ動作の語、すなはち動詞を a long way from London が形容してゐるので、a long way は副詞句と稱せられるものである。そして夫が目的格であるのである。それで a long way は Objective Adverbial Phrase と云ふのである。phrase は句と譯する。

I live a mile distant from London. (私は倫敦から一哩離れた所に住んでゐる)

It is ten miles south of London. (倫敦から南十哩である)

上の例でも分る如く Objective Adverbial Phrase は前置詞 (Preposition) が前へつかないのが特色である。今 Objective Adverbial Phrase を幾つか列挙して見やう。

(1) 時に關するもの

He came to Tokyo *last week*. (彼れは東京に先週來た)

【註】 last year (去年); last night (昨晚); last evening (昨夕)

I shall go there *the day after to-morrow*. (私は明後日其處へ行きます)

【註】 the day after to-morrow は day after to-morrow とも書く。一昨日は the day (or day) before yesterday である。

We visited the zoo at Uyeno *the other day*. (私達は此の間上野動物園へ行つた)

【註】 Zoo は zōo と發音し、Zoological Garden のこと。英國にては the Zoological Gardens と複數にする。the other day の定冠詞に注意。

I tried *many times*. (私は幾度もやつて見た)

(2) 方向、距離、繼續時間に関するもの

It is *ten miles north* of Tokyo. (それは東京を北へ十里である)

I walked *all the way*. (私はずっと皆んな歩いた)

I have come *a. this distance* to see you. (私は君に會ひたいばかりに此の道をやつて來たのだ)

It is *a little way off*. (もう少しです)

It is *an hour's walk* from here. (此處から一時間歩いて行つた所です)

(3) 計算に関するもの

The table is *five feet* high. (此のテーブルは高さ五尺ある)

【註】 feet は foot の複數。one foot は殆んど我が一尺。

The desk is one foot in height. (此の机は高さ一尺です)

【註】 長さは in length, 幅は in width である、width の發音は width である。

I am *thirty years old* (or of age). (私は三十です)

I go there once *a week*. (私は一週に一度其處へ行きます)

Please wait *a little*. (どうぞ少し待つて下さい)

It costs *five yen*. (それが五圓かゝる)

練習問題

下の誤りを正せ

(1) I shall go there the day ~~before~~ ^{after} to-morrow. (私は明後日其處へ行きます)

(2) He ~~come~~ ^{came} here yesterday night. (彼の人が昨夜此處へ來た)

(3) It is with one hour walking from here. (それは此處から一時間歩いた處です)

(4) The tree is high fifty feet. (此の木の高さ五十尺)

(5) I am an age of fifty years. (私は五十です)

I am fifty years old

"She is beauty itself"

日本の學生が『彼の人には病氣だ』と云ふのを He is sickness と譯するのを見ることは屢々である。併しかうすれば He = sickness となりて、彼れが病氣そのものであるやうなことになる。これは He is sick ともなければならぬ。若し強いて抽象名詞を用ゆる必要があれば He is sickness itself とか He is all kindness と云ふべきである。かう云へば非常に病身であり非常に親切である場合である。itself や all は度合が強いことを示すのである。

〔誤〕	〔正〕	〔正〕
She is beauty. (彼女は美しい)	She is beauty itself.	She is beautiful.
He is kindness to me. (彼の人には私に親切である)	He is all kindness to me.	He is kind to me.

今此等の句を含む文章を擧げて見やう。

1. Washington was *discretion itself* in the use of speech, never taking advantage of an opponent, or seeking a short-lived triumph in a debate.

1. ウォシントンに話をするに大變謙み深くて、議論するにも決して相手の隙につけこむさか、一時的の勝利を求むるやうなことはしなかつた。

2. Seated in his hereditary elbow chair, and looking around him like the sun of system, beaming warmth and gladness to every heart, the old squire was *hospitality itself*.

2. 祖先傳來の肘掛椅子に座し、一系統中の太陽の如く周圍を見廻しながら、人々の心をして暖かく嬉しく感ぜしめて居る老郷土は實に款待の相身全體に溢れて居た。

3. The leaving a neighbourhood in which we had enjoyed so many hours of tranquility was not without a tear, which scarcely *fortitude itself* could suppress.

3. 長い間長閑に暮した所を去るに當りては、一滴の涙なきを得なかつた。その涙は如何に剛氣な人でも抑へることは出来ないであらう。

4. The officers were *all attention* as Fritz, holding his father's hand, related his story.

4. 士官達はフリッツが父の手を執りながらその話を述べたときに一心に耳を傾けて居た。

5. The very difference in their characters produced an harmonious combination; he was of a romantic and somewhat serious cast; she was *all life and gladness*.

5. 二人の性格の相違が却て琴瑟相和する基となつた。男は浪漫的で稍々沈んだ氣風であり、女の方は全く快活な喜ばしい氣質であつた。

6. She was *all eyes and enthusiasm*.

7. 彼女は非常に注意深く且つ熱心であつた。

第三篇 冠 詞

不定冠詞の意義と用法

(*)

ナショナルの一を開くさまづ最初 *It is a dog* (それは犬です)とある。それから *See the hen run* (牝鶏の走るのを見よ)とある。實際英語を習ふ最初から a さか the さかにぶつつからないで英語を勉強することは出来ない。英語の何れの本の何れの頁を開いても a さか the さかが出て来ないことはない。此の a さか the さかは一體何であるか。都合悪くも日本語には之れに相當した言葉がない。日本語で『それは何だい』『それは犬だ』と云ふのを英語では "What is that?" "It is a dog" と云ふ。『それは犬だ』と云ふのならば "It is dog" でよささうなものなのに "It is a dog" と a が入つて来る。夏目漱石の『我輩は猫である』も "I am cat" でよささうなものを、之を英語にするには是非とも a を入れて "I am a cat" とせねばならぬ。さてはて英語と云ふものは面倒なものだ。『あの人は公園へ行つた』と云ふのを英語にするに He went to the park と the と云ふ字が入つて来る。『窓をお開け』と云ふのは Open the window! である。一體この a さか the さかは何であらうか。

a さか the さかは之を冠詞と稱する。英語で申せば Article である。この a も a dog さか、a cat さか云ふ時は a であるが egg (玉子) などになるに an egg と云ふのである。すなはち子音の前には a で母音 (a, e, i, o, u が母音、その他は子音)の前には an なのである。

此の a や an を不定冠詞 (Indefinite Article) と云ふ。すなはち a が an は重にどれとも定まらない一つを指すのに用ゐるから不定冠詞と云ふのである。the は重に定まった一個或は多くのものを指す時に用ゐるから定冠詞 (Definite Article) と云ふのである。

母音と云ふは a, e, i, o, u である。母音の前には a でなくて an であるとするれば、an animal (一つの動物)、an egg (一つの玉子)、an ink-stand (一つのインキ壺)、an oak tree (一本の樫の木)、an umbrella (一つの傘) の如く用ゐればならぬ。此處に一つ疑いの起るのは a にも ā と發音する時も、ä と發音する時も á と發音する時も ä も ā も色々ある。e にしても ē と發音する時も ē と發音する時も ē と發音する時もある。i も ī と發音する時も i と發音する時もある。o にも ō の發音やら ō の發音やら ö の發音やら ó やら色々の發音がある。u にも ū もあれば ũ もある。この何れに對しては an を用ゐるか否か。これが一つの疑問でなければならぬ。此の答は u を除く外何れも皆 an でよい。u は ũ の時は an だが ū の時は a である。何故ならば ū は yū であつて子音で初まつてゐるからである。だから The horse is a useful animal (馬は有用なる動物也) として a を用ゐるのである。useful の u が yū と發音するからである。ū は yū の音になり、母音でなくなるからである。M. P. (國會議員) に a をつけるか an をつけるかと云ふことは諸君に取つては一寸困難なる問題である。これは an M. P. である。何故ならば M は em と發音するからである。至誠堂の井上英和大辭典の出來る折予はその校正刷を見て學生のために a の條下に an M. P. の例を入れんことをすゝめたが、井上十吉氏は予の suggestion を容れて現に an M. P. の例が擧げられてある。an F, an H, an L, an M, an N, an R, an S, an X なのである。an R とか an S とかどう云ふ意味かと問はれると意味はない。たゞ S 字形にとか、R と云ふ字と云ふ時などに an S, an R などが生きて來るのである。例へば the river makes an S (河が S 字形をしてゐる); an M-roof (二つの屋根で M 字形を爲してゐるもの); an L shaped rod (エル字形の棒) などである。

又 honest のやうに h で初つても h が響かないで on'est と發音すればやつぱり o で初つてゐると同じであるから、かう云ふのは an を用ゐるのである。例へば an honest man (一人の正直な人) の如きである。その反對に one-eyed monster (片眼の怪物) のやうに母音で初まつてゐても one が wūn と發音するので矢張り子音で初つてゐると同じであるから an を用ゐないで a を用ゐるのである。すなはち a one-eyed monster と云ふのである。

(二)

意味から云へば a も an も同じであること言ふ迄もない。此の a (或は an) の意味はどうかと云ふに、

(一) 『或る一つの』と云ふ意味の時用ゐる。

日本語では全く『一個の』と云ふ意味を度外視してゐる場合である。

This is a hat. (これは帽子です)

There is a bird. (あそこに鳥がゐる)

Here comes a boy. (少年がやつて來る)

I want a penknife. (小刀が欲しい)

此の帽子にしる、鳥にしる、少年にしる、小刀にしる、どの帽子と云ふに止まる。而かも『一個の』と云ふより『一挺の』と云ふ方が強く響かない場合である。無論 Here comes a boy と云へば一人の少年がやつて來るにはちがひないが、『一人の』と云ふことを強く云つてゐるのではない。『昔與作と云ふ男があつた』は Once there lived a man whose name was Yosaku である。There is a man at the door. (誰か戸の所に來てゐます) の a man の a は『或る一人の』の義である。A gentleman called on me to-day と云へば『或る一人の紳士が今日私を訪問した』と云ふことである。『今日一人の友に會つた』と云ふのを I met with my friend to-day at Kanda と云つてはならぬ。かう云ふと友人が世界で唯一人である時に限られる。I met with a friend と云ふのは a friend of mine と云ふのがいいのである。さか one of my friends と云ふのがいいのである。

『巴里來電に依れば』と云ふのを英譯しろと生徒に云ふと、According to the telegram from Paris とか The telegram from Paris says とか The Paris telegram says とか云ふものが多い。此の the は皆 a に直されればいけない。巴里から來た電報或る一つの電報と云ふことだから a でなければいけない。

(二) 『一つ』と云ふ時に用ゆ。

『一つ』と云ふ意味の強く響く場合で a dozen (one dozen とも云ふ。一ダース) や a cup of tea (茶を一杯) などは其例である。

I shall stay here a day or two. (私は一日二日此處に逗留して行く)

I saw many daffodils at a glance. (ちらと一目に澤山の水仙を見た)

He will return in a day or two (=in one or two days). (彼れは一日二日の内に歸ります)

A handful of rice. (一さつかみの米)

【註】 a capful (帽子に一杯)、a spoonful (さじに一杯)。

A week's visit. (一週間の訪問)

A boat's length. (一艇身)

An hour's reading. (一時間の讀書)

【註】 時や長さなどに關係ある時 's を用ゐること多し。

I live at a mile's distance from the town. (町から一哩離れた所に私は住んでゐる)

【註】 I live a mile distant from the town とも云ふ。

(三) 『同一の』と云ふ意味の時。

私が小學校に居る時に先生から Birds of a feather flock together と云ふのを『一つの羽ある鳥が一所に集まる』と教つた。鳥は二つ羽があるにきまつたものなのに、一つの羽しかない鳥とはどう云ふことですかと聞いたならば、先生はぶんぶん怒りながら、つまらないことを聞いてはいけません。羽が一つしかない鳥だから片輪です。ですから片輪同志が集ると云ふのです。日本でも同病相憐むと云ふ事があるではあ

りませんかと云つて叱られた。どうしてそんなに先生が御機嫌が悪かつたのか私には分らなかつた。家へ歸つて兄に聞くに先生の仰つたことはてんで嘘で birds of a feather の a は the same (同一) の義で『一つの羽の鳥は集る、すなはち類は友を呼ぶ』と云ふことであること分つた。して見るに先生がごまかし損れたのを突込まれたやうに感じてさてはあのやうに怒つたのであらう。

We are nearly o. an age. (私達は大概まあ同じ位みの年恰好です)

Two o. a trade seldom agree. (一つの商賣をしてゐる二人は仲よくなれない)

(四) per の意味の場合。

A に per の意味の場合がある。per は『一に對して』の義である。I give ^{her} ~~per~~ five yen a month と云へば『一月毎に』『一月に』の意味で a month と云つたのである。

How often a month does he call on you? (一月に幾度位あの人には來ますか)

It runs ten miles an hour. (一時間にそれが十哩走る)

The cloth costs ten yen a yard. (此のきれば一ヤード十圓です)

The meeting is held once a week. (會は一週間に一度開かれる)

(三)

What a pity! (何て残念な事だらう) と云ふことを諸君は屢々耳にした事であらう。もし屢々聞いた事がないとすれば What a pity! である。なんて地口見たいな事はやめまして、此の a pity は名詞であるか? さあこれは難かしい問題だ。pity と云ふのは悲哀と云ふことで抽象名詞であるべき筈だ。それなのに a がついてゐる。抽象名詞と云へば親切さか悲哀さか云ふもので影も形もないもので一つの親切さか二つの親切さか云ふべきものでないから、一つの云ふ a の附くべき筈がない。それなのに a pity と a が附いてゐるとすれば普通名詞であらうか。然り a pity は普通名詞である。抽象名詞がその性質を

もつた行爲なり、人なり、物なりに即して用ゐられる時は一つの親切な行、一つの残念な事と云ふ風に云ふ事が出来るので普通名詞となるのである。例を挙げれば

〔抽象名詞〕	〔普通名詞と變じた抽象名詞〕
Beauty (美)	A beauty (美人)
Kindness (親切)	A kindness (親切な仕業)
Pity (憐愍、悲哀)	A pity (悲哀すべき事、残念な事)
Power (勢力、力)	A power (強國)
Work (勞作、勞働)	A work (作物)
Speech (辯舌、言語)	A speech (一場の演説)

これと同じやうに物質名詞には元來 a (或は an) が附かないのであるが、物質名詞が普通名詞となつた場合には a (或は an) を附けることが出来る。例へば銅の如き、形にまさまりがなく、數へることの出来ないものであるから物質名詞として a (或は an) を附けることは出来ない。a は『一つの』と云ふ意味だからである。所が銅 (copper) が銅貨と云ふ意味になるに a (或は an) を附けることが出来る。

Have you a copper? (君銅貨一つ持つてゐるか)
Yes, I have two coppers. (僕は銅貨二つ持つてゐる)

石 (stone) などもさうである。これも元來物質名詞であるが石ころと云ふと普通名詞になる。That house is built of stone. (あの家は石造だ)と云へば stone は物質名詞だから the stone とも a stone とも云はないのであるが、He threw a stone at me. (彼れは石を私に投げた)と云へば a stone は普通名詞である。

(四)

I do not think he was as good a scholar as I was. (私のやうに [私がゑらい學者であつたやうに] あの人がゑらい學者であつたとは思はない)

Never have I seen so lonely a place. (私はこんな淋しい所を見たことがない)

【註】 Never have I seen [I have never seen] とするより意味強し。

However great a man he may be he is not without faults. (どんなにあの人がゑらいとしても缺點がないことはない)

Billy had too independent a spirit to seek success by favour. (ビリーは人のひいきになつて成功しやうと求めるには [求めることの出来ないほど] あまりに獨立の精神を持つてゐた)

What a pretty thing it is! (何ときれいな物だらう)

How pretty a thing it is! (何ときれいな物だらう)

I don't like such a thing. (私はこんなものは嫌ひだ)

I don't like such a foolish thing. (私はこんな馬鹿な事は嫌ひだ)

【註】 such a foolish thing と云ふが、so を用ゐると so foolish a thing となる。

以上の例で分る如く、a は so, as, too, what, how, however 等と共に用ゐられる。その用ゐ方は上の例を見れば自づから理解せらるゝであらう。

又一見複數の如き語の前、例へば a dozen men [=a dozen of men] (十二人の人)、及び複數を示す形容詞 few, good many, great many の前にも用ゆ。in a few days (二三日内に)、a good many books (多くの本)、a great many people (多くの人)の如し。

(五)

人名に a とか an を附することがある。

He is a Yamada. (彼れは山田家の一人だ)

He killed one Yamada. (あれは山田某を殺した)

I wish to become an Edison. (私はエディソンのやうなゑらい發明家になりたい)

I hope there will be many future Napoleons among our young men. (私が青年の間に幾多の子ポーリオンの出でんことを望む)

練習問題

(a) 下の文の冠詞の誤謬を正せ。

1. I met the friend of mine at my uncle's. (私は伯父さんの家で友人に会った)

【註】『私の友人』と云ふのは a friend of mine しか、one of my friends 或は a friend と云ひ、the friend とは云はず。the friend と云へばきまつた友人か、一人しかなき友人の場合である。

2. Bakin was the great novelist. (馬琴は一人のみらい小説家であつた)

3. She sings the song several times the day. (彼女は一日にその歌を数度歌ふ)

4. It is pen. (それはペンです)

5. It is a spring now. (今は春だ)

6. This is an hat. (これは帽子だ)

7. A eggs. (玉子)

【註】 egg と云へば鳥類の卵子を云ふものなれど、我國の慣用と同じく英語にても普通 egg と云へば鶏卵を云ふのである。

8. An one-yen note. (一圓札)

【註】 one の o は母音なれど wūn と發音するを以て a ならざるべからず。何んなれば wū は母音ならざれば也。

9. A university. (大學)

【註】 university の u が yū と發音するなら、これも a でなければならぬ。

(b) 下の日本語を英譯せよ。

1. 昔一人の王があつた。 *once upon a time*

【答】 Once upon a time there was a King; There was once a King.

2. 彼は妻と三人の子を後に残した。

【答】 He left a wife and three children.

3. おまへは父があるのか。

【答】 Have you a father?

【註】 此等の a は世間一般に father なり wife なりが多くあるがその内の一人と云ふことである。

4. これは危険な一種の火薬である。

【答】 This is a dangerous powder.

5. 君は記憶がいい。

【答】 You have a good memory.

6. あの方は日本人だ。

【答】 He is a Japanese.

7. 一滴の水。

【答】 A drop of water.

8. 一日二日の内には御訪れする。

【答】 I shall call on you in a day or two.

9. 一目で見てさつた。

【答】 I saw that at a glance.

10. 類は友を呼ぶ。

【答】 Birds of a feather flock together.

11. 會は年に二度開かれる。

【答】 The meeting is held twice a year.

12. 此のリボンは一ヤール一圓五十錢です。

【答】 This ribbon is one yen and fifty a yard.

13. 地球は球のやうだ。

【答】 The earth is like a ball.

14. 息子は両親の云ふことを聞くものだ。

【答】 A son should obey his parents.

【註】 A son の a は any の義である。『息子と云ふもの』と云ふ義である。

15. 一週間の休暇。

【答】 A week's holiday.

16. これは實にいい景色だ。

Have you a father?

【答】 How fine a sight this is!

17. 私はこんなきれいな景色を見たことがない。

【答】 I have never seen such a fine view.
never have seen such a fine view

18. この機逸すすべからず。

【答】 This is too good a chance to lose.

19. 何て人だらう。

【答】 What a man he is!

20. 太郎は次郎ほど可愛い子だ。

【答】 Taro is as pretty a boy as Jiro.

“The” の意義と用法

(一)

不定冠詞 [a (或は an)] に對するのが定冠詞 (the) である。これはきまつてゐる物を指し示す時に用ゐるものであるから定冠詞を云ふのである。たゞへば

There is a hat on the table. The hat is black. (テーブルの上に帽子がある。その帽子は黒い)

さ云ふ例で明白である如く、初めにはたゞ帽子があるを云ふので a hat であるが、その帽子を云ふので the hat である。普通名詞は a hat をするか the hat をするか、a hat が複数になつて hats となるか、the hat が複数になつて the hats となるかである。ただ hat となることはない。上の例を複数にすれば、

There are hats on the table. The hats are black. (テーブルの上に帽子がある。この帽子は黒い)

となる。the hats はその帽子を云ふことである。

Max O'Rell の Jonathon and His Continent を云ふ米國觀察記に米國には統一された米國氣質を云ふものがない。南部の人と西部の人は同じ悪口を云はれても怒り工合がちがふを云ふことを云つて、紐育を去つて電車に乗ると非常な人込である。するさ一人が押されたを云つ

て、さういふ金で電車に乗つて馬車に乗つてゐるやうに氣持よくやうとする連中が何處にも居るに見える。そして “You are a cad, sir!” (君は紳士でないれえ) と云ふ。云はれた人は極くおだやかに出て帽子を取つて “And you, sir, are a perfect gentleman” (あなたは全く紳士ですよ) と云ふ。その次に Max O'Rell は The perfect gentleman looked very silly for a few moments (その紳士先生は暫らく茫然としてゐた) と書いてゐる。この the perfect gentleman の the は『その』さか『件の』さかの意味である。

かう云ふ例に接しやうとしたらお伽噺か何かを見玉へ。必ず書き出しには

There was once a man, who had three children. (昔一人の男があつて三人の子供があつた)

と云ふやうに a man をしてあつて、次にその人のことを云ふ時には「その人が」と云ふ意味で、the man を云つてゐるのを見るであらう。

併しイソップの物語などの表題に皆な盡く the Boy and the Wolf (少年と狼) の如くあるのを見るであらう。これは普通ならば A Boy and A Wolf であるべきなれど、これから話をするきまつた boy を云ふ意味で the を用ゐてゐるのである。

イソップの話 (Aesop's Fables) の一つに The Fox and the Crow を云ふ話がある。——ある鳥が嘴にチーズを一と切れ持つて木の枝に止つてゐた (A crow sat on a bough of tree with a piece of cheese in her beak). ずるい狐 (a sly old fox) が鳥を見て云つた。『何てきれいな鳥だらう。おまへは、おまへの眼の輝いてゐるこそ。その羽のきめのいゝこそ。きつとおまへはいゝ聲 (a sweet voice) をもつてゐるにちがひない。一と聲聞かして貰いたいものだ』之を聞いた鳥は大層喜んでかあさ一と聲鳴くと下にゐた狐は馬鹿野郎やいと云はぬばかりにしてそのチーズを持つて逃げた。——と云筋である。初め話の口を云ふ時には a crow を云ひ、a fox を云つてゐるのを見るであらう。然も表題に the Fox and the crow を the の附いてゐるのは the Story of the Fox and the Crow About Whom I Will Tell You Now の義である。

定冠詞は不定冠詞さちがつてきまつたものを指すのである。限定的である。だから「窓をお閉め」と云ふ如き、どの窓を閉めるべきか言はれた人には分つてゐるので、the を用ゐて shut the window! と云ふのである。

(二)

さ書けば定冠詞の用法などは實に易々たるものだが、さうも行かないのである。

The horse is a useful animal. (馬は有用な動物なり)
と云へば何かの話に出た馬と云ふことか、話をしてゐる同志互に知れてゐる馬かと云ふにさうではない。この時の the は「と云ふもの」の義で種類全體を代表する場合に用ゐられたのである。「獅子は獸類の王也」と云ふのを譯す場合「と云ふもの」の the を用ゐて、

The lion is the king of all beasts.

とするのである。但し man と woman と云ふ語は例外で、

Man is stronger than woman. (男は女より強いものだ)

の如く the man 或は the woman とせず、唯 man とし woman とする。

Women are extremists; they are less capable of friendship than men, but they are more capable of love. (女は極端家である。友情の能力に於ては遠く男子に及ばざるも、戀愛に於ては遙かに男子を凌ぐ)

A woman is one of two things—a necessity or a nuisance; she's generally the latter. (女は二つの中何れかである—必需品か邪魔な物。大概後者である)

A woman is one of two things—a necessity or a nuisance; she's generally the latter. (女は二つの中何れかである—必需品か邪魔な物。大概後者である)

What is lighter than a feather?—Dust.

What is lighter than dust?—Wind.

What is lighter than wind?—Woman.

What is lighter than woman?—Nothing.

鳥の羽より軽いものは何か—塵。

塵埃より軽い物は何か—風。

風より軽い物は何か—女。

女より軽い物は何か—無。

Woman is weak and man is strong. (女は弱く男は強し)

以上の例にて分る如く「女と云ふものは」と云ふ時に、women とも、a woman とも、~~woman~~ ^{woman} とも云ふ。併し the woman とは云はない。man の場合も同じやうに「男と云ふものは」と云ふ時に、men とも、a man とも man とも用ゐるが、the man とは云はない。man と woman の外のもの、たゞへば「松の木と云ふものは」と云ふ時の如き、A pine tree と一つの松の木を出してその種類を代表させることもあるし、Pine trees として多くの松の木を出してその種のことを云ふこともあるし、The pine tree として松の木の種類を代表させることもある。表にすれば次の如くである。

Man The pine tree
A man A pine tree
Men Pine trees

故に先きの『馬は有用な動物也』も次の如く三種に言ふことが出来る。

The horse is a useful animal.

A horse (=any horse) is a useful animal.

Horses are useful animals.

(三)

此の原稿を書いてゐる暇に H. G. Wells の “New Worlds for Old” と云ふ本を讀んだ。彼れの意見では子供が生れたならばそれは両親の子としてのみでなく、社會の子として社會が之を取り上げて養ふやうにしなければいけない。今日の子供は營養が不足してゐる。教育に缺けてゐる。貧乏でいぢけてゐる。之を救はねばならぬと云ふのである。その所に

No doubt in every one of the great civilized countries of the world at the present time such children are to be counted by the hundred thousand—by the million.

さ云ふ文句がある。『疑もなく世界の文明の大國家に於て現今かう云ふ子供が十萬一否な百萬を以て數ふべし』。さ云ふことである。この by the hundred thousand 及び by the million の the はさう云ふ意味かさ云ふに、何々を以て量るさか何々を以て數ふるさか云ふ時に by the さ the を用ゐるのである。

They sell flannel by the yard. (フランネルはヤードで賣る)

【註】 they は people の義。flan'nel の發音はフランネルではない。

These handkerchiefs are sold by the dozen. (此のハンケチは皆なダースで賣ります)

【註】 handkerchief 複數は handkerchiefs にて handkerchieves に非ず。

They work by the month. (彼等は月極めで働く)

I hired horses by the hour. (私は一時間幾らで馬を借りた)

此の時の by は『に従つて』(in accordance with) さか『それを標準として』(taking or regarding as a standard) の義である。

(四)

次のやうな unique (唯一) な性質を持つてゐる語には the が附せられる。

the sun (太陽)	the moon (月)	the earth (地球)
the globe (地球)	the universe (宇宙)	the world (世界)
the equator (赤道)	the poles (兩極)	the tropics (熱帶)
the sky (空)	the sea (海)	the ocean (大洋)
the bible (聖書)	the north (北)	the south (南)
the east (東)	the west (西)	the right (右)
the left (左)	the water (水上、水中)	the air (空中)

the army (陸軍) the navy (海軍) the breeze (微風)
the wind (風) 等。

私は水が飲みたいと云ふのは I want a glass of water でよいが、舟が水の上を走ると云ふなどは A boat runs on water でなく on the water とする。魚が水中に見える A fish is seen in the water である。かう云ふ時の water は海や川や池などの或る場所の水である。

東 (the east) や西 (the west) に the が附くが東西 (east and west) と云ふ連關した句になるさ the を省く。

空氣は人間になくてならぬものだと云ふやうな時は air でよいが、空中と云ふ時は the が入用である。I feel rain in the air (何さなく雨はくなくなつて來た)、An aeroplane flies in the air (空中飛行機が空中を飛ぶ) などはその例である。

陸軍大臣は日本では The Minister of War と云ふ。海軍大臣は The Minister of the Navy と云ふ。the Navy と the のあるのに注意せねばならぬ。

丸善から出た『近世會話』と云ふ本に短冊のこゝを書いて、

B. I have often seen hanging from the branches, little pieces of paper fluttering in the breeze; what are they?

A. They are poems written in praise of the flower.

B. 枝からよく小さな紙きれが風にふらふら吹かれながら下つてゐるのを見ましたが、あれは何ですか。

A. あれは花を歌んだ短冊です。

さある。この中にある the branches の the は前に出た枝のこゝだから the が入用である。the flower も前に出た梅の花のこゝだから the が入用である。併し the breeze に the は變なやうだが breeze には the をつけるのである。

『彼の人は世界中での一番の勇士だ』は He is one of the bravest soldiers in the world と云へども、earth を用ゐる時は in the world の代りに on earth として此の場合には定冠詞を省く。

(五)

序数詞 (Cardinal Numerals) の前に the が附く。

The fifth year of Taisho. (大正五年)

There was a fire in Kanda on the 3rd. (三日に神田に火事あり)

On the 1st of January I started for Ise. (一月の一日に私は伊勢に向つて立つた)

Nicholas the Second. (ニコラス二世)

(六)

形容詞が集合名詞の意味を爲す場合。

The poor (= poor people). [貧しき人々]

The rich (= rich people). [富める人々]

形容詞が抽象名詞の意味を爲す場合。

The beautiful (= beauty). [美]

名詞が抽象的の意味で用ゐらるゝ場合。

The pen (= literary influence) is mightier than the sword (= military power). [ペン (= 筆力) は 剣 (= 武力) に優る]

(七)

関係句 (Relative Clause) によりて意味を制限されたる名詞に添へて用ふ。

The book [that] you borrowed is very interesting. (君の借りた本は素的に面白い本だ)

That is the best [that] I can do for you. (それが私が君にしてやれる最上のことだ)

The man who learns to say 'no' generally succeeds in this world; while the woman is likely to find herself an old-maid. (否と云ふことを知る男は通例世の中の我儘者である。併し之が女だま一生オールドミスで終ることになるだらう)

The two German prisoners who had escaped from the detention.

camp at Marugame have been arrested. (さきに丸龜の俘虜收容所から逃亡したる二人の獨逸俘虜は捕へられたり)

Two German prisoners who.....とした文に the をつけることは雖しも氣付くことかも知れないが the man who は a man who としたがものである。ある誰れでもいゝ人ありての意味であるのであたり前ならば man さか a man さか云ふべき所であるのを who をつけて、かう云ふ人はさ限定したので the がつくのである。

(八)

次のやうな形容詞の前に the を附す。

On the very night a big fire broke out in the vicinity of my house. (その晩にさ、私の家の傍に大火があつてれ)

Quite the same. (全く同じだ)

The following are the Japanese passengers who are believed to have been drowned. (次のものは溺死したりさ信ぜらるゝ日本人也)

The only means is this. (唯一の方法は是れのみ)

On the previous day, the party had reached the town. (其の前日一行はその市に到着したりき)

The chief object of his visit to Petrograd was to conclude peace. (彼の露都訪問の主なる目的は平和締結なりき)

(九)

最上級の形容詞に定冠詞を附す。

This is the largest building that I have ever seen. (これは僕が今まで一番大きな建物です)

Taro is the tallest of all his brothers. (太郎は兄弟の中で一番丈が高い)

The most remarkable love story ever written. (今日まで出た中の一番すぐれた恋愛小説)

The most learned man may not know this. (一番の學者でもこれには知るまい)

【註】 最上級の語の前に even を入れて解釋することあり。

(十)

平素の談話の中に出て聞き手にそれと分るもの。

The Emperor. (皇帝)

The Empress. (皇后)

The doctor. (かゝりつけの醫者)

The milkman. (家の牛乳屋)

The park. (家の傍の公園)

The post office. (家の傍の郵便局)

【註】 the country と云へば此の國と云ふ時と、田舎と云ふ時とあり。共に定冠詞を要す。

(十一)

The *to* one's の義の場合がある。One must not bend the head over the plate (物を食べるに皿の上に頭をのしかゝらすべからず)の the head *is* his head の意味である。

He stared me in the face (彼は私をじろじろ見た)を He stared my face とは云はず。

(十二)

私はなほ定冠詞の用法の更に困難なことを述べればならぬ。次の如き場合には固有名詞の前にも the が附くのである。そして煩を避くる爲めに私は止むなく表の體裁を取らねばならぬことを遺憾とする。

(1) 川河 (River) の名の前:-

The Thames. (テムズ河)

【註】 發音 tēnz で倫敦を流れる川。

The Sumida. (墨田川)

The river Sumida
【註】 The River Sumida, the river Sumida, the Sumida River, the Sumida river とも書く。

(2) 海 (Sea), 洋 (Ocean), 海峡 (Strait) の名の前:-

The Japan Sea. (日本海)

The Atlantic Ocean. (大西洋)

The Dardanelles. (ダーダネルス海峡)

【註】 湖、岬、灣は Lake Biwa (琵琶湖)、Cape Horn (ホーン岬)、Tokyo Bay (東京灣)の如く冠詞を用ゐず。ある有名な英學者の文法書に The Tokyo Bay とあるさうであるがこれは感服しない。岬でも灣でも二つの形式があつて、大概演習上下の二つの何れかを用ゐてゐる。

1. { The Cape of Good Hope.

{ The Bay of Biscay.

2. { Cape Horn.

{ Hudson Bay.

東京灣を英語にした場合の形式は未だ成立つてゐないから the Bay of Tokyo としても Tokyo Bay としてもいゝ譯である。然し the Tokyo Bay とした例はまだ見た事がない。

(3) 船艦 (ship) の名の前:-

The Shinyo. (春洋丸)

The T. K. K. liner Shinyo. (東洋汽船會社定期船春洋丸)

【註】 T. K. K. は Toyo Kisen Kaisha の略。liner は line (航路) を走るものと云ふので定期船のこと。

The steamer Shinyo. (春洋丸)

The steamship Shinyo. (春洋丸)

The str. Shinyo. (春洋丸)

【註】 str. は steamer の略。steamship の略は ss. とする。

The Kasuga. (春日艦)

The warship Kasuga. (軍艦春日)

The cruiser Kasuga. (巡洋艦春日)

【註】 船の名は Italics にするか、“——” と quotation marks の中に入れるか、或は普通の字體のままにするか三種の書き方がある。

(4) 群島 (Group of Islands) の名の前:-

The Loochoo Isles. (琉球諸島)

The Kurile Islands. (千島)

The Bonin Islands. (小笠原群島)

The Philippines. (フィリピン群島)

【註】 單獨の島の名は Taiwan (臺灣), Formosa (臺灣の元の名) の如く the を冠せず。

(5) 半島 (Peninsula) の名の前:-

The Balkan Peninsula. (バルカン半島)

【註】 Balkan の發音は bal'kan と Bäl'kan の二種あり。peninsula の發音は pen-in'sü-la である。

(6) 山脈 (Mountain Range) 及び山脈の名の前:-

The Alps. (アルプス山脈)

The Himalayas. (ヒマラヤ山脈)

(7) 複數形の邦土 (Country) の名の前:-

The Netherlands. (和蘭國)

The Congo Free States. (コンゴ自由國)

The United States. (米國合衆國)

(8) 家族 (Family) [但し一族一門を指す場合] の名の前:-

The Bourbons. (ブルボン家)

The Rothschilds. (ロスチャイルド家)

The Tokugawa. (徳川家)

(9) 黨派員 (Party), 國民 (People), 軍 (Army) 又は宗派 (Sect), 人種 (Race) の名の前:-

The Liberals. (自由黨員 [全體])

The Unionists. (統一黨員 [全體])

The Socialists. (社會黨員 [全體])

The Russians. (露國人或は露軍)

The Germans. (獨逸人或は獨軍)

The French. (佛國人或は佛軍)

The Christians. (基督教徒 [全體])

The Buddhists. (佛教徒 [全體])

The Japanese. (日本人全體及び日本軍)

The English. (英國人全體及び英軍)

The Chinese. (支那人全體及び支那軍)

The Aryans. (アリヤン人全體)

【註】 He is a Unionist (彼れは統一黨員だ); He is a Christian (彼れは基督教徒です); He is a Russian (彼の人露國人だ) 等の例を參照せよ。一人の日本人と云ふ時は He is a Japanese と云ふ。米國の男と云ふ時は American men 或は the American man と云ふ。

(10) 特種の地名の前:-

普通地名には冠詞を附せざるが規則であるが、次に擧ぐるものは例外である。此の種のものには其の數甚だ少ない。

The Crimea.

The Tyrol.

The Campania.

The Carnatic.

The Punjab.

The Hague.

The Transvaal.

The Sahara.

The Soudan.

The Deccan.

(11) 公共の設立物 (Public Building or Institution).

The Naval College. (海軍大學校)

The Bank of Japan. (日本銀行)

The Specie Bank. (正金銀行)

The Royal School of Mines. (王立鑛山學校)

The Tokyo Imperial University. (東京帝國大學)

The Seiyoken Hotel. (精養軒ホテル)

【註】地名人名を冠する設立物には冠詞のないのが常である。學校の名など形容詞が附くさか of を云ふ字が入るかしなければ十中八九冠詞がない。Eton College, Oxford University, Cambridge University 等は其例である。米國には University 又は College を稱すべきものが大小合せて約五百九十六あるが、その中眞に University を稱し得べき資格を備ふるものは次の十四大學である。

1. California University.
2. The Catholic University of America.
3. Chicago University.
4. Clark University.
5. Columbia University.
6. Cornell University.
7. Harvard University.
8. John Hopkins University.
9. Michigan University.
10. Pennsylvania University.
11. Princeton University.
12. Leland Stanford Junior University.
13. Wisconsin University.
14. Yale University.

これで見ても the の附かない學校の方が多きことが分るであらう。その他公園の名、(Hyde Park, Ueno Park), 城の名 (Windsor Castle), 停車場の名 (Shimbashi Station) などには冠詞を用ゐない。

(12) 會名の前に:-

The Society for the Prevention of Cruelty to Animals. (動物虐待防止會)

The Humane Society. (動物愛護等を目的とする會)

(13) 新聞の名の前に:-

The Japan Times. (シヤパンタイムズ)

The Sun. (サン)

The Asahi. (朝日新聞)

【註】新聞の名は Italics にするさしなほ quotation marks に入れるさ三つの書き方がある。

(14) 特質を表はす形容詞若しくは名詞を添へた人名の前に:-

The ambitious Caesar. (野心満々たるシーザー)

The undaunted Hideyoshi. (恐るゝこそなき秀吉)

The Late Professor Lloyd. (故ロイド教授)

William the Conqueror. (征服者ウヰリアム)

The Rev. John or the Rev. John Smith. (ゲボン師或はゲボン
スミス師)

【註】Rev. は Reverend の略にて僧侶の前に附する尊稱である。又 the を抜くこともある。之を單に the Rev. Smith と云つて Christian Name を省くは卑俗である。

【注意】但し little, young, old, dear, great 等には冠詞を要せず。Little Taro さか Old Simon (シモン老人) Young Ferdinand (若きフェルディナンド) さか Dear Jimmy (かほいゝガミさん) Great Juno (ゲコーノ大神) などの如く the を附せず。

(15) 下の如き場合に於ける固有名詞の前に:-

The Paris of Today. (今日の巴黎)

I am not the John Whiston of yesterday. (私もさう昨日のゲボンホイストンではない)

Tokyo is the London of Japan. (東京は日本の倫敦です)

He is the Ruskin of the age. (彼れは現代のラスキンです)

【註】of the age さか of Japan さか云ふ制限した言葉が附ないさ a を附ける。He is a Daniel in wisdom (彼れは智慧に於て今ゲニエルと云つてよい) さか Nagoya is a Tokyo on a small scale (名古屋は東京の小さいのだれ) などは其の例である。

(十三)

the に就てなほ少しばかり氣付いたことを書き集めて見たいと思ふ。

(1) A fire broke out in Oji in the small hours of February 2. (二月二日の午前一二時頃王子に出火あり)

この in the small hours と云ふのは朝の一時とか二時とか三時とか云ふ時刻を云ふので、hours は複数とし、the を前に置くのがきまりである。

(2) The baseball match which was to take place on February 10 was postponed until next Sunday owing to bad weather. (二月十日に行はるべき筈なりし野球試合は天候悪しかりし爲め次の日曜まで延引せられたり)

この bad weather を兎角 owing to the bad weather としがるものだが the は入らないのである。

(3) Prince Yamagata started for Kyoto yesterday by the 1.50 p.m. train. (山縣公は昨日午後一時五十分の列車にて京都に向へり)

【註】 1.50 p.m. は one fifty pē ēm と讀む。p.m. は post meridiem の略で午後の義、午前は a.m. を用ゆ。何れも P.M. とも A.M. とも書く。

この by the 1.50 p.m. train を學生は兎角 by 1.50 p.m.'s train と間違へるが注意すべきである。the のあること、p.m. の次に 's のないことに注意すべきである。この文を書き替へて、started for Kyoto yesterday at 1.50 p.m. by train とするこの出来ることは言ふ迄もない。

(4) The death is announced of Mr. Shinnosuke Matsubara on February 14. (松原新之助氏二月十四日死去す)

この文は死亡を報ずる場合、obituary (死亡の報道と死者の略傳) を書く時に用ゐられる最も普通な書き方である。the death は of へつゝくので、death の前に the が入用となるのである。

(5) Both armies are advancing. (兩軍進軍中)

兩軍を云へばきまつた軍であるから the both armies としたらよかりさうなものだが、the は用ゐないのである。

(6) I had the hour of delivering a speech there. (其處で一場の演説を爲す光榮を有したり)

この時 the hour と the を用ゐるのである。

(7) I went to Paris in the hope of seeing her. (彼女に會はんさて巴里に行つた)

the hope と the のあることに注意。

(8) A pickpocket was arrested in the act of stealing a purse from an Osaka merchant in a street car near Sudacho on February 25. (二月廿五日或る一人の掏摸須田町近く電車内にて大阪の商人より金入れを捕らんとして捕へられたり)

この in the act of の the は上の例文と同じやうに入用である。

(9) I hope the day will come soon when I will be sent to Europe. (私が歐洲へ派遣される日近きにあるであらうと思ふ)

I hope と云ふ字は希望を含めてさう思ふと云ふ時用ゐられる言葉である。I hope he will recover soon と云へば『彼の人はずきに癒るでせう』と云ひながらその中に希望を含めてゐるのである。the day は when へかゝり、『……する時の日が』と云ふので the を用ゐる。尤も a を用ゐないと思ふわけではなく、a を用ゐる人もある。現に Max O'Rell は Perhaps, a day will come when American law will prevent publishers from stealing the works of European writers. (恐らく米國の法律が歐洲の作家の作物を出版業者の剽竊することを禁ずる日來るべし)

の如く a day と用ゐてゐる。

(10) Mr. Akimoto and Mr. Suzuki are now patients at the Tokyo and the Rakuzando Hospital, respectively. (秋本君と鈴木君は東京山堂病院と入院中なり)

山堂病院と入院中なり)

and the Rakuzando Hospital と云ふ代りに the do Hospital とする。

no, the poet, has returned from France. (詩人興佛蘭西より歸朝せり)

此の the poet の the は『あの詩人として知られたる』と云ふ意味である。女優森律子と云はんをせば Mis Ritsu Mori, the actress と云ふべし。又 the poet Yosano, the poet Homer の如く云はれ得るが poet Yo a o, poet Homer の如くは云はず。

(12) In the year 1868 the party returned home. (一八六八年に一行は歸朝せり)

此の時 the year と the をつける。in 1868 としていゝことは云ふ迄もない。in January, 1868 といふ時、in January 1868 とも in January, 1868 ともする。

Upon the stroke of three, the meeting began. (三時打つと會は始まつた)

upon a stroke of three などとすべからず。

練習問題

一、下の誤りを正せ。

The London telegram of January 5 says that a German submarine was sunk in the Mediterranean. (一月五日發倫敦電報は獨逸の一潛航艇が地中海にて沈没したることを報ぜり)

They work by the month. (彼等は月極めて働く)

The Moon is shining bright. (月が皎々として輝いてゐる)

On left, there is a building. (左手に大きな建物がある)

The late General Nogi was one of the noblest soldiers in world. (故乃木大將は世界にて最も人格崇高なりし武人なりき)

On 2 I started for Kyoto. (二日に予は京都に向け出立したり)

【註】 on March 2 (三月二日に)の如くは云へど on 2 とはせず。

on the 2nd とすべし。on the 2nd と云へば當月の二日のことにて

on the 2nd instant 或は on the inst. とするに同じ。

A book that you gave me the other day is

君がくれた本はあまり難し過ぎる)

The total value of coal raised in 1896 was nearly 34,000,000. (一千八百九十六年に發せられたる石炭の總額三千四百萬兩なりと)

Emperor went to Hayama yesterday. (陛下は昨日葉山に行幸あり)

Sumida River. (隅田川)

Kumano Maru arrived in Kobe this morning. (熊野丸今朝神戸に着せり)

He is the Japanese. (彼は日本人である)

The Peace Conference at Hague. (平野の平和會議)

She is the most beautiful girl that I have ever met. (彼女は私が今まで會つた中で一番きれいな娘だ)

冠詞の省略

諸君が英字新聞を讀むならば、誰れ誰れが何々に任命せられたと云ふのを、例へば Dr. Araki has been appointed President of the Kyoto Imperial University (荒木博士京都帝國大學總長に任命せられたり)の如く President の前に定冠詞の省かれてゐるのを見るであらう。或は又 Mr. Okura was created baron (大倉氏は男爵を授けられたり) (creat は無爵のものに爵位を與ふる時用ゆ。元來創造すると云ふのが第一の意味である)の如く baron の前に a と云ふ不定冠詞を省かれてゐるのを見るであらう。かう云ふのを既して文法では冠詞の省略と云つてゐる。

(1) 名詞を呼び掛けの言葉として用ゐる場合冠詞を略す。

Young man, why didn't you go there? (若者よ、何故あまへは其處に行かなかつたか)

Hal'lo, old chap! (やあ君)

【註】 old は『老いたる』の義に非ず。old man とも old sc'l.v とも云ふ。

(2) Mother, father, brother, sister 等家族の一員を指す場合冠詞を略す方が普通である。

Mother (=my mother) is sick in bed, and father (=my father) is far away. What shall I do? (母さんが病気で床に就いておます。父さんは遠くにゐる。私はどうしやうか)

3) ある一つの名詞を下の如く語として出す場合に冠詞を省略す。

"Hana" is the Japanese for "flower." (花は flower に對する日本語である)

"Count" is too insignificant a title for his merits. (伯爵は彼れの功績に對してはあまり軽い爵位である)

【比較】 He is a Count. (彼れは一人の伯爵である)

(4) "a kind of" や "a sort of" の後に冠詞を略す。

The whale is a kind of beast. (鯨は一種の獸類である)

His brother is quite a different sort of man. (彼れの弟は一風變つた人です)

【註】 brother は elder brother (兄)か younger brother (弟)か何れかを云ふ。自分が兄なれば brother は弟たるべきも、三人以上も兄弟ある時には名前を云はずしては分らざるべし。されど弟なり兄なりを知らぬ人には、別に名前を云ふ必要な故、brother を用ゆ。明瞭に云ふ時には矢張り兄には elder brother を用ひ、弟には younger brother を用ゆ。sister の場合も全く之と同一。

されど疑問の形、或は感嘆の形を用ゆる時は不定冠詞を用ゐる。

What a strange kind of a beast the whale is! (何て妙な種類の獸類で鯨はあるよ)

What sort of a man is he? (彼の人はいんな人かれ)

(5) 官職名が名前の次に來る時冠詞を略す。

Dr. Anezaki, Professor of the Tokyo Imperial University Literary College. (東京帝國大學文科大学教授姉崎博士)

Mr. Hioki, Japanese Minister at Peking (或は to China, to Peking) (駐支日本公使日置氏)

欠

欠

けて聞くだけの音楽を解する方がないと言ふのであらう。それにしても I have no ears for music と言つてよささうなものだが、さうは言はないのだから仕方がない。もし「音楽に耳を持つてゐる」と言ふのなら I have an ear for music と言つて、これも I have ears for music とは云はない。

“To give ear to” と言ふ辭に to listen (聴く)の意味で

6. to open one's ears と言つて ears を複数にする。さうかと思ふさ
7. It reached my ear (私の耳に入った)と言つて、この時は単数である。「.....を聞き流す」と言ふ時は
8. I turned a deaf ear to him と言つて deaf ears ではない。

練習問題

下の文章の誤謬を正せ。

1. Mr. A was appointed the Governor of Chiba. (A 氏は千葉縣知事に任ぜられたり)

【註】 The appointment of Mr. A as Governor of Chiba was announced yesterday. (A 氏の千葉縣知事に命ぜられたることを昨日發表せられたり)と言ふ。

2. The teacher as he is, he does not read at all. (彼れは教師だけれど彼れは少しも讀書しない)
3. He is in the gaol. (彼れは入獄中なり)

【註】 gaol は英國の綴りで jail と發音す。米國では jail と綴る。

4. My uncle came to the town yesterday. (伯父さんが昨日上京した)
5. I went to the bed early. (私は早く就寝した)
6. He works hard from the morning to the night. (彼れは朝から晩まで大いに働く)
7. The Kumano Maru is at an anchor in the Yokohama Harbour. (熊野丸は今横浜港に碇泊中也)

何れの場合でも beautiful でよいのである。この例の中の初めの This は代名詞である。代名詞と云ふは、he, his, him, she, her, they, them, it, its, this, that, these, those 等である。

His book is red. (彼れの本は赤い)

This is red. (これは赤い)

此の his は人稱代名詞 (Personal Pronoun) に屬する。そして this は指示代名詞 (Demonstrative Pronoun) [或は形容詞的代名詞 (Adjective Pronoun)] に屬する。His book と云へば his は代名詞であるのに、this book と云ふとこの this は形容詞なのである。his book の his は指示代名詞である。『彼れの本』と指し示すからである。this book の this は『この本』と指し示すから指示形容詞 (Demonstrative Adjective) とも稱し、又代名詞に似てゐるから代名形容詞 (Pronominal Adjective) とも稱す。

Father gave me this watch. (父がこの懐中時計を呉れた)

【註】 My father, my mother の代りに、father, mother, とも云ふ。watch は懐中時計である。柱時計は clock である。日本語の『やる』『呉れる』は何れも give である。

The weather, though cool, is not healthy at this time of the year.

涼しいが今時は身體によくない

【註】 of the year は『一年の』と云ふことなれど of a year とは云はず。“Kan” is the coldest season of the year (寒は一年の最も寒い時節である) と云つて of a year とは云はない。at this time の this は『此の』でよけれど、『こんな』とも譯すべし。『こんな天氣に出掛けるな』は Don't go out in this weather と譯すべし。

I shall call on you this evening. (私は今晚あなたを訪問します)

(二)

形容詞の種類を分つて下のやうである。

1. 代名形容詞 (Pronominal Adjective).

例:—

This bird is pretty. (この鳥はきれいだ)

That book is small. (あの本は小さい)

【註】 此の代名詞は物を指示する (demonstrate) 故に Pronominal Adjective の代りに Demonstrative Adjective とも云ふ。

2. 数量形容詞 (Quantitative Adjective).

例:—

There are many students. (其處には澤山の學生がゐる)

There is much water in it. (其の中に澤山の水がある)

3. 性質形容詞 (Qualifying Adjective).

例:—

This is a small book. (これは小さい本だ)

This book is small. (この本は小さい)

This is a gold watch. (これは金時計だ)

I read an interesting story. (私はおもしろい話を讀んだ)

【註】 現在は read, 過去及び過去分詞は read と發音する。

The hidden treasure. (隠れた寶)

【註】 かう云ふ the hidden treasure とか the wounded soldier (負傷兵) とか云ふ時の hidden や wounded は『隠したる』とか『負傷させた』とか譯すべからず。hidden や wounded は過去分詞 (Past Participle) で形容詞となつてゐるのである。その場合は『隠されたる (誰れかに)』或は『負傷させられたる (誰れかに或は何物にか)』の義を解すべし。然し日本語ではかう云ふ區別がはつきり立つてゐないから『隠れた寶』となり、『負傷した兵士』となるのである。

代名形容詞

(一)

此の本 (this book) の this は代名形容詞 (Pronominal Adjective) に屬する。また、(that book) の that, あんな本 (such a book) の such も同様である。『この本だ』か『あの本だ』か『あんな本だ』か分らないで、『この本』と云ふ。これも代名形容詞に屬する。

What book do you want? (何の本が欲しいか)
Which boy do you like? (どの少年をふまへは好きか)
Whose hat is this? (これは誰れの帽子か)

上の例の what book の what, which boy の which, whose hat の whose は代名形容詞である。然しながら

What do you want? (何をふまへは欲しいか)
Which do you like? (どれがふまへは好きか)
Whose is this? (これは誰れのだ)

に於ける what, which, whose は代名詞なのである。この代名詞が名詞と結びついて形容詞となつたのであるから代名形容詞 (Pronominal Adjective) と云はれるのである。

What book do you want? (何の本をふまへは欲しいか) は『何の本が欲しいか』とも日本語では云はれるけれども what book は『何の本を』と云ふ目的格であることを忘れてはならぬ。此の例の what 等は『何の』と云ふ疑問の what 等であるけれども、此の外關係を示してゐる what 等がある。之を關係形容詞 (Relative Adjective) と云ふ。

(二)

關係形容詞 (Relative Adjective) と云ふのは人稱形容詞 (Pronominal Adjective) に屬するもので、關係代名詞 (Relative Pronoun) の which, what が名詞を形容しながら clause (句) と clause (句) とをつなぎ合す場合、それはもう關係代名詞ではなくて關係形容詞となつたのである。

What do you want? (何が欲しいか)

に於ける what は代名詞である。本が欲しい、万年筆が欲しいと云ふ本や万年筆と云ふ名詞の代りをしてゐるからで、疑問代名詞 (Interrogative Pronoun) と云はれるのである。所がもし

I will give what money I have.

とあれば此の what は代名詞ではなくて關係形容詞 (Relative Adjective) なのである。此の場合の what は money (金錢) と云ふ名詞を形容して居り、同時に I will give と云ふ clause (句) と I have money と云ふ

clause (句) とを結び合せてゐるからである。此の文は I will give all the money I have の義で私は持つてゐる所の (=持つてゐるだけの) 金をやつて了はうと云ふことである。

I have sold what few books I had [=all the few books that I had]

(私は少しばかり持つてゐた本を盡く賣つて了つた)

I spoke in French, which language she could not understand.

(私はフランス語で話をした。彼女にはフランス語は分らなかつた)

【註】 かう云ふ which language は『その言語』と譯し、此處では『その言語を』と譯す。

I spoke in French, which language was Greek to her. (私はフランス語で話をした。彼女にはフランス語は陳腐漢腐であつた)

【註】 Greek to her とか Greek to me と云ふそんな言語は僕には希臘語のやうで分らないと云ふこと。又次のやうな文:

She bought an organ, which instrument (=and this instrument) added much to her home pleasure. (彼女はオルガンを買つた。それが大層家庭の樂みを増した) = [彼女は家庭の樂みを増した所のオルガンを買つた]

He has many children, for which reason he must work hard to support his family. (彼には多くの子供を持つてゐる。その理由で彼は家を支へて行く爲め大いに働かればならぬのだ)

等の which も instrument (樂器)、reason (理由) と云ふ名詞を形容して同時に前の clause (句) と後の clause (句) とをつなぎ合してゐるから關係形容詞である。若し此の言葉がなかつたら二つの clause は結びつけるものがなくなるから、そこで腰折れになつて何が何だか分らなくなる。關係形容詞には此の what と which の二種がある。

同じく關係形容詞に屬するものに "whatever" "whichever" と云ふ詞がある。

- (1) I was allowed to read whatever book I liked. (私の好きな本を何でも読むことを許された)
- (2) Take whichever course you prefer. (君の好きな道をごつちなりと取りたまへ)
- (3) Whatever book you may read, you will not improve in the least, so long as you remain careless. (どんな本を讀むとも、君が不注意で讀んでゐる間は上達はしない)
- (4) I will hold no objection to whichever course you may take. (私はどんな道を君が取るともそれに對して反對はしない)

數量形容詞

數量形容詞 (Quantitative Adjective) は數と量に分けることが出来る。數には many (多數の)、few (少數の) 等が屬し、量には much (多量の)、little (少い) 等が屬す。

There are many books. (其處に澤山の本がある)

There are few books. (其處に餘り本がない)

此の例の few は many に對し、not many の義である。『少しは』(only a few) の義の時には a few を用ゐる。a few は『少しもない』(none) に對するのである。

Are there any books? (其處に本があるか)

【註】 any books は一冊でも二冊でも本があるか云ふ意味である。斯くの如き問の時には any を用ゐるが通例である。四五冊でもあれば Yes, there are some books と云ふ。some は『若干數の』の義。

Yes, there are a few books. (はい、少しはあります)

【註】 これは No, these are none の反對である。

A few people know the truth. (この事を知つてゐるものはほんの僅かの人だけです)

Many と few との區別はそれで分つたつもりである。many や few は數の多少に關係するので呉れ呉れも

There are many waters. (其處に多數の水がある)

There is few water. (其處に澤山水がない。少數しきやない)

など云はないことだ。量を示す形容詞は much と little である。

He ate much bread. (彼は澤山パンを食べた)

【註】 ate は eat の過去の形。

Don't make much noise. (大き過ぎるな)

No, not much rain. (何の、大した降りではありません)

He ate it with much gusto. (ががつがそれを食べた)

【註】 gust は風、雨、火事、煙、音、欲望の急に類りにおることであるが、gusto は zest (一生懸命) のこと。

* There is much water in it. (その中に水が澤山ある)

Few は數に用ゐ、little は量に用ゐることだけのちがひで、little と a little との關係は few と a few との關係に於けると同じである。little は『少い』、『餘りない』、『殆んど無い』の意味である、a little は『少しはある』の意味である。

There is little water in it. (その中には水が餘りない)

There is a little water in it. (少しは水がある)

性質形容詞

(一)

固有名詞から出來た形容詞がある。まづ世界の國々の名の形容詞の形を擧げるに次の如くである。

French (France の)

Russian (Russia の)

German (Germany の)

British (Great Britain の)

Spanish (Spain の)

Italian (Italy の)

Austro-Hungarian (Austria-Hungary の)

Chinese (China の)

Indian (India の)

Japanese (Japan の)

此等の言葉は the French people (佛蘭西國民)とか the Frenchman とか the French woman とか the French nation (佛蘭西國民)とか the French Government (佛國政府)とか the French aeroplane (この佛國の飛行機)とか French literature (佛蘭西文學)などの如く用ゐるので、此等の French は皆な形容詞に關するのである。

(二)

初學の人々に分り難いのは Verbal Adjectives と云ふものである。働詞形容詞とでも譯すべきものである。これは現在分詞 (Present Participle) であるのと、過去分詞 (Past Participle) であるのと二つの場合がある。現在分詞のものは

The rising sun. (昇る所の太陽=朝日)

The setting sun. (沈む所の太陽=夕陽)

A puzzling question. (人を惑はす問題=難問題)

等である。これに就ては誤解をする學生も少いけれども、過去分詞の形容詞となつたものには大分困らせられる人も多いやうだ。例へば a burnt child とあると焼いた子供と譯したが、burnt は成程 burn (焼く)、burnt (焼いた) の焼いたと云ふ過去の形と同一であるが、實は過去分詞の burnt であつて『焼かれたる』の義である。二三の例を示せば

A fallen tree. (風か何かにて倒された木)

A broken watch. (地上に落されたかごうかして破壊された懐中時計)

(三)

二語以上結びついて一つの名詞を形容してゐるものがある。

Much longed-for peace. (大いに希望されし平和)

A kind hearted man. (一人の親切な人)

A grown-up child. (大きくなつた子供)

A left-handed man. (左利の人)

A hand-to-hand combat. (接戦)

A five-year old boy. (五歳の男兒)

【註】 He is five years old, he is in his fifth year, he is five years of age, he is five 等の言ひ方がある。a five-year old boy の如く形容詞になつてゐる時は five years とはしないのである。a two hundred yard race (二百ヤード競争) などは類例の一つである。

形容詞の比較

(一)

『己れは金持だ』は I am a rich man (己れは一人の富んだ男である) としても、I am rich (己れは富んでゐる) としてもよい。『己れは佐々木よりも富んでゐる』は I am richer than Sasaki とする。『己れは皆んなの中で一番富んでゐる』と云ふのは I am the richest of us all とする。此の rich, が richer となり、richest となるのを形容詞の比較 (Comparison) と稱する。

(二)

The eagle is a large and graceful bird.

It is the strongest and fiercest of all the birds of prey.

(鷲は大きな立派な鳥だ。猛禽類の中で一番強く一番勇猛な鳥だ)

の the strongest や the fiercest は形容詞の最上級 (Superlative Degree) と云ふのである。日本人は兎角最大級の好きな國民である。たかだか一里か二里飛ぶと大飛行と來る。少し大きな停車場でも出来る世界最大の停車場成ると吹き立てる。運動會の記事にはいつでも世界のレコード (record) だからほんとはレコードと云ふべきである) を破つたとある。これほど自惚れの強い國民はないであらう。今に世界最大の共

同便所が兩國に立つたなど、吹き立てることであらう。世界最大の停車場もよく聞いて見ると朝鮮や支那の停車場より larger であること云ふので、米國の停車場など、比べては馬鹿に smaller である場合が少くない。この larger や smaller は比較級 (Comparative Degree) を云つて一層大きいとか一層小さいとか云ふのである。そのもこの large (大きい) や small (小さい) は原級 (Positive Degree) を稱する。

〔原級〕	〔比較級〕	〔最上級〕
large (大きい)	larger	largest
gray (灰色の)	grayer	grayest
small (小さい)	smaller	smallest
rich (富める)	richer	richest
high (高い)	higher	highest

以上は一綴 (one syllable) の語であるが、若干の二綴 (two syllables) の語も語尾に er を附して比較級を作り、est を附して最上級を作る。その例:—

〔原級〕	〔比較級〕	〔最上級〕
narrow (狭い)	narrower	narrowest
easy (平易な)	easier	easiest

又多数の二綴語及び三綴以上の語は more, most を前へ附けて比較級と最上級を作る。

〔原級〕	〔比較級〕	〔最上級〕
famous (有名な)	more famous	most famous
beautiful (美しい)	more beautiful	most beautiful
dangerous (危険なる)	more dangerous	most dangerous

以上は規則的の變化であるが、此の外に不規則な比較がある。

〔原級〕	〔比較級〕	〔最上級〕
good (善き)	better	best
little (小さい)	less	least
bad (悪い)	worse	worst

此處で注意しておきたいのは superior (勝れたる) や inferior (劣りたる) など云ふ字である。この字は Latin 語から來たものでかゝ云ふ字は than がつかないで to が來るのである。

This is superior to (=better than) that. (これはあれより優れてゐる)

This is inferior to (=worse than) that. (これはあれより劣つてゐる)

(三)

Absolute Superlative を云ふことも知つて居て貰ひたい。元來文法など云ふものは文章を正しく書く爲めに、文章を正當に解釋する爲めに學ぶものであるから、その事實さへ覚えて了つたらばもうそれでよいのである。だからこんな文法上の術語などは或は忘れて了つてもかまはないのである。

He is the bravest soldier in the battalion (彼れは此の大隊の中で一番勇敢な軍人である) に於ける bravest は普通の Superlative (最大級或は最上級とも) であるが、He is a most brave を云へば別に他のものと比較したのではなく、相對的でなく、絶對的に (absolutely) 云ふたので、彼れは大いに勇敢である (He is exceedingly brave) を云ふ事である。This is the most remarkable love story that I have ever heard (これは私が今まで聞いた中で一番すぐれた戀物語である) を云へば the most remarkable は普通の最大級 (Ordinary Superlative) であるが This is a most remarkable love story を云へば何と云ふのでなく『これは最もすぐれた戀物語である』を云ふので、この most remarkable は Absolute Superlative である。Absolute Superlative は絶對最大級を譯すべし。絶對は相對的でないこの義である。

形容詞の置き所

適才を適所に置く (The right man in the right place) を云ふが、形容詞も適所に置かれねばならぬ。形容詞は名詞に直かに附くのをさうでないのさある。

I see a *pretty* bird in the cage. (私は鳥籠の中に一羽のきれいな鳥を見る)

A *black* hen will lay a *white* egg. (黒い牝鶏が白い卵を生むことあり) (鷹が鷹を生む)

This is a *large* garden. (これは大きな庭である)

此等の *pretty* や *large* は皆名詞に直接に附いてゐるもので、多く名詞の前に来る。併し *things Japanese* (日本の事物) などのやうに形容詞が名詞の次に来ることも稀れにはある。

もう一つは自動詞 (Intransitive Verb) の補足語 (Complement) として主語を説明してゐるもの、例へば

This bird is *pretty*. (此の鳥はきれいだ)

This garden is *large*. (此の庭は大きい)

That man is *handsome*. (あの男はきれいだ)

【註】 男などのきれいなのは *handsome* である。女の美しさは *pretty* であり、*fair* である。非常に美しければ *beautiful* である。愛くるしきは *charming* である。

No one is *wise* in his own affairs. (誰れでも自分の事では賢くはない) (岡目八目だ)

及び他動詞 (Transitive Verb) の補足語として目的を説明するもの。

I believe him *honest*. (私は彼れを正直だと信じてゐる)

I take it *true*. (私はそれを真だと考へる)

【註】 *take = think*. 若し他動詞が受身 (Passive) ならば補足語は主語を説明する。

He is believed *honest*.

It is taken *true*.

若し数個の形容詞が相伴うて一個の名詞を形容する場合には

(1) Pronominal Adjective. (代名形容詞)

(2) Quantitative Adjective. (数量形容詞)

(3) Qualifying Adjective. (性質形容詞)

の順序に従ふ。

Those three *old* gentlemen are my only relatives. (あの三人の老紳士は私の親類でさあ)

I don't like these two *lazy* hogs. (私は此の二人の何にもしないでゐる物臭な奴を好まない)

【註】 *hog* は牧場な奴。

若し同じ種類の形容詞が二個以上連る時は何れを先きにすべかに感ふものであるが、それは併れを先にしてもよい。併し短いものを先きにして長きものを後にするが一般の慣例である。

I want an *easy* and *interesting* novel. (私は平易な面白い小説が欲しい)

I have a *big*, *heavy*, and *difficult* English book. (私は大きな、重い、難しい英語の本を持つてゐる)

さきに数個の形容詞相伴うて一個の名詞を形容する時は (1) Pronominal Adjective (2) Quantitative Adjective (3) Qualifying Adjective の順序に従ふやうに云つたが、之にも例外があるのである。

1. All *and both* は Pronominal Adjective (代名形容詞) の先きに置く。

All those houses were destroyed by fire. (あの家は盡く火事で焼けた)

He gave her *all* his books. (彼れは彼女に凡ての彼れの本を與へた)

Both his parents are dead. (両親はゐない)

【註】 兩軍と云ふのは *both armies* と云ふ。これを *the both armies* と書くのは誤りである。きまつた兩軍だから成程 *the* をつけたいのであらうが、かう云ふ時には潔く遠慮するがよい。

2. Something, anything, nothing, everything, things 等に附く形容詞は常に其の後に置かれねばならぬ。

I want something warm. (暖いものが欲しい)

Give us anything cheap. (何でも安いものを呉れたまへ)

There is nothing nice here. (ここにはきれいなものさ云つては何一つない)

【註】 初めの there は文章を引出す爲めの there 眞に場所を指示するは here.

Things past may be repented. (過ぎた事を悔ゆることあるべし)

Have you ever read Chamberlain's "Things Japanese"? (君はチエインバレンの日本事物を云ふ本を讀んだことがあるか)

3. present が『其處に居合した』さか『出てゐる』さ云ふ意味に用ゐられたる時には名前の後に置く。

The ladies present were surprised at the sight. (其處にゐた婦人はそれを見てびっくりした)

All the gentlemen present listened to his speech. (其處に出席してゐた紳士は皆な彼れの演説に耳を傾けた)

4. last や next を時に用ゆる時名詞の後に置くことがある。

I went there on Sunday last. (私はこの前の日曜に其處へ行った)

【註】 on last Sunday さ云ふに同じ。

I will go to Kyoto in March next. (來月三日に私は京都に行かうと思ふ)

5. 固有名詞に關する特殊の形容詞は名詞の後に置く。

Peter the great. (ピーター大帝)

Kaiser II. (the second さ讀む)

Richard the Lion-hearted. (獅子心のリチャード)

6. phrase (句) から出来る形容詞は名詞の後に置く。phrase から成る形容詞とは He is a man worthy of confidence さあれば worthy of

confidence がそれである。worthy は形容詞、of は前置詞、confidence は名詞である。これだけよつて『信用に値する』さ云ふ義を成し、その形容するものは a man である。すなはち worthy of confidence は a man を形容してゐる句である。かう云ふ句は名詞の次に置く。

He is a man worthy of praise. (彼れは賞めるに値する人也)

She married a man worthy of her. (彼女は身に相應する驥を持つた)

I have a dog three years old. (私は三つになる犬を持つてゐる)

The Japanese won a victory so complete and decisive. (日本軍はそれほど完全に、それほどに天下分目の勝利を博したり)

形容詞の用例

1. A is larger than B, but C is the largest of the three.

(A は B より大なり。然れども C は此の三つの中最も大なり)

2. I am taller than he.

(私は彼れより丈が高い)

此の文の he は him さすべからず。代名詞の場合は同格にて比較をするこゝになつてゐる。I が主格であるから he も主格でなければならぬ。之に似た文にて I love him more than her (私は彼女を愛するより以上に彼を愛する)の如き場合には than her であつて than she ではない。him さ her さを比較したのである。I love him more than she さすれば than she loves him の略で『私は彼女が彼れを愛するより以上に彼を愛する』さ云ふこゝになる。これは I さ she さを比較したのである。尤も此等の例は副詞の場合に説明すべきであるが、性來の老練親切から書き添へたのである。

3. The price is high.

『値段が高い』さ云ふのを the price is dear さ云ひ、『値段が安い』のを the price is cheap さ云つては間違である。dear さ云ふ字が『値段が高い』さ云ふ字であるから the price is dear さ云つては『値段が値段

高い』となつて變になる。dear を云ふのを *use* たらば the article (此の品物) を云ふ字を共に用ゐるのである。the price is high or low とし、the article is dear or cheap とするのである。

4. He is better.

『お父さんの御病氣は今日はどうですか』 How is your father to-day? 『よい方です』 (He is better) と云つて、He is well とは云はないのである。『今日は悪い』と云ふのは He is worse を用ゐて、He is unwell とは云はない。How is he? (あの方は如何ですか) の問いに對しては He is well (達者です)、He is unwell (加減が悪うございます) の如く云ふ。

5. Better と best.

This is better than that. (これはあれよりよい)

Of the two, this is the better. (この二つの中ではこの方がよい)

この the better は the better one の意味ですなほは名詞であるから the が入用なのである。

Of the three this is the best. (この三つの中でこれが一番よい)

この the best も the best one の略である。

6. Other.

I have other flower-vases. (別の花瓶もある)

Among other things he imports tooth-brushes from Japan. (あの人日本からいろいろ輸入してゐるが、齒磨の揚子も輸入してゐる)

【註】 その他のものも輸入してゐる中でもこれに重きを置いて云ふ場合。

Among other things he said that Japan wanted much more translators. (いろいろの事を云つた中に日本はもつと澤山の翻譯家が入用であると言つた)

【註】 英語では時を合せると云ふことがある。それで said が過去なので wants とせず wanted としたのである。……he said, "Japan wants……" と意味は同じである。

Every other line. (一行置き)

【註】 この every other は every second の義である。every other day (一日おき)、every other week (一週間おき)などは其の例である。

The other side of the street. (道路の向ふ側)

The other bank of the river. (川の向ふ岸)

【註】 かゝる場合の other は opposite の義である。

以上の例に見えたる other は形容詞であるが、下の如き場合は代名詞である。

Some were right, others were wrong. (或るものは正しかつた。

或るものは正しくなかつた)

Others may think differently, but I think this is wrong. (他人は

さう思はぬかも知れないが僕はこれは悪いと思ふ)

Some are white, others are black. (或は白いもあり黒いもある)

7. Another.

Another は代名詞又は代名形容詞 (Pronominal Adjective) として用ゐられ、an other の意義である。

I shall stay another week. (私はもう一週間滞在する)

They fear another explosion of Mt. Asama. (人々淺間山の再び破裂せぬかと思ふ)

Another fine day. (今日も晴れ)

A. A baby was born in my house this morning. (赤坊が今朝僕の家で生れた)

B. What! Another? (何に! またか)

8. I am hungry.

私は空腹であると言ふのを I hungry と云ひ、私は病氣であると言ふのを I sick と云ふやうな誤りは學生の間に屢々繰返される。これは hungry とか sick とか云ふ形容詞を動詞だと考へ違ひするから起る誤謬である。I go (私は行く) と云ふやうなのは趣きがちがふのである。hungry や sick は動詞ではなく形容詞であるから I am hungry とか I am sick の如く『ある』と云ふ動詞を入れねばならぬのである。hungry や sick は I の形容である。

9. Some.

Some の用法には代名詞の時と形容詞の時がある。

Some are good. (あるものは善い)

この時の some は代名詞である。

形容詞としての some は

a. 二三の義 (a, an の複数)。

I have a knife. (一本のナイフ)

I have some knives. (数箇のナイフ)

【註】 knife の複数は knives である。恰も wife の複数 wives なるが如し。

b. 物質名詞又は抽象名詞の前に置く時は a, an の代りとなる。物質名詞や抽象名詞の前には a や an は用ゐられないからである。

I have some (not a) bread. (私はパンを持つてゐる)

I have some (not an) ink. (私はインクを持つて居る)

Some way or other. (何等かの方法)

打消の文では some の代りに any を用ゐる。

I have not any bread (or I have no bread). (私はパンがない)

10. Some と any.

Have you any bread? (君はパンがあるか)

此の時の any はパンでありさへすればよい、兎に角パンがあるかと問ふのである。この答は

Yes, I have.

Yes, I have some.

No, I haven't.

No, I haven't any.

である。Have you some bread? と云へば君は少しでもパンを持つてゐるかとの事。此の答は Yes, I have a little 又は No, I have nothing である。

日本の學生の中には all の意味の時 any を用ゐるものがあるが誤りである。

All are diligent in their studies. (たれも皆な研究に熱心だ)

all を any としてはいけない。

11. Something, nothing.

Give me something sweet. (僕に何か甘いものを下さい)

He has done nothing culpable. (彼れは何にも悪い事をしたのではない)

【註】 culpable は faulty の義、

I know something about it. (僕はあの事を少し知つてゐる)

I know nothing about it [=I don't know anything] (僕はそれについては何にも知らない)

Something is the matter with him. (彼はどうかした)

Is anything the matter with you? (君はどうかしましたか)

Nothing is the matter with me. (どうもしません)

【註】 what is the matter with you? (どうかしたの) などは顔色が悪いとか何さか多く悪い方に用ゐる。

He is something of a scholar. (彼れはいくらか學者である)

Something is wrong. (何か悪いのだ)

Something has happened. (何か悪い事が出来たのだ)

Something like that. (まあそのやうなものです)

Somebody must have told you so. (誰か君にさう話したのちがひない)

12. any と every.

Any は one at a time (どれでも) の義で多くのものの中からどれ一つを取り出してもさ云ふ義である。every は all at a time (皆な悉く) で多くのもの凡てを指すのである。多く誰れも引く例であるが

I can live in any house, but I can not live in every house. (私はどの家へでも住み得るけれども悉くの家には住むことは出来ない)

13. None the less.

None the less は『だけれども』『それにも拘らず』の義である。

All men were against him, but he persevered none the less. (彼
れが反對したに拘らず辛抱した)

He is a clever man, none the less he often makes mistakes. (彼
れは利巧なんだが矢張り折々は間違へる)

He is none the happier for all his wealth. (金のあるに幸福で
ない)

He is none the wiser for all his experience. (経験のあるのに利
巧でない)

This is a very difficult book, he none the less reads it. (これは
非常に難しい本だがそれでも彼れは読む)

14. **Less** と **least**.

He is less talkative than his brothers. (彼れは彼の兄弟よりも
おしゃべりでない)

He is the least talkative of all his brothers. (彼れは兄弟の中で
一番おしゃべりでない)

This is the least enviable position. (あんまり芳ばしい地位では
ない)

I am not satisfied in the least. (私は少しも満足してゐない)

【註】 in the least は『少しも』の義。

It costs five yen at least. (少くとも五圓かゝる)

【註】 at least は『少くとも』の義。

He seems not to have the least knowledge of the matter. (彼れ
は此の事については何にも知つてゐさうではない)

【註】 最大級の語を用ゆる時その前に even が略されてゐるこ
ろがある。一番少き知識をさへも云ふことで、一番少き知識
は持たれど大きな知識(つまり澤山知つてゐる)は持つてゐるこ
ふのではない。他の例で the most learned man may not know this
を最も學問ある人はこれを知らないだらうと譯しては學問なき人は
知つてゐるやうにも取れる故誤譯の中に入れてよし。最も學問ある

人でもさ譯さゝる可らず。すなはち even the most learned man と
even を入れて解すべし。learned の發音學問あると云ふ形容詞の時
は learned である。

15. **First** を含める句。

In the first place, I must say this. (まづ第一に私はこれを云は
ねばならぬ)

At first, he was obedient. (初めのうちは彼はおとなしかつ
た)

I went there for the first time. (初めて私は其處へ行つた)

The first important point is this. (一番大切な點はこれだ)

How are you?—First rate! (御機嫌はどうです—大いにいゝ
です)

The first two years. (最初の二年)

From first to last. (第一から最後まで)

【註】 from A to Z (A から Z まで)。

Who came the first this morning? (誰れが今朝一番に來た)

First of all it should be done. (まづ第一にそれをしなければ
ならぬ)

They were not great friends from the first. (最初から彼等は親
友ではなかつた)

First came A, next B, then C, and last of all D. (第一に A が
來た、第二に B, 第三に C, 最初に D が來た)

Our college is divided into four departments: first (or firstly), the
department of English law; secondly, that of French law;
thirdly, that of German law; and lastly that of politics and
economy. (我が大學は四部に分たる。一、英法; 二、佛法;
三、獨法; 四、政治經濟)

Life first. (命が第一だ)

Safety first. (安全が第一)

【註】 これは目下米國で流行の言葉で鐵道電車の注意に SAFETY

FIRST されたのから廣告にも盛んに應用され、"Come in and rest. SAFE TEA FIRST" の如きものさへ生れて來た。

His plan was to first remove the wire-entanglements and then rush upon the fort. (彼れの計畫はまづ最初に鐵條網を除き而して後砲壘に突撃するにありき)

16. double.

In doing so, he had the double end of fame and profit. (さうしたのに彼れは名譽と二重の目的を有してゐた)

I paid double the usual price. (私はいつもの値の二倍を拂つた)

【註】 double には『二重の』と云ふ義と、『二倍の』と云ふ義あり。『二重の』と云ふ時は the double end の如く名詞に續くこと多く end は單數にて ends とはせず。『二倍の』と云ふ時は of を略し、double of the usual price の如く云はざることも恰も half the price (その値の半分)に於ける half の如し。

17. No more than.

此の idiom は入學試験問題を出す先生方が大好物なものである。先生方は何度でも此の種の問題を提出遊ばすやうに disposed されてゐられる。先生もう一つ如何です? No more, thank you などとされて出られないのである。此に於て我等も no more than に於て丁寧な説明なかるべからずである。

A is no more B than C is D と云ふ公式を土臺にして話をすると、C が D であるより以上に A は B でない。然るに C は D でない。故に A は B でない。と云ふ公式である。

There is no more dependence to be placed on his word than there is on the wind.

44. 長崎高商

(彼れの言葉のあてにならないのは、風の當てにならないのと同所だ)

【註】 風の上におくべき dependence があるより以上には彼れの

言葉におく dependence はない。風はたよりにならぬ。故に彼れの言葉はたよりにならぬ。

It is no more right to steal apples or water melons from another's garden or orchard than it is to steal money from his desk.

41. 専門

(他人の果園又は果樹園から林檎又は水瓜を盗む權利なきは恰も他人の机より金錢を盗む權利なきに似たり)

Some people are no more moved by human sufferings than animals are. (人による他人の苦むのを見て感じないこと丁度動物の如きものがある)

又此の外 no more than に次の如き用法がある。

1. No more than = not any more than = only. (唯幾ら幾らに過ぎず) [定量]
 2. Not more than = only about. (唯幾ら幾ら位のもの) [不定量]
- すなはち no more than = 少しも多からず。not more than = より少くも多からず。

例:-

- (1) He has not more than 100 yen. 彼れの持つてゐるのは百圓位ぬのものだ(百圓より少なくも多くはない)
- (2) He has no more than 100 yen. 彼れは百圓より以上は持たぬ(丁度百圓持つてゐる)
- (3) There is not less than a three thousand students. (三千人位の生徒がある(三千人より多くも少くはない))
- (4) He has no less than five brothers. 彼れは兄弟が五人ある(丁度五人ある)

練習問題

(a) 下の文に就き形容詞を指し其の級を云ふべし。

1. The dog is a faithful animal. (犬は忠實なる動物である)

2. The fox is a very cunning animal. (狐は甚だ狡猾な動物である)
3. Saburo is the biggest boy in our class. (三郎は僕等の級で一番大きい少年だ)
4. He is taller than I. (彼は私より丈が高い)
5. He is a most noble gentleman. (彼は非常に高尚な紳士である)
6. The rose is less beautiful than the peony. (薔薇は牡丹ほど美しくない)

7. This tower is high. (此の塔は高い)
8. These crabs are small. (此の蟹は小さい)

(b) 下の形容詞の比較級と最大級を示せ。

hot (暑き)	sad (悲しき)	glad (喜ばしき)
wet (濡りたる)	thin (薄き)	fat (肥満の)
big (大きな)	dim (朦朧たる)	pretty (美しき)
hard (つらき)	powerful (力ある)	much (多き)
few (僅かなる)	carefully (注意深く)	bad (悪き)
good (善き)	fine (立派な)	far (遙かなる)
busy (忙しき)	natural (自然なる)	sorrowful (悲しげな)

(c) 次の文を英訳せよ。

1. 彼れは多くの金を有す。
 多くの = much. *He has much money.*
 金 = money.
 有す = has.

2. 私は多少の友達がある。
 多少の = some. *I have some friends.*
 友達 = friends.
 がある = have.

3. 私は多少の勇氣がある。
 多少の = some. *I have some courage.*
 勇氣 = courage.

4. 私はあんまり金を有つていません。

〔答〕 I have little money を譯す。元來 a little は『少しはある』と云ふ方に重きをおき little は『あまりない』とない方に重きをおいて云ふのである。併し共にその人の心持に従ふことで、十圓も持つてゐながら I have little money (あまり持つてゐない) と云ふかも知れないし、又一圓持つてゐる人が I have a little money (少しはある) と云ふかも知れないのである。

5. 正直な人は少しはある。

〔答〕 There are a few honest people.

6. 正直な人は少ない。

〔答〕 There are few honest people. 此の people は 複数の意味である。かゝる場合 people は しないのである。

數 詞

數詞 (Numerals) は一切の數を含み之は形容詞に屬するものである。一、二、三、と云ふ方が Cardinal Numerals で、第一、第二と云ふ方が Ordinal Numerals と云ふのである。Cardinal Numerals を譯すれば普通數詞とでも云ふべく、Ordinal Numerals は順序數詞とでも云ふべし。one, two, three, first, second, third 等の如く一定の正確に數を表はすものと、some (幾つかの)、any (幾つかの)、many (澤山の)、few (僅かの)、all (凡ての)、no (一つもなき) 等の如く正確な數を示さないものとある。今は正確な數を示す方のみを此處で講述することとする。

Ordinal Numerals の場合に注意すべきことは一つだに one dog にては、二つ以上になるに two dogs, twenty dogs のごとく名詞を複數の形にすることである。然し Cardinal Numerals の方は第十と云へば、十個の義ではなく第十に當るものを意味するもの故、一つの時は複數の形にする世話なく、the first boy, the second boy の如く云ふ。たゞ第一の三人の少年と云ふやうな時は the first の次に普通の數を置きて the first three boys の如く云ふのである。

一 (one) から二十 (twenty) までは一語であるけれども徴兵検査の二

十一 (twenty-one) から九十九 (ninety-nine) までは二語から成るを以て、此の二語を結ぶに必ずハイフエン (hyphen) を用ゐなくてはならない。例へば twenty-one (廿一)、twenty-five (廿五)、ninety-nine (九十九) の如くである。又百 (hundred) 以上の数には hundred の次に and を置くことを忘れてはいけない。例へば one hundred and three (一百三)、three hundred and twenty-five (三百廿五) の如くである。今 Cardinal Numerals と Ordinal Numerals とを對照して掲げんに、

Cardinal Numerals	Ordinal Numerals
1 one	the 1st, the first
2 two	the 2nd, the second
3 three	the 3rd, the third
4 four	the 4th, the fourth
5 five	the 5th, the fifth
6 six	the 6th, the sixth
7 seven	the 7th, the seventh
8 eight	the 8th, the eighth (eightth に非ず)
9 nine	the 9th, the ninth (ninth に非ず)
10 ten	the 10th, the tenth
11 eleven (elēv'n)	the 11th, the eleventh
12 twelve	the 12th, the twelfth (twelveth に非ず)
13 thirteen	the 13th, the thirteenth
14 fourteen	the 14th, the fourteenth
15 fifteen	the 15th, the fifteenth
16 sixteen	the 16th, the sixteenth
17 seventeen	the 17th, the seventeenth
18 eighteen	the 18th, the eighteenth
19 nineteen	the 19th, the nineteenth
20 twenty	the 20th, the twentieth (twentyth に非ず)
21 twenty-one	the 21st, the twenty-first
30 thirty	the 30th, the thirtieth

Cardinal Numerals	Ordinal Numerals
40 forty (fourty に非ず)	the 40th, the fortieth
50 fifty	the 50th, the fiftieth
60 sixty	the 60th, the sixtieth
70 seventy	the 70th, the seventieth
80 eighty	the 80th, the eightieth
90 ninety	the 90th, the ninetieth
100 a (one) hundred	the 100th, the one hundredth
101 a (one) hundred and one	the 101st, the one hundred and first
200 two hundred	the 200th, the two hundredth
1,000 a (one) thousand	the 1,000th, the one thousandth
10,000 ten thousand	the 10,000th, the ten thousandth
100,000 a (one) hundred thousand	the 100,000th, the hundred thousandth
1,000,000 a (one) million	the 1,000,000th, the one millionth

【注意 1】 二十一から四十九までは twenty-one, forty-nine の代りに one-and-twenty とし、nine-and-forty とすることが出来る。

【注意 2】 年號は hundred で數へるが多い。1916 は nineteen hundred and sixteen か、更に普通に nineteen sixteen と云ふ。年號の時は 1,916 と comma を入れない。the war of 1904-5 とあれば the war of nineteen four to five と讀み、日露戦争 (the Russo-Japanese War) のことを云ふ。

【注意 3】 紐育あたりの番地の書き方は No. 103, East 15th Street; 144, West 26th Street; 134, West 33rd Street; 177, East 48th Street; 154, West 22nd Street; 400 Fifth Avenue の如く書く。

【注意 4】 Numerals は次のやうに省略した構文に於て用ゐられる。ten thousand (pounds) a year, one and six (one shilling and six pence), the fourth of July (米國獨立紀念日)、a man of fifty (years), a carriage and three (三頭立の馬車、three [i three horses の略])。

【注意 5】 Cardinals の代りに Ordinals が用ゐられることがある。Chapter 7 は chapter seven 或は May the sixteenth 或は the seventh chapter と讀んでいゝ。May 16, 1916 は May sixteen 或は the sixteenth of May nineteen sixteen と讀んでいゝ。

【注意 6】 some thousands of soldiers は數千人の兵士、some thousand soldiers は凡そ千人の兵士。

【注意 7】 數詞は屢々 some thousands of soldiers の如く名詞に轉用することが出来る。Tens of thousands of men perished there (何萬と何ふ人が其處で死んだ)などはその例である。in one's twentieth と云ふ熟語がある。『廿代』と云ふことである。These horses were yet in their twentieth (この馬は皆なまだ廿代だ)の如し。又 in one's teens と云ふ熟語がある。She is in her teens はその例である。これは thirteen から nineteen までと云ふことで、彼女はまた十代だと云ふことである。teens と s のあることを忘れないでゐて貰ひたい。

分數の讀み方:—

$\frac{1}{2}$ one half, or a half.

$\frac{1}{3}$ one (or a) third.

$\frac{3}{4}$ three fourths.

$\frac{1}{3}$, $\frac{1}{4}$ は皆な one third, one fourth (or a quarter) の如くなれど、 $\frac{2}{3}$, $\frac{3}{4}$ の如く上が 2 以上であるときは two thirds, three fourths の如く次の數に s を附ける。

$\frac{7}{10}$ seven tenths.

$\frac{99}{100}$ ninety-nine hundredths.

$1\frac{1}{2}$ one and a half.

$346\frac{3}{7}$ yen. Three hundred and forty-six and three seventh yen.

第五編 代名詞

代名詞とは如何なるものぞ

代名詞と云ふのは具さには代名詞とあるべきである。すなはち名詞に代つた詞だからである。英語では之を Pronoun と云ふ。A word used instead of a noun (名詞の代りに用ゐらるゝ語)と云ふ字である。名詞に代ると云へば八公のことを手前と云ふなどはそれである。八公が名前で名詞である。手前は其の代りをしてゐるので代名詞である。私が私と云へば花園兼定の代りに云ふのであるから代名詞である。『彼女の目は星のやうだ。彼女の唇は珊瑚のやうだ』など云ふ彼女は何れはれ子嬪とか何とか云ふなつかしい名の代りに用ゐられたのであるから代名詞である。斯くの如く人に關する代名詞を人稱代名詞 (Personal Pronoun) と云ふのである。所が私が買つた所の家とか君が云ふ所の政策とか云ふ『所の』や、何がさうだとかそれが君のかなどの『何が』や『それが』など、又それはきれいだそれを貰はうなどの『それは』や『それを』なども代名詞と稱するのである。

代名詞を分つと左の四種となる。

- (1) 人稱代名詞 (Personal Pronoun).
- (2) 關係代名詞 (Relative Pronoun).
- (3) 疑問代名詞 (Interrogative Pronoun).
- (4) 指示代名詞 (Demonstrative Pronoun).

I my me
you your you
he his him
she her her

we ours us
you yours you
they theirs them

人稱代名詞

(一)

まづ最初に人稱代名詞のこゝを云ふこゝにする。人稱と云ふのはさう云ふこゝか云ふに、その代名詞(或は名詞)が自分を指すか、話してゐる對手を指すか、話に出て来る人或は物を指すかの區別である。

I (私は、私が)、my (私の)、me (私に、私を)を第一人稱とし、you (お前は、お前が)、your (お前の)、you (お前に、お前を)を第二人稱とし、he (彼は、彼が)、his (彼の)、him (彼に、彼を)を第三人稱とする。すなはち自分を第一人稱と定める。佛蘭西の有名な近世の哲學者デカルト (Rene Descartes) は我れ思ふ故に我れ在り云ふこゝに於て彼れは確實なる知識の第一歩を得た。我れが本だ。此に於て文法家が我れ(I)と我等 (we) とかを第一人稱としたに異論はない。我に次いで實在の觀念の強いものは面と向ひ合つてゐる君 (you) や君等 (you) だ。此に於て文法家が you を第二人稱としたのにも不道理はない。それから話に出て来る噂の主な皆な第三人稱である。

第一人稱 (The First Person) の變化。

	【單數】	【複數】
主格	I	we
所有格	my	our
目的格	me	us

第二人稱 (The Second Person) の變化。

	【單數】	【複數】
主格	you	you
所有格	your	your
目的格	you	you

【註】 you は單數複數とも同じ形である。

第三人稱 (The Third Person) の變化。

	【單數】	【複數】
主格	he, she, it	they

【單數】 【複數】

所有格	his, her, its	their
目的格	him, her, it	them

日本語では自分のこゝをわたくし、わたし、あたし、あたひ、おのれ、おれ、わし、自分、身共、拙者、我輩、予、予輩、それがし、此の身、妾等種々雑多の言ひ方があるけれども英語では何も彼も皆な I です。尊貴の人に對しても、卑俗の人に對しても、皆な I である。I だけは常に何處にありても大文字 (Capital letter) で書くこゝになつてゐる。又 I のみならば you にしても日本語にてもおまへ、おめへ、汝、貴様、そこもさ、あなた等色々あるであらうが英語では皆な you です。he にしても、she にしても同じことである。they は彼等と云ふことである。日本語で彼等と云ふ人の場合のみ指すけれども they は物の時にも動物の時にも用ゐられるのである。又物と動物と一所に合せた時にも用ゐられる。だから they の内容を想像して見るさ

- he x x = they
- she x x = they
- it x x = they
- he x x + she x x = they
- he x x + she x x + it x x = they
- he x x + it x x = they
- she x x + it x x = they

they
their
them

等の場合がある。he の x 倍も they であるし、she の x 倍も、it の x 倍も they である。さうかと思ふと彼の女と彼の男を寄せて they ともする。さう云ふ風で they は日本語で云ふ『彼等』とは趣きを異にするのである。

(二)

“We” は第一人稱の複數であるが I の代りに用ゐられる事がある。それは主權者の勅語に於て、又新聞の社説に於て用ゐられるのである。

談と云ふ時 “we” が用ゐられる。吾人とか吾等と云ふ時 “we” が用ゐられる。

日本の昔風の手紙には降つて私義と書くが英語でも君と僕と云ふやうに云つて先方に敬意を表するのである。『君と僕は同じ位年の年だ』と云ふのを You and I are about the same age と云つて、I and you are about the same age とは云はない。

You, he, and I
You and I
He and I } are about the same age.

Either or と云ふ言葉がある。これは『.....か.....か』と云ふので、『君か彼の人か』(either you or he) など云ふ時用ゐるのである。この時は Ei her you or he are としないで、Either you or he is とするのである。『君か彼の人かどつちが悪いのだ』は Either you or he is wrong と云ふのである。

Either you or he is
Either you or I am } wrong.
You, he, or I am

You and I でも He and I でも凡て are であつたが、either.....or とする、or の次のものゝ人稱に應じて動詞をきめるのである。終りが he ならば is となり、I ならば am となるのである。

所が之に反對なのはas well as..... である。例へば

You as well as I are naughty. (私と同じく君はいたづらだ)

He as well as I is naughty.

さなる、as well as の前のものゝ人稱に應じて動詞をきめるのである。尤も as well as は『と同じく』『と同じやうに』と云ふので as well as に I が來ても he が來てもそれはほんの例に引き出して來たので、主として述べる所のものは as well as の前のものであるから、動詞がそれに應ずるのに不思議はないこと考へる。

また次のやうな構造では動詞は先きの代名詞の人稱に應ずるのである。

He, and not I, is to blame. (彼れが悪いので私が悪いのではない)

I, not they, was very busy. (彼の人にはさうでなかつたが僕は非常に忙しかつた)

(三)

代名詞で you と云ふ『お前』と云ふ時と、『お前達』と云ふ時と二つの意義がある。元來の意義は之に過ぎないが、その用法に聊か日本の學生には會得し兼ねる所があると思つて、二三心付いた事を書くこととする。

Go to the chemist and buy your stamps.

と云ふ文があれば藥屋に行つて君の求めてゐる印紙を買ひたまへと云ふので君の持つてゐるを云ふ意味ではない。

例へば佛蘭西人が米國に渡つて米國人と話しながら、或る有名な演説家のことに及んで、

“He is your greatest orator, I am told.”

と云つた時に、your は何う云ふ意味かと云ふに『貴國の』と云ふことである。『あの人は貴國の一番の演説家ださうですれ』と云ふ事である。

又『諸君』と云つて讀者を指す時がある。Max O'Rell が米國の市區のことを述べて、

You can readily imagine the perplexity of the unfortunate foreigner who finds himself, at the end of a few days, confronted with this difficulty (=the difficulty of remembering the addresses of one's acquaintances) and with a score of calls to pay. (數日の末に此の長い番地を覚える困難と澤山の家を訪問しなければならぬ羽目とに出會つた外國人の當惑は諸君が容易に想像し得ることと思ふ)

の文に於ける you の如きはその一例である。

又數年前 The Herald of Asia 主幹頭本元貞氏が米國に滞在中『日本人無線電信の利用を解せず』と云ふ見出しが或る無線電信に関する雜

誌に出てゐたので、何が書いてあるのかを讀んで見るさ、或る米國船が太平洋を航行してゐる日本船に向つて

Where are you now?

と云ふ無線電信を送つた。此の場合 you はその船を指したものであるのに、日本船の電信技手は英語の修業が足りなかつたと見えて

I am in my room. (私は私の室にゐる)

と云ふ返電をしたさうである。これは一概に笑つて了ふべき話柄ではなくて、代名詞の如きものでも其の意義の取り様の難しいことを示すものである。

Tagore の死を歌うた詩に My death! と呼びかけてゐる。これは自分の出會ふ死と云ふのではなく親しみを示す爲に my と云つたのだ。

Zeppelin の襲來 (raids) のことを書いた手紙に、自分が戸惑してゐるさ Some one rushed in and turned on my light (誰れか入つて来て私の室の電氣をひねつた) と云つてゐる。my は私の室にあるのを云つた。

『貴國』と云ふ時 you を用ゐることを既に述べた。更に外交問題などにて彼我兩國の態度などを議論してゐる時

I don't approve your Mexican policy.

と云へば此の會話に於ける you は『お前は』でなく、『君の國の政策に賛成しない』と云ふ意味である。之に對して『我が國』すなはち our country の代りに we を用ゐることがある。

I don't think we shall interfere in the matter. (我が國は此の事件に干渉しまいと思ふ)

に於て we は our country の義である。

we hear と云ふ句がある。この we hear は it is said, I am told, people say, they (=people) say, we learn などと同義である。

We hear that two British cruisers have been sunk by a German submarine. (二隻の英國巡洋艦が獨逸の一潛航艇に撃沈せられたる由)

此の we hear の代りに上に掲げた外の言葉を以てする事が出来る。但

し we hear や we understand は新聞の記事としては用ゐない。it is said, it is reported, it is understood などとするがよい。新聞では we は社説の外に用ゐないからである。

“we,” “you,” “one” などには次のやうな用法のあることを注意して貰ひたい。

We (you or one) should not speak ill of others who are not with us (you or one). (吾人は吾人一所にゐない人の陰口を聞いてはならぬ)

【註】 should not は『……てはならぬ』。

又

He who (=anyone who) is diligent, will surely succeed. (勉強家である人は必ず成功する)

【註】 此の will には強みがある。

“They” は一般の人を指す時用ゐられることがある。

They export a great deal of rice every year. (毎年莫大の米が輸出せらる)

They say this is the coldest season of the year. (人は今が一年中の最も寒い季節であるさ云ふ)

【註】 『一年中の』を of one year と云はず。of the year と云ふべし。

(四)

此處へ來いと云ふのを Come here と云ふことは慶應生れの叔父さんでも知つてゐる。西洋種の犬のことをカメと云ふのは英米人が犬を呼んで Come, come (おいで、おいで) と云つたのを come を comé と聞きがちがへて、犬のことがカメだなどと合點したのであらうこの事だ。倫敦兒は母音の前に h を入れる傾向がある。それで日本へ初めて來た時日本人があぶない! と云つたのを日本人は英語を知つてゐると云つて驚いたさうだ。あぶないを 'ave an eye (have an eye) と聞き違へたのであつた。

斯くの如くどうせい、かうせいと云ふ時、you と云ふ代名詞を書く

のが規則になつてゐる。極端を避けたまへは Avoid extremes! である。あつちへ行つて了へは Go away! である。どうしたんだ、しつかりしないかは Wake up! である。何をぐづぐづしてゐるんだ、急いだ急いだは Be quick! 或は Hurry up! である。所が會話で日本語のやうに you を入れることもあるのである。この場合は意味を強めるのである。Sit down! (おすわり) でいゝのを、Sit you down! さ you を入れることがある。今二三の例を擧げるならば

You just read it for yourself, sir. (あなた一人でよんで御覽なさい)

If you don't believe me, just you read today's papers. (もし君が僕の云ふことを疑ふならば今日の新聞を読んで見たまへ)

Get you up, sir! (さあお起きなさい)

(五)

He seized me by the hand.

さあこれをどう譯すか。『彼れは手に依りて私をつかまへた』を直譯して見ると、手でもつて私をつかまへたやうにも意味が取れる。併しこれは彼れは私の手をつかんで私をつかまへたのである。by the hand の the は my を意味してゐるのである。the にかう云ふ意味のあることは the の條下に述べておいた。『彼れは私をつかまへた』何處でもつて? 『手に依りて』である。他の例を示せば He struck me on the head! さ云ふ方が He struck my head さ云ふより氣が付いてゐるのである。on the head の the は my でなくて his である。然らば此の文を『彼れは頭の上で私をなぐつた』など誤譯してこわいおぢさんに誤譯指摘の的となる勿れ。彼れは私の頭をなぐつたさ云ふことである。『彼れは私をなぐつた』何處でもつて? 『頭に於て』である。

He looked me in the face. (彼れは私の顔をじつと見つめた)

He took me by the throat. (彼れは私の喉をつかんだ)

Some one pulled me by the sleeve. (誰か私の洋服の袖を引いた)

Squeers left the room, and shortly afterward returned, dragging Smike by the collar. (スクヰヤスは室を去つたが間もなくスマイクのカラ(襟)を引つかんで歸つて来た)

(六)

第二人称の單數の嚴格な形に thou, thy, thee がある。これは you, your, you に對するものである。今日ではたゞ the Quakers が用ゐるのみで普通に用ゐられない。the Quakers はまた the Friends とも云つてキリスト教の一派である。東京に普連土女學校と云ふは普連土教會の學校である。また次のやうな文句の時用ゐられる。

O, thou Almighty God! (あゝ全能の神様よ!)

O, my country! thy welfare is all I care for! (あゝ我が國家よ! 汝の幸福こそわが求むる凡てである)

Begone, thou scoundrel! How I hate thee. (いつちまへ、このまぬけ奴、いやな奴だ)

上の例で見えてわかるやうに嚴肅な言ひ方や、輕蔑を示す時用ゐられるのである。

(七)

Mine さ云ふ字がある。これは『私のもの』さ云ふ字である。Whose book is this? (此れは誰れの本であるか)と聞かれて『これは私の本である』さ云ふのは This is my book であるが、『これは私のだ』は This is mine である。mine さ云へば何でも私のものさ云ふ時には用ゐられる。『己れのは己れのもの』は Mine is mine さ譯すべし。『それはおまへのだ』は That is your さ云はないで That is yours さ云ふのである。恰も『私のだ』さ云ふ時 my を用ゐないで mine を用ゐるやうなものである。your book (お前の本)、my book (私の本)と云ふやうに your は常に『お前の……』であり、my は常に『私の……』である。『おまへのものは己れのもの、己れのは己れのもの』は Yours is mine; mine is mine さ譯すべきである。

神田讀本と云ふ時 Kanda's English Readers と云ふ。これは神田の父です This is Kanda's father と云ふ。併し yours を your's と書いてはならぬ。mine (私のもの)、yours (おまへのもの)、his (彼のもの)、hers (彼女のもの) に於て、his を his' とし、hers を her's とする誤りも屢々初學者によりて爲さるゝ所であるから特に注意して置く。

This book is yours (your's としてはならぬ)。 (此本は君のだ)

This book is hers (her's としてはならぬ)。 (此本は彼女のだ)

This book is his (his' としてはならぬ)。 (此本は彼のだ)

又次の様な誤りも注意して貰ひたい。

〔誤〕

〔正〕

Is this book your? Is this book yours? (此の本は君のか)

Is this book of you? Is this your book? (これは君の本か)

This his thing? Is this his? (これは彼れのか)

元來 of は the tail of a pig (豚の尾) さか the ear of a cat (猫の耳) さか云ふやうに『の』と云ふ意味をもつてゐるけれども所有の意味で this book of you さか this book of him の如く用ゐることは出来ないのである。

〔誤〕

〔正〕

This is of you. This is yours. (此れは君のだ)

This is the dog of his. This is his dog. (これは彼の犬だ)

併しと云つても of you, of him, of her と云ふことはないさ云ふやうに誤解されては困る。

I am thinking of her. (私は彼女の女のことを考へてゐる)

I am afraid of them. (私は彼等を恐れてゐる)

He speaks ill of you. (彼れは私の悪口を云ふ)

『私の友人に會つた』と云ふのを譯す時生徒の多くは I met with my friend とする。併し my friend と云ふ一人の友人を紹介する場合の外友人が世の中に只一人しか居ない時に限り、a friend とか a friend of mine とか one of my friends とか云はればならぬ。併し私の召使ひを云ふ時には a servant では誰れの召使ひか分からないから of mine をつけるか、one of my servants とせればならぬ。

私が大學に居ました時、me and mine と云ふ語に間諷付いた講師の一人があつた。それは何でも Byron の何かの作であつた。併しこれはその人の英語の解釋力の足りないのではなく、字書を引くことを忘つた罪である。知らない言葉のあることは仕方ない。字書を引くことを忘つたのは感心しないことである。これは目的語として次の如く用ゐられるのである。

I long to see you and yours. (私は君と君の家族とに會ひたい)

He is good to me and mine. (彼れは僕と僕の家族とに親切だ)

この your を your family の意味に用ゐるのは idiomatic な意味である。又 yours of yesterday などと云つて yours を your letter の意に用ゐるのも idiomatic な意味である。

Yours truly is unwell to-day と云ふのを譯して見たまへ。『おまへの家族は今日ほんきに身體がわるい』などと誤譯すべからず。もしさう云ふ意味なら your folks are unwell to-day の如く云ふ。folks は家族のもの達の義である。諸君は手紙の終りに何と書くか。日本で草々さか頓首と書く所に yours sincerely とか yours truly (truly と書くべからず) とするであらう。そしてその下に自分の名前を書くであらう。すなはち

I shall expect your answer as soon as possible for I wait for it with the utmost impatience.

Yours truly,

K. HANAZONO.

の如くするであらう。その Yours truly から出來た會話句で『自分』“I” と云ふことである。併しこれは會話や手紙などでしやれて用ゐるので眞面目な文章に用ゐべきではない。

This won't do for yours truly. (これは私には駄目だ)

Yours truly is not taking any. (私はもう澤山です)(酒など勧められた時)

斯くの如く yours truly am としないで yours truly is とすることに注意して貰ひたい。

かう云ふことを申しておいてきて your excellency のことを云ひたいのである。目上の人に対して you are の代りに your excellency を用ゐることがある。目上を云つても父とか伯父とかでなく、大使とか公爵とか云つた人と話などする時に用ゐるのである。神田文典には

They say Your Excellency is (=you are) going to resign.

Notice that when such a title is used in place of "you" as subject, the verb is in the third person.

と出てゐる。之を譯すに、

『閣下は辭職を遊ばすさうでございますね』。

(you の代りにかう云ふ閣下など云ふ稱號を主格として用ゐる時は動詞は三人稱を用ゆ)

と云ふことになる。your excellency のことを書いてゐるに、ツヤパン・マイムスの編輯局で或る日友人の一人が新任大使か何かを國府津あたりまで迎へに行つた日の朝の會話を思ひ出す。『厄介だな。今日は、高橋さん、あのあれでせうね。やつぱり your excellency is..... を用ゐるんでせうかね』

Count Okuma went to Kozu yesterday. (大隈伯昨日國府津に向ふ)

この Count の前に His Excellency と云ふ稱號をつけて His Excellency Count Okuma..... としてもよい。恰も the Emperor だけでもよいのを His Majesty をつけて His Majesty the Emperor とし、羅馬法王を His Holiness Pope Benedict とするやうなものだ。

『あの君の時計』と云ふことを日本語でも云ひますな。左様云ひますな。英語では何と云ひませう。あのは that でせう。君のは your でせう。時計は柱時計なら clock, 饅頭時計なら watch でせう。合計 that your watch ですな。左様それでもいいのですが、that watch と your watch とを掛け合して that watch of yours としては如何でげすな。左様さうすると意味が強くなりますな。君のヤゲのあの馬は立派だ。How fine is that horse of your father's! さいひ、僕の此煙管は譲りだ。This pipe of mine is an heirloom と云つたならいゝでせう。

かう云ふのを double possessive (重所有格)と云ひますな。分りましたか。はい分りました。さよなら。

(八)

Reflexive Pronoun と云ふのがある。ある人は之を反働代名詞と呼んでゐる。それよりも Reflexive Pronoun で覚えてゐる方がよい。これは myself のやうな語であるを云へば一番よく分るであらう。『私は私自身それをした』などの私自身が myself である。働らきが他に行かないで自分に加はることをあらはすのである。

He killed himself. (彼は彼れ自身を殺した。自殺した)

この himself などの self は自己と云ふ字である。近頃日本の文壇で云ふ自己の解放は the emancipation of self である。利己主義は selfish で、彼れは利己主義な男だ。He is a selfish man である。

【第一人称】

		(主格)	(所有格)	(目的格)
(單數)	男性	myself	my own	myself
	女性			
(複數)	男性	ourselves	our own	ourselves
	女性			

【第二人称】

(單數)	男性	yourself	your own	yourself
	女性			
(複數)	男性	yourselves	your own	yourselves
	女性			

【第三人称】

(單數)	男性	himself	his own	himself
	女性	herself	her own	he self
	中性	itself	its own	itself
(複數)	男性			
	女性	themselves	their own	themselves
	中性			

S. K.

Reflexive Pronoun に二種の用法がある。一つは『自分を』と云ふ場合、一つは自分で、自分を、自身と云ふやうに自己と云ふことを強めた場合である。

He killed himself. (彼は自殺した)

I rely on myself. (私は自身に頼る)

Napoleon placed himself at the head of his army. (ナポレオンは自身を彼れの軍の頭目にした)

は普通の場合。

He killed the snake himself. (彼はその蛇を自分で〔他人の助を借らずして〕殺した)

I myself did so. (私は自身左様した)

[myself は I の語勢を強めたのである]

The army was led by Napoleon himself. (軍はナポレオン自身によりて率ゐられたり)

下のやうな熟語を記憶する必要がある。by one's self [one's self とするは myself, himself 其の他を此處に用ゐると云ふことである]は私自身で、彼れ自身でと云ふ事。He went there by himself (彼れは一人で其處へ行つた)。I did it all by myself (私一人で皆んなやつた)の如し。for one's self は他人の助けを借らずにの義。I settled it for myself (私自身で他人の助を借らずにそれを解決した)の如し。of one's self はその性質上ひさりで、自から進んでの義。The dog came back of itself (その犬は一人で歸つて來た)、the wall fell of itself (壁がひさりで落ちた)の如し。beside one's self は亂心するの義。He was beside himself with rage (彼は怒つて狂氣のやうになつてゐた)の如し。

何々し過ぐすと云ふ意味で over のついた動詞を用ゐる時は Reflexive Pronoun を用ゐる。

He overslept himself. (彼は寝過ぎた)

He overworked himself. (彼は働き過ぎた)

(九)

私は進んで“it”のこゝを書かねばならぬ。“it”は『それは』とか『それを』と云ふ字である。さう云つて了へばそれですむやうなものゝそれだけですまして置くわけには行かないのである。I gave it to him は『私はそれを彼に與へた』である。It is a dog は『それは犬である』である。『私が與へた』と云ふ次には何を與へたかと云ふ目的が來る。it はその目的である。だから it は『それを』と譯す。It is a dog の it は主格であるから『それは』と譯す。斯くの如き it は甚だ容易なるものであるが、I went to Kamakura yesterday and had a good time of it の it は何であるかと云ふと初學の人は面食はざるを得ないであらう。この it は一見何を指すとも見分け難き it である。今五六の例を擧げて見るならば、

I had a good (or nice, fine, agreeable) time of it. (おもしろかつた)

There is no help for it. (仕方がない)

Rumours have it that peace will be restored soon. (もうちき平和克復になるだらうと云ふ噂です)

We must fight it out to the end. (飽くまで我々は戦はなければならぬ)

We must walk it in the rain. (雨の中を歩かねばならぬ)

Hang it, I'm only twenty-three! (馬鹿な、僕はやうやう二十三だ)

Confound it! (畜生め)

Is it well with you? (=Are you well?) (君はいゝかい)

How is it with your child? (=How is your child?) (君の子供はどうか)

It is always so with him (=It is always the case with him) あの人はいつもさうだ)

It is all up with him (=It is all over with him) (あの人はもうだめです)〔病氣失敗等〕

又 "it" は weather (天候)、time (時間)、distance (距離)、condition (状態) 等に関して用ゐられる。

It is raining. (雨が降つてゐる)

It is snowing. (雪が降つてゐる)

It is blowing hard (=the wind is blowing hard) (風がひどく吹いてゐる)

It is very cold. (今日は大變寒い)

What time is it? (何時か)

It is ten o'clock. (十時だ)

【註】 o'clock の ' は 省略のしるしの apostrophe である。o は of の略である。然るに此の apostrophe を accent (') と間違へて o'clock (オクロック) と發音するものがあるが、o'clock は o'clock (オクロック) と發音せねばならぬ。

It is getting dark. (暗くなつて来た)

Where does it feel painful? (何處が痛みます)

How is it in Tokyo? (東京の景氣はどうです)

It is very pleasant here. (此處は實に愉快だ)

It is Sunday to-day. (今日は日曜日です)

關係代名詞

(一)

Who is it? (誰だい) と聞くに It is I (私です) と云ふ。人の部屋などに入るに外から戸を knock する。するに Come in! (お入り) と云ふ聲が聞える。其處で入る。或は Who is it? (誰れ) It is I (私です) などの會話も交される。『これは私の伯父です』は This is my uncle と云ふ。

It is they that have quarrelled. (喧嘩したのはあの人たちです)

It was a boy that killed it. (それを殺したのは一人の少年でした)

の如く it を that 以下のことを引き出す爲めに用ゐることがある。此等は They have quarrelled や A boy killed it よりも意味が強いのである。日本語では『彼れが伯林に向つて去りしは千九百十四年の五月なりき』の如き文がよくある。私は此等の新聞記事を書く外に it was in May 1914 that he started for Berlin として、屢々サムス老人に it was in May と云ふやうに特に五月であつたと云ふことを強めるべき性質の文ではないと云つて、單に In May 1914 he started for Berlin と直される事を思ひ出す。

次の文章を暗記してくれたまへ。

(1) It is her that I mean.

(2) It was him that I sent there.

(3) I thought it him that did it.

(4) I thought it to be him.

(1) は『私が意味するのは彼女の女だ』と云ふこと。It is her であつて、it is she ではない。何故なれば It is she that has gone to China (支那へ行つたのは彼女だ) と云ふやうな時は she であるが、今は I mean her (私は彼女のことを云つてゐるのだ) を強めて it is の據文にしたのであるから I mean her の her を it is の次へ置いて it is her (それは彼女だ) として that I mean (私が意味するのは) とせねばならぬ。序に It is she that has gone と云ひ、it is they that have quarrelled と云ふ如く、has や have は it is の目的となつてゐるものゝ人稱に應ずるのである。(2) は『私が其處へ送つたのは彼れであつた』と It was he としてはいけないのである。何故ならば I sent him there (私が彼を其處へやつた) を強めたのであるからこの him を It was の次へ置いたのであるからである。(3) thought it の it は that did it (それをした所の) it (それを) とかゝるので、『それをした所のそれを彼れだと考へた』が文字通りの譯である。(4) 『私はそれを彼れであると思つた』と譯すべし。

以上の如く "It is he" の如き形式の場合は It is I that am called (呼ばれたのは私だ) の如く that を用ゐて who を用ゐないのである。

又 It is a nightingale that is singing over there (あそこで啼いてゐるのは鶯だ)の that は which ではないのである。

斯くの如き that は関係代名詞 (Relative Pronoun) と稱するものである。之に屬する語は who, which, that, what, as, whose, whom, but 等である。

(二)

以上で明白である如く、clause (句)と clause (句)とを結び合せる代名詞が関係代名詞 (Relative Pronoun) である。関係代名詞が指す人なり、物なり、熟語なり、句なりを先行詞 (Antecedent) と云ふ。たゞへば This is a house that Jack built (これはジャックが建てた家である)の that は関係代名詞で that の指すものは a house である。故に house は antecedent である。

Antecedent が人や物のみならず單句や句を指すことは which の特色である。

They tried hard to catch the fish, which, however, was found impossible. (彼等は魚を捕へんことを大いにやつて見たが、それは不可能であつた)

若し which が 人なり物なりの語のみを指すとしたら、which は fish のみを指すこととなり此の文章は無意味に終つて了ふ。然るに which は to catch the fish と云ふ一つの phrase (單句)とでも譯すべし。二三の語の小集合にして通常賓辭なく又多くは前置詞に支配せらるゝ語より成り形容詞、副詞又は名詞に相當する働きを爲すもの。the house on the hill の on the hill は phrase なり)を指すのであるから、魚を捕へることが impossible であつたと云ふので意味が通るのである。

又 which は clause (句)と譯すべし。一つの文には walls have ears (壁に耳あり)の如く一つの主語と賓辭とで出来てゐる單純なものもあれば James came back but Frank did not (ジェイムスは歸つた。がフランクは歸つて來なかつた)の如き複文 (compound sentence) と稱せらるゝものもある。此の複文にありては but や and 等の接續詞で二つ或は

二つ以上の文が結び付けてある。此の複文の中の一つ一つの小さな文すなはち James came back と Frank did not とを名づけて clause と云つてゐる)を指すこともある。

He has performed such a hard task without murmur, which is a clear proof of his strong will. (彼はこんな困難なことをぶつぶつ云はずにやつた。それが彼れが強い意志を持つてゐる證據だ)

に於て which は初めの clause 全體を受けてゐるのである。『その事が』と譯すべきものである。

She told her father of her success, upon which his face brightened up with joy. (彼女は自分の成功のこゝを彼女の父に話した。すると父の顔はよるこびで輝いた)

此の文の which は She told her father of her success を受け、upon which で『その時に』と云ふ意味となる。

(三)

That の用法:—

- (1) He is the wisest man that (not whom) I know. (彼れは私の知つてゐる所の [=中の] 一番賢い人だ)
- (2) It is I that (not who) am (not is) called. (呼ばれてゐるのは私だ)
- (3) A lady and a dog that are passing by. (通りつゝある所の一人の婦人と一匹の犬) [人と動物を含む時]
- (4) Who that (not who) is honest can do so? (正直である所の誰れが左様に爲し得るか=爲し得ない)
There are some that (not who) don't know him. (あの人を知らない人もある)
This is all that (not which) I want to say. (これが私が云はうと思ふ凡てだ)
This is the same watch that (not which) I lost yesterday. (これが昨日私が亡くした時計だ)

What の用法:—

This is just *what* I want. (これこそ私が欲しいと思ふ所のものだ)

I am not *what* I was. (我れや昨日の我れにあらず)

(四)

関係代名詞としての *As*:—

(1) As many students *as* came are Waseda boys. (来ただけの學生は早稲田の學生である)

(2) Let us associate only with such *as* (=those who) are wise. (賢くある所の人とのみ交際するがよい)

I like such a story *as* is both instructive and amusing. (私は教訓になり面白い話が好きな)

(六)

But = that not:—

There are nobody *but* has (=that has not) some ambition. (野心のないものはない)

(七)

It is I that went there (其處へ行つたのは私です)と云ふのは I went there と云ふのを強めたに過ぎない。此の文では君ではなくて僕だと云ふ風な意味となる。It is there that I went と云へば私が行つたのは其所であること *there* を強めたのである。

それであるから It is I that am suspected (疑はれてゐるのは私です) は I am suspected と云ふに同じである。たゞそれは It is I, not you と云ふ意味が加はつてゐるに過ぎない。それ故、*that* の次の動詞は It is I の I と數を同じくするのである。之を文法の用語を用ひて云へば subjective complement と數を同じくするのであつて *it* と數を合すのではない。It is you that were struck (打たれたのは君だ); it is they that

have won the race (此の競争に勝つたのは彼れ等である)などはその例である。

私は初めて新聞の記事を書いてゐる時分、日本文の語氣を真似て『一行が北海道に到着せしは五月六日なりき』などあるのを It was on the six of May that the party arrived in Hokkaido の如くして、サムス氏から The party arrived in Hokkaido on the six of May と直されたことを思ひ出す。さう云へば成程こんな場所で特更五月六日であつたこと云ふことを強めて云ふ必要はないのである。

(八)

私の居た學校にヨツリヨツリと巡査のやうな靴の足音をさせて入つて来る先生があつた。生徒はその M 先生にはふるへて居た。私の級には天才組と云ふ一團があつて、てんで英作文などを馬鹿にしてゐた。巡査のやうな足音だと云ふのは天才組の一人が言ひ出した形容である。天才組の一人は、M 先生から或る日、『誰れでも答へることの出来る人に褒美をやる』と云ふのを I will reward whoever can answer と云ふのか、I will reward whomever can answer と云ふのかと問を受けた。彼れは首下に『勿論 I will reward whomever.....です』と云つた。『いゝえ、さうではありません』と M 先生は云つて I will reward whoever..... が正しいのですと云つた。whoever は anyone who であり whomever は anyone whom である。whom can answer と云ふことはないから whoever が正しいのであるのは勿論である。此くの如くして問答は次へ次へ移つた。私は絨織の羽織を着て寒さうにして聽いてゐた。何でも三月初めの寒い日であつた。

私は whoever, whomever 等のことを書かうとしてまづ最初に此の出来事が胸に浮んだ。こんなつまらないことが私の頭腦の一部に止まつてゐるほどに、私の學校時代は實に平凡であつた。初夏の木の葉がぼつぼつと青い衣服を着る時分に私はよく圖書館からたまらなくなつて外に出た。圖書館と散歩が私の生活の全部であつた。私は戀を求めて戀のない淋し目をつまらなく重ねてゐたのだ。

主 格 Whoever, Whosoever (= anyone who).
 所有格 Whosever, Whosoever (= anyone whose).
 目的格 Whomever, Whomsoever (anyone whom).
 主 格 { Whichever, Whichever (= either or any that).
 及び {
 目的格 { Whatever, Whatsoever (= anything that).

の如く小さなカードに書いて、學校から歸るさ向島あたりを暗記して歩いた。なほ幾枚かのカードには次のやうな句が集めてあつた。

Whosoever comes will be welcome. (誰でも來る人は歓迎される)

He helped whoever was in distress. (彼れは誰れでも難儀してゐる人を助けた)

Please invite whomever you know. (どうぞおまへの知つてゐる人を招きたまへ)

I will take whichever you like. (ごつちでも好きなのを買はう)

I don't like whatever is wrong. (私は何でもまちがつた事が嫌ひです)

私のかうしたカードを懐ろに入れて散歩した所は主に向島から木母寺あたり。或は曳舟へかけてゐあつた。櫻が満開で都人士が浮れ歩いてゐる間をかまはず、カードを見ながら堤の人込みの中を分けて行つたこともあつた。殆んど毎日學校から歸るさその方面に出掛けるので、吾妻橋の橋の袂にゐる車夫に見覚えの顔が幾つか出來てからは何さなく氣まりがわるく、わざわざ廻り道してサツボロビールの裏の通りを通つて土手に出た日もあつた。

(九)

Whatever it may be, always do your best. (何事にてても常に全力を盡せ)

Whatever }
 Whenever }
 Wherever }may. (たさひ.....であらうとも)
 Whoever }
 However }

これは次の形式に同じ。

No matter { what }
 { when }may.
 { where }
 { who }
 { how }

例一

If anyone should do so, I will punish him, whoever he may be.

(誰れかもしさうするなら、誰れであらうとも私は罰してやる)

Whatever you do, you cannot please him. (何をおまへがしたつて彼れの氣に入る筈はない)

Whichever you may be given, you must keep it carefully. (何を貰つても丁寧にしまつておかなければならぬ)

Experience has proved that discoveries in science, however remote from the interests of every day life they may at first appear, give in the end innumerable benefits to mankind.

41. 海軍機關學校

(科學上の発見はたさへ最初は日常生活の利害からどれほど遠く見ゆるとも遂には人類に無数の利益を與ふるものであることを経験は證明してゐる)

疑問代名詞

(一)

新聞記者の常に心掛くべき事は who, what, where, when, why, how と云ふことである。如何ほどその記事が正確であつても此の中の一つ

を缺いても完全さは云へない。誰れがしたのであるか分つてゐても、何處で起つたかも、何日起つたかも、その原因も模様も分らなくては、その記事は不完全である。news value (記事としての價値) は此等の諸點が具つて初めてきまるのである。新聞記者は一種の歴史家である。歴史の研究も此等の點を土臺としての研究に外ならぬ。此等のものを疑問代名詞 (Interrogative Pronoun) と云ふ。

疑問代名詞は文の最初に置れてゐるのが通明きなつてゐる。

What do you want with me? (何か用ですか)

Whom do you want? (誰れが欲しいのか)

Which is the lighter of the two? (此の二つの中何れが軽いのか)

尤も會話句では次のやうに用ゐることがある。

"I want to see Mr. B"

"To see whom?"

"I want a cup of tea."

"Want what?"

私は B さんに會ひたい。

誰れに。

私は茶が一杯飲みたい。

何を。

の如くである。

(二)

今は何時ですか。

What time is it?

What o'clock is it now?

What is the time?

What time is it by your watch?

今は何時だか知りません

I don't know what time it is.

あれは何んです。

What is it?

何だか知りません。

I don't know what it is.

何ですつて。

What do you say?

私にはあなたの云ふことが知りません。

I don't understand what you say.

誰でせう彼の人。

Who is he?

誰ですか知りません。

I don't know who he is.

あの人は何處へ行きました。

Where did he go?

何處へ行つたか知りません。

I don't know where he went.

これだけの例を無精者の私が此處に根氣よく擧げたさしたら感じの早い諸君は私が何と云はうとしてゐるか分るであらう。『それは何だ』と云ふ時は what is it? であるが、それが文章の中へ入つて來ると I don't know what it is のやうに is it でなしに、it is となるのである。私はこれが云ひたかつたのだ。

Do you think と共に用ゐられる時は Do you think what it is? とはせず、What do you think it is? (それが何だと思ふか) としなければならぬ。

I don't know what to do と云へば ^{私は ぬ 知ら 何をいかにすべき 爲す} I don't know what to do と讀む。I don't know whom to consult は私は誰れに相談すべきかを知らぬといふ事。

(三)

What と how との區別下の如し。

(誤)

How has become of him?

(正)

What has become of him?

(彼の人はどうなつたか)

【誤】

How do you think of it?

How old is his age?

How much is the price of this article?

How much is his income?

How much is the population of the city?

When is this in this month?

When is this in this week?

【正】

What do you think of it?

(君はそれをどう思ふ)

What is his age?

(彼れの年は幾つか)

What is the price of this article?

(此の品物の値段はいくらか)

What is his income?

(彼れの収入はいくらだ)

What is the population of the city?

(此の市の人口はいくらか)

What day of the month is this?

(今日は幾日か)

What day of the week is this?

(今日は何曜日か)

(四)

Which do you like better, this or that? (おまへはこれか、あれか、どつちの方が好きか)

Which of the two do you like better? (この二つの中どつちが好きか)

I don't know which of A and B is larger. (AとBとのどつちが大きい私には分からない)

指示代名詞

(一)

This, that, such, all, both, one, another, other 等を指示代名詞 (Demonstrative Pronoun) と云ふ。demonstrate は指し示すの義で、demonstrative は形容詞である。又之を人に依る形容詞的代名詞 (Ad-

jective Pronoun) と云ふ。何故ならば this に名詞がついて this dog (此の犬) となる。this が形容詞 (Adjective) となるからである。this 等して形容詞の場合を知つておれば代名詞としての用法も會得し得らるゝものである。

What is *this* flower? (此の花は何だ)

と云ふ時の this は flower と云ふ名詞に附屬してそれを形容してゐるので形容詞である。だが

What is *this*? (これは何だ)

の this は花を見てゐるならばその花の代りをしてゐるので代名詞である。

This is a rose. (これは薔薇です)

の this は代名詞である。

What is *this*? (これは何だ)

ときかれたらその答へに二つの仕方がある。

This is a flower. (これは花だ)

It is a flower. (それは花だ)

花をさへてゐて尋ねる。此方も花をさへて答へる。その時は *this* である。併したゞ質問に答へてそれはと云ふ時は *it* である。

What is *that*? (あれは何だ)

と云ふのは離れてゐるものを指して云ふ時である。その時も答へは *it* である。that を用ゐればこちらでもそれを特に指して云ふ時である。

(二)

This と that:—

He often catches a cold, and *this* (=which) shows how weak

he is. (彼れはよく風邪を引く。その事が身體の弱い證據だ)

Please bring me that and *that* (=and do so) immediately. (どう

かそれを持って来てくれ。早く)

The late Baron H. Kato was the first Japanese who preferred the

study of German to *that* of any other foreign tongue. (故加藤弘之男は他の外國語の研究よりも獨逸語の研究を思ひ立ちし最初の日本人なり)

Something like *that*. (まあそんなものさ)

The cat scratched me like *this*. 猫がこんなにひつかいた)

His essays are better than *those* of his brother. (彼の論文は彼の兄〔或は弟〕の論文よりいい)

I am going to start for America *this* day week. (私は來週の今日米國へ立たうさおもつてゐます)

He started for America *this* day week. (彼れは先週の今日米國へ云つた)

I shall be able to finish it by *this* time to-morrow. (私は明日の今頃までにして丁ふことが出来ませう)

I shall visit you one of *these* days. (その内に御訪れします)

I have studied the language *these* five years. (この五年間その國語を學びました)

A very nice inn, *that*. (非常にいい宿屋だ、あそこは)

Certainly. There can be no objection to *that*. (いいさもさ)

Not only *that*, but (also) he failed in the examination. (それのみならず、彼れは試験に失敗した)

(二)

This と that を the former と the latter の代りに用ゐることがある。併し *this* は the latter (後者) の意で、*that* は離れた方だから the former (前者) の意である。the former, the latter と順序がアベコベである。

I like the dog better than the cat; *this* (=the latter) is not so faithful as *that* (=the former). (私は猫より犬の方が好きだ。猫は犬ほど忠實でない)

(三)

The same :—

This is the *same* (watch) that I lost yesterday. (これは昨日なくしたやつだ)

The *same* is true with Chinese. (同じことが支那人に就ても云はれる)

He bought a watch on the 5th and sold the *same* (=that very watch) the next day. (五日に時計を買つて、その時計を翌日賣つて了つた)

(四)

All の熟語 :—

He does not study *at all*. (ちつとも)

What do you study *for at all*? (一體全體)

Be thorough, if you study *at all*. (ごうせ)

After all, woman is weaker than man. (つまり)

There were fifty *in all*. (皆で)

I will do this, *first of all*. (まづ最初に)

(五)

Both の用法 :—

Both are good (両方ともいい) と云つて、the both are good とは云はない。

Both A and B are good.

Both the brothers are good. = The brothers are both good.

Both of them are good.

They are *both* good.

〔参考一〕 *Either A or B* is good.

〔参考二〕 *All* the brothers are good = The brothers are *all* good.

All of them are good. = They are *all* good.

(六)

One の用法:—

One should obey one's (not his) superiors. (人は目上の人に従はざるべからず)

之をランランの規則と云ふ。one を云つたら his を云はずに one's を映えるべしと云ふことです。ニヤンのことだといふべからず。たゞし any one, some one, every one, each one, no one は one's でなく his で受ける。Every one did his best (各自出来るだけのことをした) No one knows his own fate (誰れも自身の運命を知らない) などの如し。

Have you a knife? (君はナイフをもちですか)

と云つたら a knife は any knife であつて、ナイフでありさへしたらどんなナイフでもいゝのであるから、きまつたあのナイフと云ふのは此のナイフと云ふことを意味するのではない。それ故その答は yes; I have it でなく、yes, I have one と云ふのである。あのナイフを持つかと問はれたら yes, I have it と答へるのである。

He has two sons; the one is a doctor, the other a journalist. (彼は二人の息子を持つてゐる。一人は医者で、他の一人は新聞雑誌記者だ)

この the one the other の定冠詞を忘れないやうにして貰ひたい。on the one hand on the other (hand) [一方では.....又一方では] に於ても the を落さぬやうに注意しなければならぬ。

君のやうな人と云ふ時 such a one as you と云ふ。one は wūn であるから、で初まつてゐても子音の取扱を受けて an でなく a を用ゐる。one は一つと云ふ意味でなく、man の意味であるから、複数にすることが出来る。such ones as you (是等のやうな人) はその例である。

(七)

Some と any:—

{ You must do so sometime. (いつかその内)

{ You may do so any time. (いつでもいゝから)

{ Somebody must have told you so. (誰か)
{ Anybody will do. (誰でもよい)

(八)

Each other と one another:—

[Each other は二つに就き]

The two hated each other. (此の二人は互ひに悪みあつた)

Don't quarrel with each other about such a thing! (こんな事で喧嘩するな)

[One another は三つ以上に就き]

The three hated one another. (此の三人は互ひに悪みあつた)

Don't quarrel with one another! (大勢してそんなに喧嘩するな)

此の區別は歴々 great writers によりて認識せられ、Hawthorne の如き one another と書くべき所を歴々 each other としゐる。

練習問題

下の誤りを正せ。

- (1) The gentleman ^{whom} who you see there is Mr. Kasuga. (あそこに居る紳士が春日君だ)
- (2) I like such a story which you have just told. (君が會話したやうな話が好きだ) ^{whose}
- (3) It is they who has been out. (外へ行つたのは彼の人だ)
- (4) Anybody must have concealed it. (誰か隠したにちかひない)
- (5) One should obey his parents. (人は両親に従ふべきである)
- (6) What if you do, you can not please him. (何をしたつて彼の人の氣に入ることは出来ない)
- (7) They are astonished at their own's handwork. (彼等は自分ながら自分で作ったものにびつくりしてゐる)
- (8) Is this first your visit to America? (アメリカは君は今度が初めてか)

- (9) I is Taro. (私は太郎だ)
 (10) Either you or I are wrong. (君か僕かがわるい)
 (11) What time is now? (今何時かれ)
 (12) Do you think what is it? (何だこ君は考へるか)
 (13) How much is the population of Tokyo? (東京の人口はいくらだ)
 (14) This is your. (これは君のだ)
 (15) I don't know to do what. (我れ何をすべきかを知らず)

(I) 下の直線の部に適當なる代名詞を入れよ。

- (a) You may purchase _____ you need.
 (b) _____ is heavier, lead or gold?
 (c) This is the best book _____ I know of. (八高 41)
 (d) Health is of more value than money; _____ cannot give such true happiness as _____ (専檢 40)

【答】 (a) whatever; (b) which; (c) that; (d) this, that (this=the latter; that=the former)

(II) 下の文章中の 'what' の part of speech 及び其の sub-class を示し、且つ何れの語の subject, object, or complement なるかを説明せよ。

And *what* surprised me most was that he was not there.

(陸士 41)

【答】 此の文は『私の最も驚いたことは彼れが其處にゐなかつたこと云ふことであつた』と云ふことで、'what' の part of speech は代名詞、その sub-class は關係代名詞である。此の語はつまり 'that which' の義で、その一語で 'that' と云ふ antecedent (先行詞) と 'which' と云ふ關係代名詞とを兼ね、その中に含まれた 'which' が surprised の主格で、that は was の主格である。

第六編 動詞

動詞の意義

愈々動詞まで漕ぎつけることになつた。文法で一番大切なのは動詞である。人間一生の活動は action の寄り集り重り合ひに外ならぬ。静止してゐる人生は状態である。此の動作と状態を示す言葉が動詞 (Verb) であることすれば人間の expression に動詞が大切なのは云ふ迄もない。言ひかへれば動詞は人、物、場所に就てそれが何をするか、何が爲さるゝか、どう云ふ有様にあるかを述べる言葉である。そしてその動詞の主語となるものは常に名詞である。Walls have ears (壁に耳あり) とあれば have (持つてゐる) と云ふ動作の言葉を何がしてゐるのだと云へば walls である。walls は主語である。walls は名詞である。

自動詞と他動詞

(一)

自動詞 (Intransitive Verb) と他動詞 (Transitive Verb) との種類がある。字書を見るに動詞の字には必ず *v. t.* (Transitive Verb の略) とか *v. i.* (Intransitive Verb の略) とかしてあるのを見るであらう。又字書に依りては *vt.*, *vi.* のやうにしたものもある。兎も角何れの動詞も此の他動詞か自動詞か何れかに属するのである。動詞による他動詞だけのもあり、自動詞だけのもある。又他動詞と自動詞と両方の意義を有するものもある。たゞ Chamber's Twentieth Century Dictionary によりて rise のくだりを見るに、

Rise, rīz, *v. t.* to move from a lower to a higher position: to stand up: to ascend: to grow upward: to swell in quantity or extent: to take an upright position: to leave the place of rest: to tower up: to pear: to have its source: to increase in size, value, &c.: to become excited or hostile: to break forth into commotion or insurrection: to increase in rank, fortune, or fame: to be promoted: to be perceptible to other senses: to excavate upward: to come to mind: to close a session: (B.) to ascend from the grave:—*pa. t.* rōse; *pa. p.* risen (riz'n).—*n.* act of rising: ascent: degree of elevation: a steep: origin: increase: (*archit.*) the upright piece of a step from tread to tread: (*mining*) a shaft excavated from below: (*mus.*) elevation of the voice.

とある。 *v. t.* は他動詞であること云ふこと、その下の一つ一つが色々な意味、(B.) とあるのは Bible に用ゐられた意義で普通には用ゐない意味、*pa. t.* は past tense (過去の時) の略、*pa. p.* は past participle (過去分詞) の略、*n.* は名詞の略、(*archit.*) は architecture (建築) の語で建築上の語、(*mus.*) とあるは music (音楽) の専門語である。此の rise と云ふ字には他動詞もないではないが、普通自動詞のみであるので、此の字書には自動詞のみ記されてゐる。

更に raise と云ふ字を見るに、

Raise, rāz, *v. t.* to cause to rise: to lift up: to hoist: to set up-right: to originate or produce: to bring together: to cause to grow or breed: to produce: to give rise to: to exalt: to increase the strength of: to excite: to collect: muster: (*Scot.*) to rouse, inflame: to recall from death: to cause to swell, as dough: to extol: to bring up: to remove, take off, as a blockade: to collect, as to raise a company: to give rise to, as to raise a laugh.—*n.* an ascent, a cairn: (*coll.*) an enlargement increase.

とある。これは他動詞である。rise は『起きる』(to move from a lower to a higher position) と云ふのが第一の意味で、raise は『起こす』(to cause to rise) が第一の意味である。起きると云ふのは自分それ自からのやることであつて、他に直接関係を及ぼさないから自動詞である。然るに起こすと云ふことは to raise it (それを起す)、to raise a dust (埃をたてる)、to raise one's eyes (眼を上げて仰視する) の如く何かしらを起こすことであつて、働きが他に及んでゐるから他動詞といはれる。普通『何々を』と云ふ『を』のつくのが他動詞である。

又字によること、自動詞と他動詞と二つながらあるのがある。

Yield, (yēld), *v. t.* 生ずる、産する、出す、齎らす: 譲る、渡す、放棄する: 與へる、許す: 認める、承認する—*n.* (土地等が) 酬ゆる: 報酬を生ずる、實る、出来る: 降服する、従ふ、靡く。

の如きはそれである。to yield a fortress (要塞を渡す) の如きは他動詞である。又 I have courage never to submit or yield (決して服従挫折せざる勇氣) の如きは自動詞である。

他動詞は目的 (object) を取り、自動詞は目的を取らない。

【自動詞】

The boys are reading. (少年等は讀書しつゝある)
I will return soon. (私は直きに歸る)

【他動詞】

The boys are reading books. (少年等は本を讀みつゝある)
I will return the book. (私はその本を返します)

それ故自動詞を用ゐる時 I consent that (それに同意する) のやうな間違ひをしないことだ。必ず前置詞を伴つて I consent to that (それに同意する) の如くせねばならぬ。

(二)

他動詞が二重に object を取ることがある。たとへば I struck him (私は彼を打つた) に於て目的 (object) は him 一つであるが、

I told him a story. (私は彼れに話をしてやつた)

に於ては him (彼れに)も a story (話を)も目的である。誰れに? 『彼れに』である。彼れに話した、何を? 『話を』である。同じやうに

I gave the boy a book. (私は彼の少年に本をやつた)

に於ては the boy も a book も目的である。

此の him や boy は前にあつても意味の上から云へば却つて間接に動詞の働きを受けてゐる。直接に働きを受けてゐるのは story と book である。『話を話した』、『本を與へた』と云ふやうに story や book が直接の目的となつて、him や boy は間接の目的となつてゐる。直接の目的となれるものを Direct Object と云ひ、間接の目的となれるものを Indirect Object と云ふ。

若し二つの目的 (double object) を有するものを前置詞 (preposition) を入れて書き換ふれば Direct Object と Indirect Object の性質は自づから明かになるであらう。

“To” の目的:—

○ He told her a story. (彼れは彼女に話をしてやつた)

= He told a story to her.

○ He gave the boy a book. (彼れはこの少年に本をやつた)

= He gave a book to the boy.

“For” の目的:—

○ I bought him a hat. (私は彼れに帽子を買つてやつた)

= I bought a hat for him.

○ His father built him a house. (彼の父は彼れに家を建て、
た)

= His father built a house for him.

Of の目的:—

○ I asked him a question. (私は彼に質問した)

= I asked a question of him.

○ He inquired them the result. (彼れは彼等にその結果を尋ねた)

= He inquired the result of them.

以上で見る如く Indirect Object (間接の目的)が Direct Object (直接の目的)に先立つのが規則であるが、もし直接の目的が “it” で、間接の目的も代名詞であるとき、その位置は轉倒する。すなはち

I told it him. (私は彼れにそれを話した)

I told him the fact. (私は彼に事實を話した)

I gave it her. (私はそれを彼女に與へた)

I gave her the book. (私は彼女にその本をやつた)

の如く云つて I told him it や、I gave her it とは云はないことを覚えておいて貰ひたい。又 I told it to him や I gave it to her の如き構文も勿論併用されることを記憶しておなければならぬ。

(三)

動詞を又他の方面から見ると完全動詞 (Complete Verb) と不完全動詞 (Incomplete Verb) とに分かれる。完全と云つてもこの完全は perfection を意味するのではない。complete と云ふとそれだけで完体となつてゐるのを云ふ。たゞせば I kept it (私はそれを取つておいた) と云へば kept は complete verb であるけれども、I kept it hot (私はそれをあつくしておいた) の kept はそれだけでは何の事だか分からないから incomplete verb と云ふのである。I kept it hot の hot は complement である。complement のことに関しては序論を参考して貰ひたい。

他動詞 (catch, make 等) に complete と incomplete とあり、自動詞 (burn, dance 等) に complete と incomplete とある。

Complete Transitive.

I caught him. (私は彼を捕へた)

I made a box. (私は箱をこしらへた)

I struck it. (私はそれを打つた)

Complete Intransitive.

Fire burns. (火が燃える)

She smiled. (彼女は微笑んだ)

The girls danced. (少女達は踊つた)

Incomplete Transitive.

- I kept it hot. (私はそれをあつくしておいた)
- I made him a soldier. (私は彼を兵士にした)
- I drove him mad. (私は彼を氣狂のやうにした)
- What made him so rich? (どうして彼の人はあんなに金持ちになつたのか)
- I have got my hair cut. (私は私の頭を刈つた)

Incomplete Intransitive.

- It got hot. (それはあつい)
- He became a soldier. (彼は兵士になつた)
- He got mad. (彼は氣狂のやうになつた)
- He became rich. (彼は金持になつた)
- I got tired. (私はくたびれた)

(四)

自動詞が他動詞と同じ意味の目的 (Cognate Object) を取つて他動詞となることがある。

- I dreamed a sad dream. (私は悲しい夢を見た)
- I slept a sound sleep. (私はぐつすり寝た)
- He lives a wretched life. (彼はみすぼらしい生活をしてゐる)
- He died a glorious death. (花々しい死に様をした)
- They fought a desperate fight. (彼等は死に物狂ひになつて戦つた)

の如く dreamed a dream に關する形式である。恰も日本で習字を習ふと云ふやうなものだ。

(五)

私は先きに complement のこゝに關して序論を見るやうに云つた。併し序論に於ける complement の説明は簡單である。私は再び complement のこゝを此處に述べたくなつた。恰も此の一節を書くのが三月の日曜の朝であつて、私はゆつくりと執筆する氣持になつてゐた。

私はたつた一人で留守居をしてゐる。三月と云へまだうす寒く、私は着物の上に洋服の外套を引つけて左手をふさごころに突込んで右手にペンを持つてゐる。Longfellow が Dante の神曲を譯した時、毎朝牛乳の煮立つまでの暇を利用したと云ふが、私は今丁度 Longfellow のやうに牛乳を沸してゐる。併し Longfellow の呑んだコップに平岡牛乳店と書いてあつたかどうかは疑問である。ごぶごぶと右手で牛乳を呑む。左手は懐ろに突込んでゐるので何をすることも右手の御厄介になる。いつの晩だつたか銀座を歩いてゐてふさして金春館へ入つて見た。私の前にゐた若い男女の Romeo と Juliet が男は常に右の手、女は常に左の手で、茶も呑めば扇も使へば鼻もかむ。變だと思つてゐる男の左の手と女の右の手との union がアダムとイヴとの古いそしていつまでも新しい問題を語つてゐた。私は今それを思ひ出した。眞白な大理石を箱根の湯で解いたやうな液体の二合がわけもなくボンボの中へ入つて了ふ。やがて妻が髪を結つて歸つて來た。袂からアルマを出して机の上におく。此處で牛乳に入れ代つてアルマを一本吸ふ段取りとなる。朝の日光が印象派の畫家が地上の花と草とを畫いたやうな佛蘭西の何さか織りの机掛の上に自由に惜し氣もなく漲つてゐる。鏡にうつるサイネリアの温室咲きに春は既に來てゐた。

Spring comes (春が來る)、the sun shines (太陽が輝く) の comes や shines は自動詞であつて、もうこれで意味が完成してゐる。所が seem, be, become, appear, smell, turn out, fall, grow, call などは自動詞ではあるが、complement がなくては意味が完成しないのである。Complement は補語と譯して、動詞の動作を蒙らないで而かもその足らざるを補つて賓辭 (Predicate) を完成させるものである。I read the book と云へば the book はこれも一種の complement であるにはちがひないが read と云ふ動詞の働きを受けてゐるので the book はこれを read の目的 (Object) と稱する。He is handsome (彼れは美男子だ) に於ける handsome や he became a soldier (彼れは兵士になつた) の a soldier は complement である。he が handsome であり、he が兵士になつたのであるから、斯う云ふのを Subjective Complement と云ひ、they made him

happy (彼等が彼を幸福にした)の happy は him に関することであるから Objective Complement と稱する。

自動詞で complement を要する例:—

1. Miss Yoshi is beautiful. (よし子はきれいだ) ["is" の adjective-complement]
2. Elizabeth was queen. (エリザベスは女王であつた) ["was" の noun-complement]
3. She became a woman. (もう女になつた) ["became" の noun-complement]
4. It was I. (それは私でした) ["was" の pronoun-complement]
5. Cheerful he seemed, and gentleness he loved. (彼れは快活に見えた。彼れは温雅を愛した) ["seemed" の adjective-complement]
6. Macbeth looked pale. (マクベスは眞青な顔をしてゐた) ["looked" の adjective-complement]
7. Henry VIII. appeared every inch a king. (ヘンリ八世はごう見ても王様に見えた) ["appeared" の noun-complement]
8. This story reads well. (この話は中々讀めるよ) ["reads" の adverb-complement]
9. The nurse sang the boy to sleep. (乳母が歌をうたつて子供を寝かしつけた) [sang the boy の infinitive-complement]
10. He burst out into laughter. (彼れは笑ひ崩れた) ["burst out" の phrase-complement]
11. This is just what I mean. (私の云つてゐるのはその事です) ["is" の clause-complement]

complement 完了形
(六)

同じく complement に関係あることであるが元來他動詞であるものが自動詞となつて受身 (passive voice の譯にて何々されること云ふ態)の意味となることがある。例へば I sell a book (本を賣る)の如く他動

詞の sell が自動詞になつて this book sells well といへば此の本はよく賣れること云ふことになる。以下例を擧げて説明しやう。

1. The rose smells sweet. (此の薔薇が甘い匂ひをする) = the rose is sweet to the smell. ["smells" の adjective-complement]

【註】此の smell は to have a smell (香を有する; 香りをする)と云ふ意味の自動詞である。She smells the rose (彼女が薔薇をかぐ)の smell は他動詞である。

2. Honey tastes sweet. (蜜蜂は甘い味がする) = Honey is sweet when it is tasted. ["tastes" の adjective-complement]

【註】此の taste は to have a flavour of (の味を有する)の意味で自動詞である。The bee tastes honey (此の蜂が蜜をなめてゐる)の taste は to try by eating a little の意味で他動詞である。

3. This paper feels smooth. (此の紙はすべつこい) = This paper is smooth when it is felt. ["feels" の adjective-complement]

【註】此の feel は自動詞で to produce a certain sensation when touched, as to feel hard or hot の義である。The blind man feels everything with his hands (盲人は何んでも手で觸れて見る)の feel は『に觸る』と云ふ意味の他動詞である。

以上の如きもの外、ing の形の動詞が自動詞でありながら他動詞の意味を有するものがある。すなはち次の如きものである。

1. Preparations are making (=are being made) to receive him. (彼を歓迎するので準備がされてゐる)
2. The drums are beating (=are being beaten). (太鼓が打たれてゐる)
3. Many kites are flying (=are being flown). (紙鳶が上げられてゐる)
4. The houses are building (=are being built). (家が建てられてゐる)
5. The book is printing (=is being printed). (本が印刷中である)

(七)

自動詞が前置詞を伴つて他動詞として用ゐられたる例:-

They looked on (or upon) me as an (or their) enemy. (彼等は私を敵と思つてゐた)

Look for it at once. (すぐそれをさがし)

The man was laughed at. (その人が冷笑された)

They laughed at him. (彼等は彼を冷笑した)

Fortune smiled on him. (運命の女神が彼れをひいきにした)

Think of it. (まあ考へてごらんさい)

I must attend to another patient. (私はもう一人の患者の世話をしなければならぬ) [併しながら I attended the meeting (私はその會に出席した)]

He asked for money. (金を無心した)

I asked after my sick friend. (病人の友人を見舞つた)

I will speak about it at (or on) the first opportunity. (序のあり次第その事を話す)

They speak of me as a good teacher. (皆なは私をいゝ先生ださ云ふ)

She called on me to-day. (あの女史は今日私を訪れて来た)

I shall call on you to-morrow. (私は明日君を御訪れする)

I called at the Legation. (私は公使館を訪問した) [處の時は call at]

I called on the Minister at the Legation. (私は公使館に公使を訪れた)

I sent for the doctor. (醫者を呼んだ)

Reflexitive Verb.

(一)

他動詞が self, selves の附いた代名詞、すなはち himself, themselves 等を目的 (Object) に持つ時は之を Reflexitive Verb と稱する。そして目的になつてゐる言葉を Reflexitive Object と稱する。その目的と主格とは常に同一の物である。

General Nogi killed himself. (乃木大将自殺したり)

In doing so, you are ruining yourself. (さうして、おまへはおまへ自身を滅しつゝある)

Let us avail ourselves of the opportunity. (我々をして此の機會を利用せしめよ)

He prides himself on his eloquence. (彼は自分の辯のいゝのを自慢にしてゐる)

He overslept himself. (彼は寝過ぎた)

I have overeaten myself. (私は食べ過ぎた)

He overworked himself. (彼れは働き過ぎた)

下のやうな動詞は多く常に reflexively に用ゐられる。

behave	seat	destroy
betake	turn.....into	defend
bethink	avenge.....on	report
bespeak	revenge.....on	forget
overeat	develope	bother
oversleep	pride.....on	ruin
overdrink	offer	throw
over-reach	addict 毒耽	demean
recover	compose	dress
possess.....of	absent	help
settle.....in	kill	carry
forget	devote	make

例:—

Pray, compose yourself. (どうか落ち着きたまへ)

Behave yourself. (ちやんさしていらっしゃい)

We betook ourselves to bed. (私は寝た)

He bethought himself of going there. (彼はそこへ行かうと考へた)

A fox turned itself into a beautiful lady. (狐がきれいな女になった)

He arose and dressed himself. (彼れは立上つて着物を着た)

They determined to avenge themselves upon him. (彼等は彼れに復讐してやろうと決心した)

Don't bother yourself about such trifles. (こんなつまらぬことは苦むのはよしたまへ)

I could not make myself understood. (ごうも私の云ふことが向ふに分らなかつた)

I devoted myself to the compilation of the dictionary. (私は此の字書の編輯に一身を献げてゐた)

He possessed himself (took possession) of his brother's estate. (彼は彼の兄の土地を自分のものにした)

(二)

Avenge と revenge:—

He avenged himself on his enemies. (彼は彼の敵に復讐した)

I must avenge my father. (私は父の讐を打たなければならぬ)

I will see you avenged. (私はお前の爲めに讐を打つて見せる)

He swears that he will be avenged on you sooner or later. (いつかお前に腹癒せをするを彼は誓つてゐる)

I will avenge you on them. (私はおまへの爲めに彼等に復讐してやる)

avenger の時は on の次のものに復讐するのである。revenge も同じく

to revenge one's self on.....for の形式を取る。for は理由を示す。

I will revenge myself on you for that. (私はあの爲めに君の復讐をするぞ)

I resolved to be revenged on him. (私は彼れに復讐するを決心した)

I will be revenged on him. (私は彼れに復讐してやる)

I will take my revenge on him. (私は彼れに復讐する)

I must revenge my father upon his enemy. (私は父の讐を打たねばならぬ)

(三)

Reflexive Object が省略されることもある。

[Transitive]

[Intransitive]

He feeds the dog on meat. (彼れは犬を肉で養ふ)

This dog feeds (itself) on meat. (此の犬は肉を食つて生きて行く)

The servant opens the school-gate at 7. (僕が学校の門を七時に開ける)

School opens (itself) at 8. (学校は八時に始まる)

Will you sell this book of yours. (君は君の此の本を賣るか)

This book sells (itself) well. (此の本は大變よく賣れる)

Voice.

(一)

動詞に Active Voice (能動) と Passive Voice (所動) との別がある。能動は『する方』にて所動は『される方』である。佛教で救済する方を能化と云ひ、救済される方を所化と云ふ。その能と所とである。He did it (彼がそれをした) は Active Voice である。It was done by him (それが彼によりてなされた) は Passive Voice である。これで分る如く『される』意味を作るには is とか was とか云ふ『ある』"to be" と云ふ動詞に過去分詞をつけるのである。

日本語でも『あの女は離縁された』と云ひ、『泥棒が金を取つて逃げた』と云ふ。上は passive すなはち所動或は受身であつて、下は Active すなはち能動である。

Be (is, are, was, were, [その他 has been, have been, had been, will be, shall be, may be, would be, should be, might be, will have been, shall have been, would have been, should have been, might have been]) + 過去分詞 (Past Participle)

A horse was killed. (馬が殺された)

This clock is wound up every Sunday. (此の時計は日曜毎に巻かれる)

He was arrested. (彼は捕縛された)

It will be opened to-day. (今日開會せらる)

Preparations are being made. (準備されつゝあり)

以上の例で云へば was は Be の動詞の變化である。killed は kill と云ふ動詞の過去分詞の形である。was killed で『殺された』となる。此の Active Voice は何であるかと云ふに前後の關係がなければ分らない。落雷で死んだのか、屠殺場で殺されたのか分らない。殺されたと云ふ方の事實を取つて云つたのである。併し一つの文章の中に含まれたる時、前後の關係で殺したものが何であるかは大凡見當が附くのである。これを利用して、たとへば各方面で準備でもされてゐる時、誰れが準備してゐるか一々擧げずもの事であれば、準備の方を主格として Preparations are being made to welcome the General (此の將軍を迎へる爲め準備中)と云ふのである。今その類の句を思ひ出づるまゝに列べて見やうならば、

No damage is reported. (人畜に死傷なし)

Nothing has yet been known. (未だ何にも分らない)

Much has been said about the question. (この問題に関しては既に云ひ古してゐる)

The death is announced of Count ——, which took place on Sunday at his home. (日曜に何々伯爵宅にて死去)

A general meeting of the shareholders of the —— company was held yesterday. (何々會社株主總會昨日開かれたり)

The fire was extinguished (or subdued; put under control; got under control; put out; got under) at five. (火事は五時鎮火)

A severe earthquake was experienced in Nagano yesterday. (昨日長野に強震あり)

Odawara was visited by a storm on the 25. (廿五日に小田原に暴風雨あり)

The sky was cleared up. (空が晴れた)

The sale of the March number of the "Chuwokoron" was prohibited for containing an article prejudicial to public morals. (中央公論三月號發賣禁止せらる)

Mr. —— was appointed Governor of Miye. (——氏三重縣知事に任命せられたり)

The Okuma cabinet was collapsed. (大隈内閣崩壊す)

A new enterprise of telegraphic service, which will be called by the name of "Kanso Dempo" (Deferred Telegram), will be inaugurated on the first of next month. (間送電報と稱するもの來月一日より實施せらる)

These delightful first impressions of our country were written to an English newspaper a few years ago by a young English poet. (此の我が國の第一印象は或る英國の青年詩人に依りて數年前或る英國新聞に書かれたるもの也)

The best contribution to the literature on the boy scout movement that has ever been published. (ボーイスカウトに關して今日まで出でたる中で一番よき本)

It is stated that the Maritime Exhibition will be opened on April 1. (海事博覽會は四月一日開會の由)

Much progress has been made in the method of teaching. (教授法に多大の進歩ありたり)

It may be added that..... (さ云ふことも附け加へておかう)

The Commonwealth itself is divided into six military. (濠洲共和國は六個の軍に別たる)

They decided on the measures to be taken at this moment. (此の場合取るべき方法を決定した)

(二)

今更に Active Voice と Passive Voice とを表にして見る。

[Active]

Carpenters build houses. (大工が家を建てる)

They make pen of steel. (人々は鋼鐵でペンを作る)

They (=people) say that..... (世間で云ふ)

They tell me that..... (皆んなが私に云ふ)

They make paper from rags. (人々は襤褸で紙を造る)

You must do it at once. (おまへは早速しなければならぬ)

[Passive]

Houses are built by carpenters (家は大工によりて建てらる)

Pen is made of steel. (ペンは鋼鐵で作らる)

It is said that..... (この由)

I am told that..... (さ私は聞いてゐる)

Paper is made from rags. (紙は襤褸で造らる)

It must be done at once. (それを早速にされればならぬ)

此くの如く見て来れば Active Voice のものを Passive に代へるのは容易な事である。B: の動詞に過去分詞をつけて by..... とすればよいわけである。併し如何なる事でも Active を Passive に直して文章になる事考へてはならぬ。文章を書いてみて、此處は Active にしやうか Passive にしやうかさ云ふのに苦心を要するのである。たとへばペンは鋼鐵で作るさ云ふのを they make pen of steel でもいゝやうなものゝ、原文の調子に近からしむる爲めには Passive にして、Pen is made of steel とする方がよいのである。此の場合 Pen is made of steel by them とすれば元のまゝを逆にしたのみであるが、by them (其の他

by you, by us 等)を Passive の時には切りすて、了ふ方がよいことがある。おまへがしなければならぬ事が明瞭である時には It must be done at once と云ふ方が It must be done by you at once とわざわざ by you を入れたよりよいのである。The summit of the mountain was reached at 3 p.m. (=We reached the summit of the mountain at 3 p.m.) [午後三時に頂上に着いた]として by us は省くのが普通である。序だから言ふが日本文では此の例文の如き場合には『一行が頂上に着いたのは午後三時であつた』と云ふことも屢々見受けるが之を It was at 3 p.m. that we reached the summit としては餘りに午後三時を強め過ぎてよくない。やはり上に書いたやうに書けばよいのである。

(三)

次の如き場合には Active Voice の Objective Complement が Passive Voice では Subjective Complement となる。

[Active Voice]

They made him a prisoner. (彼等は彼を捕虜とした)

They caught the tiger ^{alive} active. (彼等はその虎を生擒にした)

第一の例では Active Voice では they made him と云つてその him を何としたか、a prisoner としたと云ふので him と云ふ object の complement である。所が Passive となつては He was made の he が a prisoner とされたと云ふので a prisoner は he すなはち subject の complement である。第二の例も同様である。

前置詞付き動詞 (Prepositional Verb) 或は合成動詞 (Compound Verb) と稱するものがある。

[Active]

They laughed at her. (皆んなは彼女を笑つた)

He wrote to Jiro. (彼は次郎に手紙をやつた)

[Passive Voice]

He was made a prisoner. (彼は捕虜とされた)

The tiger was caught alive. (その虎は生擒にされた)

第一の例では Active Voice では they made him と云つてその him を何としたか、a prisoner としたと云ふので him と云ふ object の complement である。所が Passive となつては He was made の he が a prisoner とされたと云ふので a prisoner は he すなはち subject の complement である。第二の例も同様である。

[Passive]

She was laughed at by them. (彼女は皆んなに笑はれた)

Jiro was written to. (次郎は手紙を受けた)

We sent for the doctor. (いつも
の醫者を呼びにやつた)

I lost sight of it. (私がそれを見
失つた)

The authorities have *inquired into*
the case. (當局は此の事件を
調べた)

I cannot *depend upon* my brother.
(私は兄貴をたよりにすること
出来ない)

The doctor was sent for. (醫者が
呼ばれた)

It was lost sight of. (それが見え
なくなつた)

The case has been *inquired into*
by the authorities. (此の事件
は當局に依りて調べられた)

My brother cannot be *depended*
upon (by me). (兄貴はたよりに
ならない)

(四)

B+過去分詞——さ云ふ形式以外に次の如き Passive の形がある。

(1) Get+過去分詞 (by —— さ云ふことを省く)。

How did you get hurt? (どうして負傷をなすつたの)

I got severely reprimanded. (ひどく叱られた)

(2) Have or Get+目的+過去分詞。

I must get my watch repaired. (私の時計を直させなきゃなら
ない)

I went to Hongo to have my hair cut. (頭を刈りに本郷へ行つた)

I had my purse stolen yesterday. (昨日錢入れを盗まれた)

I had my cane broken. (私の杖が折られた)

(3) Become+過去分詞。

He became mad. (氣狂ひのやうになつた)

It became known that his dismissal was due to it. (彼の免職が
その爲めであることが分つた)

(4) Make+目的+過去分詞。

I could not make myself understood because of my poor
vocabulary. (貧しい單語で私の思ふことを傳へることは不
可能であつた)

(五)

We are determined to go:—

(我々は行かうと決心してゐる)

Determine などは we determine さ云はないで、we are determined
さ passive の形にするのである。併し意味は active である。これに
屬する字は、determined (決心してゐる)、resolved (決心してゐる)、
inclined (.....せんと傾いてゐる)、disposed (.....せんとしてゐる)、
interested (興味を有してゐる)、connected (關係してゐる)、agreed (一
致してゐる)、acquainted (知合になつてゐる)等である。つまり鹿爪ら
しく云へば自動詞の complement さして此等の字が用ゐられる時は、
意味は active であるさ云ふのである。

We are determined (or resolved) to kill him. (我々はあいつを
やつける覺悟だ)

[併し he determined to come; this circumstances determined him to
study law の如く云ふ]

I am inclined to think so. (私はまあさう考へる)

I do not feel disposed to lend him any pecuniary help. (金なん
ぞ彼れに貸してやらうなど云ふ氣にならない)

I am interested in his proceedings. (彼れの處置に利害關係が
ある)

I am (greatly, deeply, very much) interested in that book. (その
本が大層おもしろい)

It is beyond doubt that our countryman will become interested in
these social problems in the near future. (近き將來に我が國
人が社會問題に興味を有するやうになることは疑のない事
だ)

We are quite agreed. (我々一同賛成である)

[併し、I agree entirely with you; I agreed to the demand; all religions
agree in asserting; the terms were agreed upon]

We are agreed that everything must be done now to settle it.

(それを解決する爲め今日あらゆることが爲されざるべからざることに吾人の意見は一致してゐる)

【註】 Every man in the jury was agreed that..... と單數の every man を用ゐてそれが agree したことはおかしいから All men were agreed としなければならぬ、互ひに agree するには二人以上を要すること無論である。

I am acquainted with him. (私はあの人と知合です)

I have become acquainted with him. (彼れと懇意になつた)

How came you (to be) acquainted with him? (どうして懇意になつたか)

Be assured! (安心なさい)

Are you connected with that affair? (あの事件と関係がありますか)

(六)

ある英語の詞は日本語の意味では Active であるが、英語の場合には Passive の形を用ゐねばならぬ。Where were you born? (何處で君は生れたの?)ときくと、I borned in Tokyo (私は東京で生れた)と答へる中學生が十人に一人はあると思ふ。born などは was born と云はねばならぬのである。日本語になるに生れたと Active に用ゐ、英語では産まれたと Passive に用ゐるのである。

I was born in 1870. (私は一八七〇年の生れです)

【註】 我々は明治元年を 1868 年と記憶してゐる必要がある。

He was drowned. (彼は溺れた)

She was taken ill. (彼女は病氣になつた)

I must be revenged. (私は讎を報ぜねばならぬ)

I was surprised at the sight. (それを見て私は驚いた)

I was satisfied with it. (私はそれに満足した)

She was married to a doctor. (彼女は醫者に嫁いた)

【併し She married him; He married her; She is going to get married; He has been married these two years)

The tommy was wounded. (此の英國兵は負傷した)

【註】 英兵のこゝを國人が親しみを寄せて、Tommy Atkins, 略して Tommy と云ふ。A tommy, tommies の如く複數にも用ゐられる、初め軍隊名簿の姓名の所に例として Tommy Atkins と書いたのが起原であるさうである。佛兵のこゝを piou-piou と呼ぶ。

She was dressed like a geisha. (彼女は藝者のやうな装をしてゐる)

(七)

Dative Verbs といふのがある。それは二重の目的 (Double Object) を有する他動詞 (Transitive Verbs) であること云つてもよい (156 頁参照)。例へば I forgave him his faults (私は彼の過を宥した) に於て him と his faults との二重の目的を取り得るを以て、forgive は Dative Verb である。Active Voice に於て二重の目的を取り得る時は、Passive Voice の時に尙一の目的を取ることが出来る。之を Retained Object と云ふ。

(a) Active Verb の間接目的が Retained Object である場合:—

Active Verb

Passive Verb

I forgave him his fault.

The fault was forgiven him by me.

We allowed him two yen.

He was allowed two yen by me.

(b) Active Verb の直接目的が Retained Object である場合:—

Active Verb

Passive Verb

I forgave him his fault.

He was forgiven his fault by me.

We allowed him two yen.

He was allowed two yen by us.

Mr. Kroupensky was granted an audience by the Empéror. (クルーペンスキー氏は陛下に謁見仰つけられたり) = Mr. Kroupensky was received in audience by the Emperor.

He was taught German when he was a boy. (彼れは子供の時獨逸語を教へられた) = His father taught him a German when he was a boy.

Taro was awarded a prize. (太郎は賞美を與へられた) = A prize was awarded to him.

(A)

或る自動詞は佛蘭西の語法の如く Active の意味であるのに She is gone (彼女逝けり) の如く Passive の形で用ゐられる。これは She has gone の義である。He is come (彼れは来てゐる)、he is dead (彼既に亡し)、Tsingtau is fallen (青島陥落す) の如きは同種の例である。

練習問題

下の Voice を變へよ。 *A large audience attended the lecture.*
(1) The lecture was attended by a large audience.

(講義は大勢の聴講者があつた) [東高師、大正 3]

【註】 a large audience の audience は集合名詞である。此處彼處或は幾度も聴講者を云ふ時は audiences と云ふ。劇場の観客も英語では audience と云ひ、見物でなく聴客である。

(2) All the students must attend to these instructions.

(凡ての學生は此等の命令に注意せねばならぬ)

[同上]

【註】 attend to a book, to his business, to his commands (or orders), to his directions, to a lecture, to his lessons, to the matter, to his work 等の attend to は『注意する』の義。

(3) His friends took care of him.

(彼の友達はその面倒を見た) [外語、大正 2]

(4) They say that the Emperor has paid him a visit.

(天皇陛下は彼れを訪問遊ばされたと云ふ話だ)

He was gone by me.
(5) I made him go. [同上]

(私は彼をして行かした) [海經、大正 2]

(6) Death put an end to all his sufferings.

(死が凡べての彼れの苦痛を去つた) [同上]

【註】 all his sufferings と云ひて、his all sufferings と云はず。

(7) This subject has interested me greatly.

(この問題が私に大いに興味を起させた)

[小樽高商、大正 2]

(8) The lamps are put out at ten every night.

(ランプが毎夜十時に消される) [海兵、大正 2]

(9) I teach him English three times a week.

(私は一週に三度彼れに英語を教へる) [六高、41]

(10) He told us a strange story.

(彼れは私達に不思議な話をした) [八高、41]

【答】

(1) A large audience attended the lecture.

(2) These instructions must be attended to by all the students.

(3) He was taken care of by his friends.

(4) It is said that a visit has been paid him by the Emperor or he has been paid a visit by the Emperor.

(5) He was made to go.

(6) All his sufferings were put an end to by death.

(7) I have been interested by this subject greatly.

(8) We (or they) put out the lamps at ten every night.

(9) He is taught English by me three times a week.

(10) A strange story was told us by him.

Mood.

Mood は様を譯す人があるけれども、Mood と云ふ方が一般に通りがいゝ。吾々が動詞で或る状態なり働らきなりを云ひ表はす場合に事實そのまゝを述べること、例へば The sun shines in the daytime (太陽は晝輝く)、He wrote a letter (彼は手紙を書いた) の如きがあり、又 If he were rich, he would help me (若しあの人金が持たつたら私を補助してくれるでせう) の如く假定想像を述べるもの、及び Can you do it? (お

まへはそれを爲し得るか) Yes, I can (はい出来ます)のやうに可能な事
に関するもの、また Do it now, or never (今それを爲せ、然らずんば
爲さるゝに如かず)の如く命令的なものがある。以上は四種の Mood で
あつて、Indicative Mood, Subjunctive Mood, Potential Mood, Imperative
Mood の四種である。

文法家 Pain などは此の中の Potential Mood を設くることの不合理
なことを述べてゐる。I may see さか I can see さか云ふものが
Potential Mood であるが、實際に於て此等は Indicative か Subjunctive
かに隷屬するものである。故に殊更 Potential Mood などを設ける必
要はない。若し can や may の爲めに Potential Mood (可能様)を設け
るならば、I must go や I ought to go には obligation mood の別を設け、
I will go や you shall go は mood of resolution と呼べる可きであらうと
Bain は云つてゐる。obligatory mood とは『.....ねばならぬ』を意味す
る mood と云ふこと、mood of resolution は決心をなす mood と云ふこ
とである。

I see a bird (私は一羽の鳥を見る)と云ふのは條件付ではない。これ
は Indicative である。If I see a bird と云ふならば條件付である。
conditional である。此を Subjunctive Mood と稱する。Imperative
Mood は command (命令)、desire (欲望)、entreaty (頼み)等を示す様で
ある。元來 Imperative Mood の Imperative と云ふ字は誤解を來し易
い。Imperative とは云ふものゝ、命令と同時に『かうしてくれ』と云ふ
意味にも用ゐられるからである。

Tense. .

Tense (時) とは動詞のあらはす事が現在か過去か未來かそれぞれの
時の變化を云ふのである。

- (1) 現在 (Present Tense).
- (2) 過去 (Past Tense).
- (3) 未來 (Future Tense).

欠

欠

(二)

又 the Present Progressive 或は Progressive Present を云つて、ing をつけたのがある。go が going となるやうなものである。これは一時的の動作を示す。例へば I am going to school now (私は學校へ行く所です) や、they are learning English now (彼等は今英語を學びつゝある) などはその例である。

下の如き用法にては Progressive Form (進行形) は用ゐないのである。

I am here. (私は此處にゐる) [I am being here とは云はず]

I know that. (私はそれを知つてゐる) [I am knowing that とは云はず]

I understand what you say. (私には君の云ふことが分る) [I am understanding とは云はず]

I see. (分つた) [I saw や I am seeing などとは云はず]

I hear that he has left for Kyoto. (彼の人が京都に立つたを聞いた) [I am hearing や I heard とは云はず]

I love you. (私はおまへを愛する) [I am loveing とは云はず]

I have it. (私はそれを持つ) [I am having it とは云はず]

I forget that. (忘れて一寸出ない) [I am forgetting とは云はず]

I have forgotten all about it. (すっかり忘れて了つた) [I have been forgetting とは云はず]

I forgot that. (さうさう忘れてゐた) [I was forgetting とは云はず]

(三)

來るさか行くさかを意味する如き動詞と共に或るきまつた近き未來のことを云ひ表はす時に、現在の形を以て未來の形に代へることが出来る。

I am off (=shall start) to-morrow. (私は明日立つ)

Count Okuma returns (=will return) to the capital next week.

(大隈伯は來週歸京せらる)

次の如く進行形は會話には普通用ゐられる所のものである。

Are you going to-morrow? (あした行くんですか)

When is he leaving here? (あの人はいつ立ちますか)

He is coming to-night. (あの人は今夜來ます)

(四)

『戦争が破裂するであらう時には』とあつても when war will break out としてはならぬ。Let us all take arms when war breaks out (戦争になつたら我等皆な劍を執らん)の如く when war breaks out としなればならぬ。同様に I will come if it is fine to-morrow (あした天氣でしたら來ます) と云つて if it will be fine とは云はないのである。その他 you must finish it before he comes (あの人が來るまでにやつて了はばならぬ)と云つて before he will come とは云はぬ。I will stay here till he comes (あの人が來るまで私は滞留する)と云つて till he will come とは云はぬ。又 Please let me hear from you often while you are (not will be) in England (おまへが英國に居る間に度々手紙をくれたまへ)、I will see a doctor as soon as I reach (not shall reach) there (其に着けばすぐ醫者に見て貰はう)と云ふのが正しいのである。斯くの如く if, when, before, till, while, as soon as の如き語で初まる單純なる未來 (Simple Futurity) を示す副詞句 (Adverbial Clause) では現在動詞を用ゐるのである。併し名詞句 (Noun Clause) では此の用法は適用されないで、矢張り、I doubt it it will be fine to-morrow (私は明日晴天であるが、どうかを疑ふ)と云ひ、It is difficult to predict when war will break out (いつ戦争が初まるかを豫言することは困難だ)と云ふのである。初めの例では when war breaks out (戦争が初める時に)と云つて劍を執る時を示してゐるので副詞句である。然るに when war will break out は『いつ戦争が初まるか』と云つてそれを豫言すると云ふ構文であるからこれは名詞句である。それだけを一つの名詞と見て、それを豫言す

るものと考へればいゝのである。かう云ふ場合には when war breaks out でなくて、when war will break out なのである。

(五)

普通 I said so (私はさう云ひました) の如く肯定には用ゐ、I did not say so と否定には用ゐれども、the Emphatic Form (強めた形) では I did say so の如く用ゐるのである。同様に『私は憶れてゐます』は I love you であるが、『私はほんさうに憶れてゐますよ』は I do love you と云へばいゝ。尤も I love you だつて場合によれば強く聞えるのだから規則的に云つて了ふことは出来ない。

疑問 (do you think so [おまへはさう考へますか]の如く) 又は否定 (I do not think so [私はさうは考へない]の如く) を表はすのでなく單に肯定的叙述の場合に “do” をかりて來るのを the Emphatic Form (強めた形) と云ふのである。これは現在及び過去に限るのである。

	【單 數】	【複 數】
現 在	I do think	We do think
	You do think	You do think
	He does think	They do think
過 去	I did think	We did think
	You did think	You did think
	He did think	They did think

例:-

I did try, indeed. (いかにもたさうしました)

He did go, I am sure. (たしかにあの人は行きました)

(六)

英文の語脈には漢文の語脈に似た所が少なくない。たゞせば飛行家スミス氏來ると云ふやうな語調は英文にもあつて the Aviator Mr. Smith Comes と新聞の見出し (head lines; heading; head) には書く。又『英船撃沈せらる』と云ふを英文では同じやうに A British Steamer Sunk (is

sunk の略)と云ふ。之を Smith came せし、Steamer was sunk せして
も無論正しいのであるが、新聞などの見出しでは現在に用ゐる方が普
通である。だから英語をやるものに漢文はいらないなど云ふのは愚
論である。漢文の語脈を知つてゐると、英文を書くのに大變都合がよ
い。ゼ、ヘラルド、オヴ、エシア社長頭本元貞氏にしる、同記者にし
て櫻井中尉の肉弾英譯者として有名な本田増次郎氏にしる、サヤメ
ン、タイムス主筆高橋一知氏にしる皆な其の初め漢文を充分にやつた
人である。漢文の無駄のない、一々燒點の合つたやうな、力のこもつ
た、落ちのない所が、英文を書く上にも大いなる利益を齎らすもので
あると私は考へる。

漢文に伴うもう一つの特徴は歴史的現在 (Historic Present) と云ふも
のである。『大軍を率ゐて來る』と云ふやうに歴史物は現在で書くのが
多いが、英文にも同じ呼吸がある。

The French army fell back rapidly from all sides at once. The
whole bends, cracks, snaps, floats, rolls, crashes, falls, hurries,
plunges.

これは佛の文豪 Hugo の作の英譯から採つた例であるが、初め佛軍
速かに退却したりと過去で書いてゐて、その有様を叙するに於てい
つか現在になつてゐる。

(七)

新聞の見出しなど A British Submarine Is Sunk の如く現在を用ゐる
ことの多いことを述べたが、「to be + 過去分詞 or 副詞」は現在完了の
意味で用ゐられるのである。

He is gone. (彼の人は行つて了つた)

He is come. (あの人は來てゐる)

My watch is gone (= is missing). (私の時計が何處かへ行つた)

Many people are assembled there. (澤山の人が其處に集つてゐ
る)

The book is out. (その本は出た)

The flower is out. (花が咲いた)

The lamp is out. (ランプが消えた)

The examination is over. (試験はすんだ)

(八)

How do you do? (御機嫌はどうですか) Thank you, I am well (有り難
う、丈夫です) とある How do you do? の初めの do は Auxiliary Verb
(助動詞) である。『如何に汝は爲しなすか』と私の子供の時には教つた
ものである。do が過去になれば did である。How did you do it?
(如何やうにそれをしたか) の did は助動詞で、次の do が本動詞であ
る。Do you know it? (汝はそれを知るか) yes, I do (= I know it) 等の
do も助動詞である。物を尋れる時には You know it? や Know you
it? などとは云はずに do を用ゐて Do you know it? と do を主格の前に
(すなはち一番最初に) 持つて來て、主格の次に本動詞を置くのである。

否定の時も do を用ゐて、I do not know it のやうに云うのが普通で
ある。尤も I hope not さか、I know not what to do さか云ふけれども、
まづ大體否定の時には助動詞を件ふものと思つておればよい。こゝで
注意しておきたいのは What did you do? (何をしたか)、Where did
you go? (何處へ行つたか)、Why did you do it? (何故其れをしたか)、
How did you do it? (如何やうにそれをしたか) のやうに皆な do (或は
did) と云ふ助動詞が入用であるが、who であるか Who did it? (誰れ
がそれをしたか)、Who have it? (誰れがそれを持つか)、と云つて助
動詞を用ゐないのである。Who did it? の did は助動詞ではなく本動
詞である。

Don't は do not の略であり、didn't は did not の略である。' は
apostrophe と云つて省略のしるしである。禮儀作法を書いた書物に
"Don't" と云ふのがあつた。勿れ集までも譯すべきものである。さて
Don't talk noisily (さわがしく話すな) とある場合や I don't think so
(私は左様は考へない) とある場合は Do not talk noisily とし、I do not
think so としても前に do not の位置に變りはないが、尋れる時になる

Yes. No, 冊子、高田千歳著、英語會話、會話
編り見よ

さ、Don't you know it? (おまへはそれを知らないか)とし、Do you not know it? とするのである。すなはち do not の位置が第二の場合では you を挿むのである。Do you not know it? (君はそれを知らないか)と尋ねられると、日本語ならば『はい、知らない』と云ふが、英語では何でも否定ならば No で、肯定ならば Yes であるから、Do you not know it?—No, I do not. Do you know it?—Yes, I do と答へるのである。これが日本語とは正反對である。

會話では He don't know it の如く don't を用ゐることも屢々である。又次の會話句を能く注意してゐて貰ひたい。

You know him, don't you? (君はあの人を知つてゐるでせう)

You don't know him, do you? (君はあの人を知るまい)

Your father teaches in this college, doesn't he? (君の父は此の大學で教へてゐるんでせう)

It is beautiful, isn't it? (きれいぢやありませんか)

A. She is a pretty girl. (あの女はきれいだ)

B. Isn't she? (全くですれ)

(九)

一般現在に関する和文英譯の例：—

(1) 人によつて好き好きです。(Tastes differ, I am sure)

(2) 今度日本に來たのは初めてですか。(Is this your first visit to our country?)

(3) アメリカの女のきれいなのはかたちや御化粧よりも顔のいきいきしてゐるのに由るのです。(The beauty of the American women is due much more to the animation of the face than to form or colouring)

(4) 此の川には魚が澤山居ます。(This river abounds in fish)

【註】 abound in が或る有名な字書に『の中に充滿せる』として出やうとした。私はその校正刷を或る英語の老大家の家で見て『を以て充滿せる』とせればならぬことを手紙で送つたことがある。174

(5) あの婦人はまだやつと廿五になるかならない位です。(She is a lady of scarcely five-and-twenty summers)

(6) 私の聲は大きくて遠方まで聞える。(My voice is loud and can be heard far off)

(7) これは西班牙語の本だ。(This is a Spanish book)

(8) さうかい。(Is that so?)

(9) まあいゝさ。(That's all right)

(10) 私の云はうさしたのはそれですよ。(That's what I mean)

(11) 何だ、馬鹿馬鹿しいことを云つてゐるな。(Why! you talk ridiculous stuff)

(12) 値段はいくらです。(How much do you ask for it?)

(13) 江の島へ行くにはこれでいゝのですか。(Is this the way to Enoshima?)

(14) 大評判なことです。(It is a notorious act)

【註】 これはあの人には約束を守らない人だとか何だとか悪い意味の時云ふのである。notorious pickpocket (有名な巾着切り) の如く notorious は悪い意味に用ゆ。普通の有名なのは a famous writer, a well known dramatist, a noted philosopher 等の如く、famous, well known, noted 等を用ゆ。notorious の名詞は notoriety である。

(15) 五月二日發巴里來電に曰く…… (A Paris dispatch of May 2 says. A dispatch from Paris dated May 2 says. Advices from Paris with dates to May 2 say)

【註】 despatch は英國風の綴である。又 telegram, cablegram, message 等も同様に用ゐらる。Advices は常に複數の形を用ゆ。『五月二日發巴里來電』なるを以て過去の事實なりと雖も said と云はずして says と云ふのがきまりである。

(16) 國民新聞はかくの如き事件の發生を嘆じたり。(The Koku-min regrets that such an affair has occurred)

【註】 新聞論說の大要などを記す場合 the paper says, the paper